

長野市埋蔵文化財第43集

な ん ぐ う

# 南宮 遺跡

1992・3

長野市教育委員会

# 序

社会生活の変化とともにもの豊かさから心の豊かさが求められて久しい今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない必須要件の一つであり、国民共有の財産であることは言うまでもありません。市民生活の充実、公共の福祉という目的を達成するため、民間・公共を問わず多くの開発事業が実施されることになりますが、その陰で失われてゆく土地に刻まれた歴史－埋蔵文化財－に対し、私達はその保護・保存と公開という点において大きな責務を負っているともいえるでしょう。

さて、ここに都市計画街路五明西寺尾線建設事業に伴う緊急発掘調査を実施いたしました発掘調査報告書を『南宮遺跡』として上梓できましたことはご同慶のいたりと申せましょう。発掘調査は本年度6月から8月にかけて実施いたしたもので、調査範囲は遺跡の破壊が懸念される部分という限定されたものでありますましたが、重要な遺構や遺物が発見されております。これらの成果は本報告書に記載しておりますので、埋蔵文化財に対する一層のご理解と地域文化向上のための一助としてご活用いただければ、この上ない喜びであります。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまでご指導・ご支援いただいた関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成4年3月

長野市教育委員会教育長 奥村秀雄

## 例　　言

- 1 本書は、長野市（篠ノ井支所土木課担当）が施工する都市計画街路五明西寺尾線建設事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、長野市篠ノ井東福寺字南宮860-1番地他に所在する。
- 3 発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直営で実施し、その期間は平成3年6月4日～8月22日（実質44日）である。
- 4 本書は、調査によって確認検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。
- 5 II章「遺跡の環境」のうち地理的環境・歴史的環境については、森嶋稔（千曲川水系古代文化研究所主幹）の論考を『田中沖遺跡II』より転載した。
- 6 遺構図は、コーディクシステム法により有写真測図研究所に委託し、遺構図結線は当センターで実施した。 $1/20$ の縮尺で基本図をとり、 $1/80$ の縮尺で掲載した。
- 7 土器類については、 $1/4$ で図示し、石製品・鉄製品・土製品は $1/3$ である。土器実測図中、断面つぶしあるものは須恵器、黒アミ掛けのものは灰釉陶器、白抜きのものは土師器を表現する。
- 8 本文中の調査日誌・遺構分布図等に略号を用いた。SBは住居址、SKは土坑、SDは溝址の意味である。
- 9 調査にかかわる諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

## 目　　次

序	
例言・目次	
I　　調査の経過	1
1　調査の事務経過	1
2　調査日誌	2
3　調査の体制	5
II　　遺跡の環境	6
1　地理的環境	6
2　歴史的環境	9
3　川中島扇状地扇端部の遺跡	10
4　調査地周辺の環境	12
III　　調査	13
1　分布調査	13
2　遺構の分布	14
3　遺構と遺物	17
4　遺物観察表	64
IV　　結語	69

## 挿 図 目 次

1図	川中島扇状地と調査地	6	32図	15号住居址、ピット群2実測図	42
2図	川中島扇状地内縁部の微高地	7	33図	16号住居址実測図	43
3図	川中島扇状地の遺跡群	9	34図	16号住居址出土土器実測図	43
4図	川中島扇状地扇端部の遺跡範囲 推定図	11	35図	17号住居址実測図	44
5図	調査地周辺の字名	11	36図	18号住居址実測図	45
6図	調査地周辺の地形及び試掘坑	13	37図	19号住居址、6号溝址実測図	46
7図	遺構分布図	15	38図	19号住居址出土土器実測図	46
8図	1号住居址、ピット群1実測図	17	39図	20号(22号)住居址実測図	47
9図	2号住居址出土土器実測図	19	40図	20号・22号住居出土土器実測図	48
10図	2号・3号住居址実測図	20	41図	21号住居址実測図	48
11図	第3号住居址出土土器実測図	23	42図	21号住居址出土土器実測図	49
12図	3号住居址出土土器実測図	24	43図	23号住居址実測図	49
13図	4号住居址、3号溝址実測図	25	44図	24号住居址実測図	50
14図	5号住居址実測図	26	45図	24号住居址出土土器実測図	51
15図	5号住居址出土土器実測図	27	46図	25号住居址実測図	52
16図	6号・11号住居址実測図	28	47図	25号住居址出土土器実測図	52
17図	11号住居址出土土器実測図	30	48図	26号住居址実測図	54
18図	7号住居址実測図	31	49図	ピット群2出土土器実測図	54
19図	7号住居址出土土器実測図	32	50図	2号・6号土坑実測図	55
20図	8号住居址出土土器実測図	32	51図	4号土坑出土土器実測図	55
21図	8号住居址実測図	32	52図	3号溝址出土土器実測図	57
22図	9号住居址実測図	33	53図	1号・3号土坑、 1号・2号溝址実測図	57
23図	9号住居址出土土器実測図	34	54図	4号溝址出土土器実測図	58
24図	10号住居址実測図	35	55図	4号溝址実測図	59
25図	10号住居址出土土器実測図	36	56図	5号・(7号)号溝址実測図	60
26図	12号住居址出土土器実測図	37	57図	6号溝址出土土器実測図	61
27図	12号住居址、1号土坑実測図	37	58図	8号溝址実測図	61
28図	13号住居址出土土器実測図	38	59図	検出面出土遺物	61
29図	13号住居址、4号土坑実測図	38	60図	南宮遺跡出土石製品土製品	62
30図	14号住居址、5号土坑実測図	39	61図	南宮遺跡出土鉄製品	63
31図	14号住居址、5号土坑 出土土器実測図	41			

# I 調査の経過

## 1 調査の事務経過

平成2年7月20日付 「埋蔵文化財発掘調査に係る事業計画について（照会）」を関係部局・機関へ送付する。

9月13日付 篠ノ井土木課より「都市計画街路五明西寺尾線の工事を今年度から着手する予定」との回答がある。この開発事業地は從来から遺跡が周知されておらず、また分布調査も実施されていない空白地でもあったので、折り返し試掘を伴う遺跡存在有無の確認調査が必要である旨連絡する。

10月9日 試掘調査地点確認のため現地協議を行なう。若干の未買収地があるため、小型重機を使用し、搬入路のある地点4ヶ所を選定する。

11月17日 試掘を伴う分布調査を実施する。大字東福寺字南宮地籍において、土師器壊の小破片が採集され、試掘地において遺物包含層が確認されるに至り、新発見の遺跡として認知する。南宮遺跡と称する。

11月20日付 「都市計画街路五明西寺尾線内の埋蔵文化財分布調査報告書」及び記録保存のための発掘調査計画書・同予算書を提出する。前記を要約すると「試掘調査の結果別添地図（略）アミ部が遺跡範囲と思料され、事業着工前に保護策が必要です」「保護対象面積3,000m<sup>2</sup>のうち1,200m<sup>2</sup>以上を発掘調査し、記録保存をはかる」「調査の作業日数 発掘作業42日、整理作業42日、合計84日」「調査に要する費用9,360千円」である。付記として「調査の結果重要な遺構などが検出されたときは、その保存について改めて協議するよう配慮する。」

平成3年4月11日付 長野市建設部道路課長と長野市教育委員会埋蔵文化財センター所長名で「五明西寺尾線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結する。

5月10日付 文化財保護法第57条の3第1項の規定による「埋蔵文化財発掘の通知について」が長野市長塚田佐（篠ノ井支所土木課担当）より提出があり、平成3年5月29日付で「工事に先立ち発掘調査を実施し記録保存をはかる」旨の当該遺跡保護に関する意見を付して長野県教育委員会教育長宛進達する。事業概要は「国道18号線と県道長野真田線を結ぶ都市計画街路全体延長2,500m・巾員25m」である。

6月5日付 文化財保護法第98条の2第1項の規定にもとづく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を長野県教育委員会経由文化庁長官宛提出する。

5月30日 作業員の募集回覧を東福寺区長会長に依頼する。時節、ブドウ・桃・リンゴの摘果作業・田植期の農繁期にあたり応募者が少ない。

6月4日付 重機・発掘調査機材の賃貸借契約書を池田建設（株）代表取締役池田一と締結する。

6月4日～8月22日 現地に於る発掘調査を実施する。稼動日数52日、調査日数44日。

6月12日付 長野県教育委員会教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」があり、「長野市長から通知のありました土木工事等については、別添写（略）のとおり発掘調査を行うこととしたいので、調査に際しては格別の御配慮をお願いします」

7月4日付 基準点測量・遺構測量の委託契約書を㈲写真測図研究所代表取締役杉本幸治と締結する。

8月28日付 発掘調査終了通知・埋蔵文化財拾得届・埋蔵文化財保管証を各関係機関へ提出する。

9月17日付 長野県教育委員会教育長より「埋蔵物の文化財認定について（通知）」がある。

9月25日付 「埋蔵文化財発掘調査費の決算見込書」を篠ノ井支所土木課長宛提出する。遺構分布範囲・遺構存在層・遺構数が当初見積より減少に伴い、当初予算額9,360千円から決算見込額6,460千円に変更する。

8月22日～平成4年3月31日 発掘調査報告書刊行に向けて遺物整理作業、遺構整図作業、修復収納作業、原

稿執筆等を行う。

3月30日 『南宮遺跡—市道五明西寺尾線建設地点一』を刊行し、発掘調査事業を完了する。

## 2 調査日誌

調査対象地中央付近を南北に横断する市道篠ノ井中335号線を境に西側をA地区、東側をB地区とする。

6月4日～7日 A地区西端から重機による表土除去作業を開始する。西側は旧水田の模様。A地区中央付近から東側は土壤の様子が異なって来たため、2ヶ所で深掘りを試みる。両者とも遺構とおぼしきものを確認したので、表土除去の深さを今まで通りとし進行する。

6月10日（曇・小雨） 発掘調査機器を搬入、器材置場兼休憩所用天幕を設営する。午後作業中止。

6月11日（晴） 調査地内整備（壁削り落し）作業を行う。作業員の確保が困難である。

6月12日（晴） 昨日の作業を継続する。

6月13日（曇・雨） 壁削り落し作業を継続するも降雨激しくなり、作業を中止する。

6月14日（曇） 昨日の降雨のため午前の調査を断念する。午後、A地区北東部の遺構検出作業を開始する。

6月17日（晴） SB1・2、ピット群1の遺構形態確認後、調査を開始する。SB1、ピット群完掘。

6月18日（曇） SB2の調査を継続する。

6月19日（曇） SB2の調査を継続する。もう1軒の住居址を内包している様子。SB3と呼称する。

6月20日（雨） 昨夜来の降雨にて作業を中止する。

6月21日（晴・曇） SB2の調査を継続し、ほぼ完掘する。この西側の遺構検出作業を実施し、SB4・5を確認する。

6月24日（曇・時々小雨） SB2の清掃後写真撮影する。遺構検出作業を継続し、形態が明瞭になったSB5の調査を開始する。旧水田床土下に遺構が展開する恐れがあるため本日より重機を搬入して、A地区西側の床土除去作業を開始する。

6月25日（晴） SB3の調査を開始する。SB4の形態を追求する。重機にて昨日の作業を継続し、終了後A地区南側を10cm程すきとる。

6月26日（晴） 真夏日とか暑い一日。SB3の調査を進める。SB4の調査を開始する。

6月27日（雨・晴） SB3の調査を継続する。炭化物が多混し、遺物の出土も多い。

6月28日（曇） SB3を完掘し、清掃後写真撮影を



I-1 6月17日



I-2 6月21日



I-3 6月28日

行う。SB 5 の調査を再開する。

7月1日（曇） SB 5 の調査を継続する。鉄刀出土。SB 6 の調査を開始する。

7月2日（曇） 昨夜激しい降雨あり、今朝まで小雨が残る。新たにSB 7 の調査を開始する。

7月3日（曇） SB 5 の柱穴等を精査し完掘する。SB 7 は調査を継続する。

7月4日（曇） SB 7 の完掘後、SB 5とともに清掃作業をし写真撮影を行う。SB 6 の調査を再開する。白磁碗が出土。新たにSB 8 の調査を開始する。

7月5日（曇・時々小雨） SB 8 の調査を継続する。SB 9・10の形態確認後、調査を開始する。

7月8日（曇） SB 9・10の調査を継続する。SB 9 は完掘後写真撮影を行う。

7月9日（曇） SB 10は完掘し、清掃後写真撮影を行う。SB 8 の調査を継続する。SB 10より白磁碗出土。

7月10日（曇） SB 8 の床面精査後写真撮影を行う。SB 6 と重複関係にある遺構（SB 11）の形態を確認し、調査を開始する。SK 2 の調査にかかる。

7月11日（曇・晴） 朝方小雨が残る。土器洗浄作業しながら待機する。SB 11の調査を継続する。SB 12の調査を開始する。遺構測量を実施する。

7月12日（雨） 作業中止。

7月13日（曇） 作業休み。遺構測量を実施する。

7月15日（晴・曇） SB 6・12の調査を継続する。SB 13の調査を開始する。SB 7 以東の遺構検出作業を行う。遺構測量を実施する。

7月16日（雨） 作業中止。

7月17日（曇・雨） SB 11・13の調査を継続する。午後時々小雨あり、土器洗浄作業と合せて前記調査を行う。

7月18日（雨・晴） 調査開始直後に一時降雨あり、土器洗浄作業しながら待機する。SB 11の調査を継続する。SB 13は完掘し、写真撮影を行う。

7月19日（晴・曇） SB 10・11の精査後写真撮影を行う。SD 1・2、SK 3 の調査を開始する。

7月22日（雨） 作業中止。

7月23日（曇） SD 1・2、SK 3 の完掘後写真撮影



I - 4 7月8日



I - 5 7月19日



I - 6 7月24日



I - 7 8月2日

する。SB14・15、SD 4 の形態を確認し、調査を開始する。

7月24日（曇） SB14・15の調査を進める。SB 4 を精査し、SD 3 を確認、調査完了後写真撮影を行う。

7月25日（曇・一時雷雨） SB14・15、SD 4 を完掘し、写真撮影を行う。A地区南東部付近の遺構検出作業を実施する。

7月26日（晴） SB16~18、SD 5 の調査を開始する。

7月29日（晴） SB17・18は完掘する。SB16、SD 5 の調査を継続する。SB19、SD 6 の調査を開始する。

7月30日（晴） SB16の床面を追求するも炭化物を多含する落ち込みがある模様。SB19の調査を進める。

7月31日（晴） SB16内の新たな落ち込み床面を追求する。SD 5 の調査を継続する。

8月1日（晴） SB16内の遺構をSB20とするが、新たな遺構（SB21）を確認する。SD 5 の調査を進める。本日よりB地区の表土除去・搬出作業を開始する（～7日）。

8月2日（晴） SB19・20の調査を継続する。SB 21、SD 6 の調査を開始する。

8月5日（晴） 都合により作業を中止する。

8月6日（曇・時々小雨） SB21、SD 6 の調査終了後、SB17以東を写真撮影する。B地区の遺構検出にかかる。

8月7日（晴） B地区の遺構検出作業を進め、SB22、SD 7 の調査を開始する。遺構測量を実施する。

8月8日（曇） SB22、SD 7 の完掘後写真撮影を行う。SB23~25の調査を開始する。遺構測量を実施する。

8月9日（晴） SB23~25の調査を継続する。SB14カマド及びSK 5 の精査を行う。

8月12日（晴） SB23~25の調査を継続する。

8月13日～16日 旧盆のため作業中止。

8月19日（晴） SB23~25の調査を継続し、SB23・25を完掘する。SD 8、SK 6 の調査を開始する。

8月20日（曇・雨） SB24、SD 8 の完掘により、現地に於る発掘調査を終了する。写真撮影。

8月21日（晴） B地区遺構の写真撮影、遺物の取り上げ、器材の撤集作業を行う。遺構測量を実施する。

8月22日（晴） 遺構測量結線図を作成し、現地に於る発掘調査を完了する。



I - 8 8月7日



I - 9 8月19日

### 3 調査の体制

（財）長野県埋蔵文化財センターが係る長野自動車道を除き、長野市内における緊急発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施し、南宮遺跡に於る組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	奥村秀雄
総括管理者	長野市埋蔵文化財センター所長	小山 正
庶務係	〃 所長補佐	山中武徳（契約・予算・決算等出納事務管理）
〃	職員	青木厚子（出納事務、庶務）
調査係	〃 係長（調査主任）	矢口忠良（発掘調査指揮、報告書作成）
〃	主事	青木和明
〃	〃	千野 浩
〃	〃	飯島哲也
〃	専門員	中殿章子
〃	〃	横山かよ子
〃	〃 （調査員）	森泉かよ子（遺物実測・整図・淨書・版組）
〃	専門主事	小松安和
〃	〃 （調査員）	羽場卓雄（発掘調査指導、土層実測、遺構結線）
〃	〃	太田重成
調査員	矢口栄子（遺物整理・実測）	
調査作業員	成沢孝井・酒井節子・近藤袈裟男・笠井敦子・酒井 徹・宮原孝子・脇坂智子・橋爪孝次・丸山清・小林利男・小松未喜子・鷺沢啓子・平林富子・小林ひとみ・酒井宏子・山崎佐織	
整理作業員	笠井敦子・山崎佐織	（以上順不同・敬称略）
遺構等測量委託	（有）写真測図研究所	

直接発掘調査に参加された方々のほかに、東福寺区長会長青木尚夫氏をはじめ区長の皆様、篠ノ井支所土木課小林信和・岩片弘充各氏からは発掘調査の実施に際し多大なご援助をいただいた。記して感謝申し上げます。



II-10 発掘調査参加者

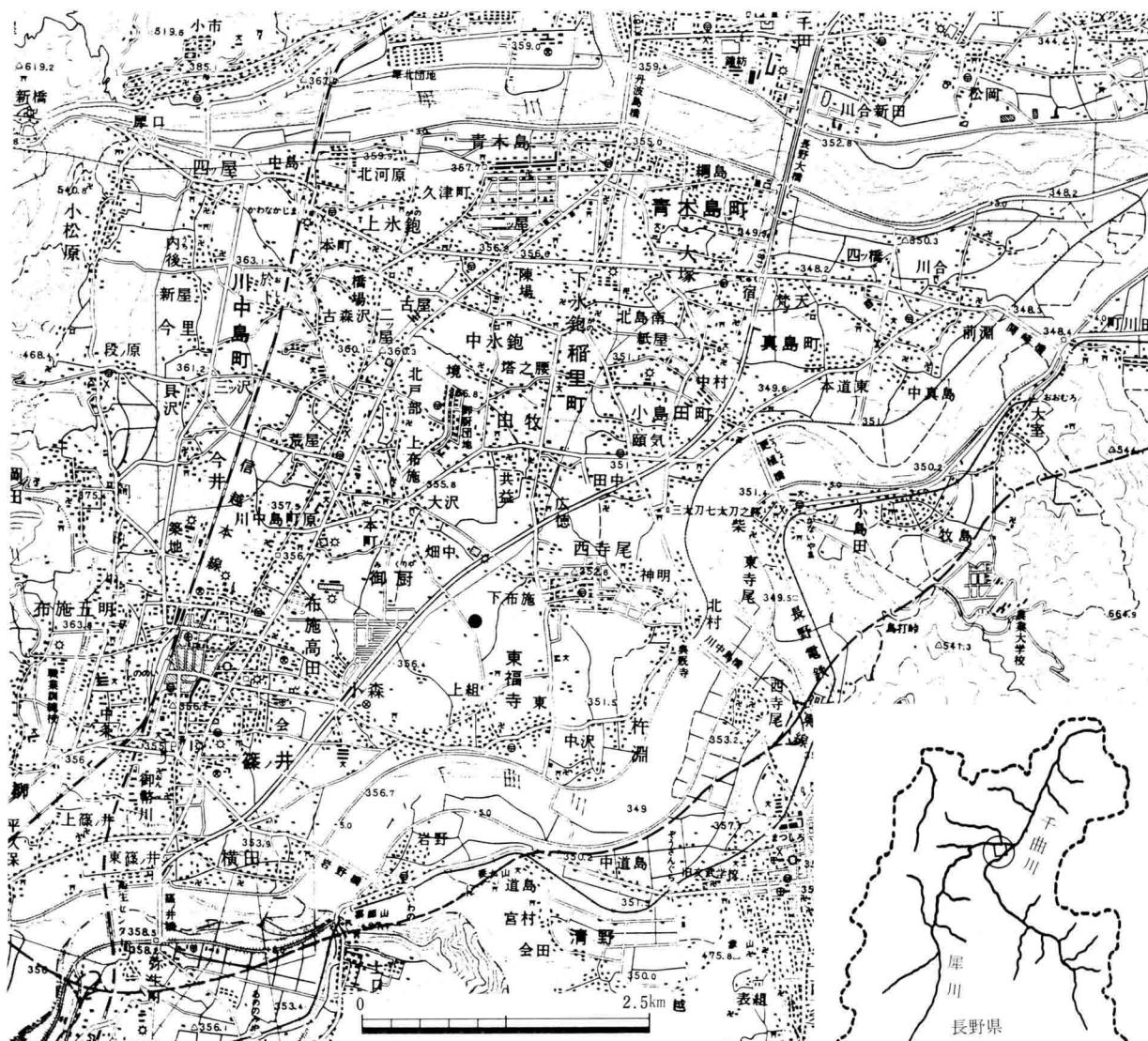
## II 遺跡の環境

## 1 地理的環境

信濃の中央部を縦貫し、中央山地を横切って東流する犀川が、細く曲流するV字谷から開放されるのは犀口である。犀口を扇頂とする、いわゆる川中島扇状地は、極めて巨大な地形を千曲川水系の中にしめている。千曲川の一支流である犀川は、中央山地の隆起運動にうち勝って東流する強力な浸蝕河川であるが、犀口をもってその浸蝕性は強力な堆積性となって、善光寺平中央部へと展開しているのである。その堆積力は極めて優勢であったと思われる歴史的状況である。

中央山地は第三紀末の海底堆積物によって構成されているが、それは第四紀の中葉より隆起をはじめ、陸化、造山運動を続いているように観察される。その隆起速度は中世末に至って若干鈍ったように観察されるが、それは次のような理由によるものである。

①古代、中世における犀川扇状地の堆積力は極めて強力なものであり、それによって千曲川は、右岸上信越山塊の山脚部をトレースするように流れていること。それは千曲川の浸蝕力より犀川の堆積力の方が優位にあるこ



### 1図 川中島扇状地と調査地（●印）

川中島扇状地の地表計測

	標高 m	距離 m	標高差 m	傾斜度 %	面積 km <sup>2</sup>		
唐猫	355	6,800	-25	0.36 (0.17°)	21.3	49.8	71.5
松代	352	8,100	-28	0.35 (0.15°)			
落合橋	340	9,900	-40	0.40 (0.18°)	21.7	28.5	
屋島北	325	13,000	-55	0.42 (0.18°)			

※犀口標高380mを基点としたもの

とを物語る。

②それが近世に入ると次第に犀川扇状地の堆積力が弱まったことが明らかである。その1つに千曲川は次第に山脚部からはなれて、かつて犀川堆積勢力のエリア内にと流路を移動していることによって把握できる。中世後



2図 川中島扇状地南縁部の微高地（「長野市防災基本図地形分類図」）

Fb 扇状地の微高地内 Fs 扇状地内の低地 nl 自然堤防 o 旧河道  
k 高水敷 t 低水敷 f 沼澤平野



## II-1 調査地 (◎) 周辺の航空写真

期の松代・海津城も元は水城であったとされ、松代荒神町には現在でも舟つき場の石垣が残されている。

③江戸初期、松代藩城代花井吉成による川中島扇状地内の農業用灌漑堰の改修が行われているが、その犀口の取水口については、何回かの改修の記録が残されている。それは昭和30年代の小田切ダム建設に至るまで続けられてきたのであるが、それは取水口を上流へ上流へと移動した記録なのである。結論的に言えば犀口取水口における河床の沈下である。扇状地の堆積力はにぶり、扇状地そのものの浸蝕が始まっているのである。裾花川はかつて長野市県町で犀川の堆積力におされ東流していたが、流路の人工的変更によって犀川に合している。これも堆積力の今昔を物語る重要な事実である。

古代、中世に至るまで、川中島扇状地は中央山地造山運動にかかる新鮮な堆積のくり返しであるとみることができる。その川中島扇状地は、現犀川右岸地域に49.8km<sup>2</sup>の広さをもち、左岸地域に21.7km<sup>2</sup>、合わせて71.5km<sup>2</sup>に及ぶものである。その傾斜度は0.4% (0.18°) 内外である。ここには犀川はもとより、北から小山堰、鯨沢堰、下堰、中堰、上堰、そして御幣川がこの扇状地を走っている。そのほとんどは自然流を改修したものであって、この堰の古さをも表わしていると言えよう。

なお弘化4年（1847）の善光寺大地震には犀川が岩倉山の山崩れにて20日間塞ぎ止まり、のち満水の上崩壊した。川中島扇状地の途方もない土量の堆積がこの時にみられたのであるが、これが近年における最大で最後の堆積である。しかしこの堆積は、自然の突然の災害というアクシデントによるものであることを注意しておかねばならない。

川中島扇状地はこうした成因によって形成されたものであることをみておく必要がある。

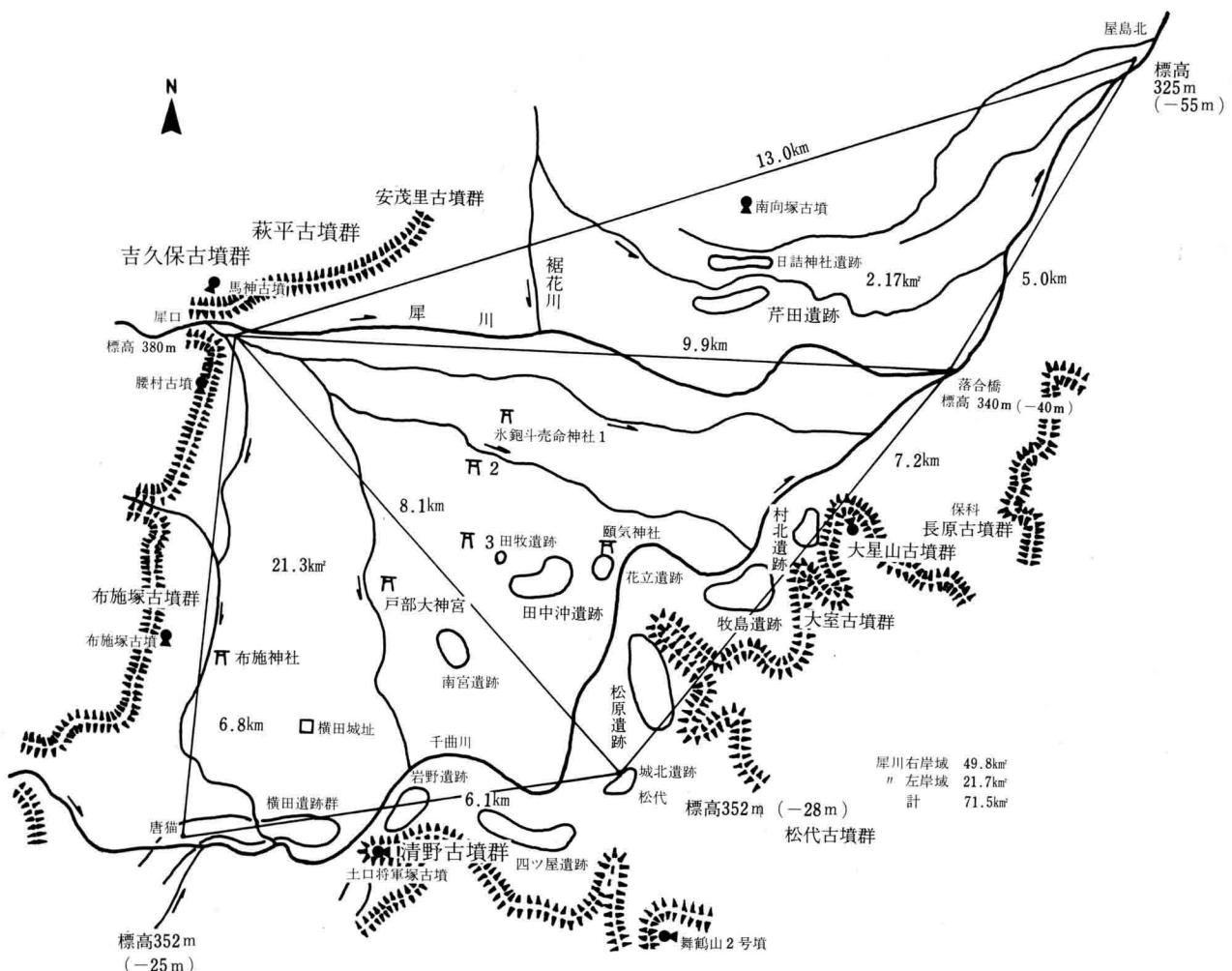
なお善光寺平そのものの成因が信越山塊の微隆起による一種のたたえの感があるのであるのだから、相関する形成構造をなしているものとみることができよう。

田中沖・田中遺跡はそのほぼ中央部の標高352m、扇端に近いところに位置しているのである。千曲川左岸、川中島扇状地には既知の遺跡は極めて少ないので注意されるところである。

## 2 歴史的環境

川中島扇状地の歴史的展開は有史時代になってめざましい。12世紀末、木曾義仲対城資永による横田河原戦（1181）にはじまり、いわば中世の幕あけにつながる事件として重要な位置をしめるものがある。源頼朝の善光寺再建（1191）そして参詣（1197）はこの善光寺平のもつ重要な意味を内蔵していると言うべきである。

10世紀、いわゆる延喜式と倭名抄の記載にかかわる神社及び郷名については、ここに更級郡の北域、そして水内郡南域・埴科郡北域では、おそらくは信濃最大の人口密集地域としての重要な課題が包含されていたに違いない。更級郡9郷11社中3郷3社が、水内郡8郷9社中2郷2社はおおむねこの川中島扇状地内に存在した可能性が強い。犀川右岸のみに限定してみても、斗女・池郷・氷鉈郷は確実に位置づくものであるし、布施神社・氷鉈斗売命神社・頤氣神社はこの内部にあるものと考えてよい。特に氷鉈郷・斗女郷は特に巨大な共同体であったとみることができ。というのはその氏族の奉祭する氏神である神社はおそらく氷鉈斗売命神社であったと考えてよく、氷鉈・斗女両郷はもともと単一の氏神をもつ地縁共同体であったに違いないものであろうからである。それが行政的な枠であるおよそ50戸をもって1郷とするというリミットによって2郷へと分けられて搭載され、行政組織とされていたとみることができよう。従って、この氷鉈斗売命神社を中心とする共同体が大きなものであつたかをうかがい知ることができる。それにもう一つ、おそらくは郷にはなれない単位の共同体であったと思われる布施神社を中心とするものは、今日においても川中島扇状地の南部に位置する一つエリアを専



3図 川中島扇状地の遺跡群

有するものであるが、おそらくこの犀川右岸地域だけでも4郷に近い共同体の存在を確認できるように思うのである。

延喜式左馬寮勅旨牧、信濃16牧のうち大室牧は犀川右岸東端地域に位置していたにまちがいなく、その牧はこの地域を専有する氏上によって把握され、経営されていたものと見ることもできよう。古代における水稻農耕に深く関与する神社はその存在の密度によっても、水稻農耕の密度を知ることのできる尺度でもある。更級郡9郷11社・埴科郡7郷5社・水内郡8郷9社・高井郡4郷6社は、時に伊那郡4郷2社・佐久郡7郷3社と対比してみると明らかであろう。人口密度の側面だけでみても、伊那谷をすべて合わせて4郷に対し、犀川右岸地域のみにても4郷に近い存在であるということは重要な問題であるといえるのではないだろうか。この川中島扇状地の高い農業生産力を物語ってあますところがない。

田中沖遺跡は、特に古墳時代より平安朝を中心とした遺跡であるが、ここにふれてきた歴史的展開の中に位置づいているものとみてよい。

古墳時代の環境も同様にしてみると興味あるあり方をしていることに気づく。特に6～7世紀代後期古墳群の存在は、その10世紀における人口過密現象に強い相関関係を示しているのであって、とりわけ長原・大室・松代古墳群はその数において瞠目すべきものがある。それはよりもなおさず、この川中島扇状地の高い農業生産力を背景としたものであったと理解でき、それ以外の歴史的背景の理解を許容できないものとみることができよう。いわば、すでに地理的環境においてみたように千曲川は古代においては山脚部をなめるようにして流れているのであるから、千曲川右岸は松代以南を除いて、以北には沖積地はまったくなかったのである。大室・長原古墳群は川中島扇状地の対岸だったのである。

その支配構造の存在を可能にした、川中島扇状地の生産力は、農業生産を基底とした共同体であったことは疑うどころではない。

そうした歴史的環境の中にあってもなお、この川中島扇状地における遺跡数はあまりにも少ない。堆積土量の薄くなる扇端部にのみ遺跡が明らかになっているという現実をみると、やはりその埋蔵されている量の大きさを推定することができる。6～12世紀における人口過密地域の遺跡の課題として、田中沖遺跡群のもつている意味は大きい。今後更にこの地域における歴史的展開を明らかにしていく手がかりを与えてくれよう。

〔付記〕 地理的環境及び歴史的環境については、長野市の埋蔵文化財第42集『田中沖遺跡II—長野市神明広田土地区画整理事業地点一』から転載した。南宮遺跡は田中沖遺跡同様川中島扇状地の扇端部に位置する遺跡で、南西約1.3kmにあり、田中沖遺跡を南宮遺跡に読み替えていただければ、そのまま通用する論考である。

### 3 川中島扇状地扇端部の遺跡

川中島扇状地において、現在までに周知されている遺跡は、4遺跡5ヶ所にすぎない。その立地は扇端部近くの中洲状微高地であることが共通している。しかし発掘調査が実施されている田中沖遺跡・南宮遺跡にしても開発事業地内でのもので、その正確な範囲は確認されていない。遺跡内容を瞥見する（4図）。

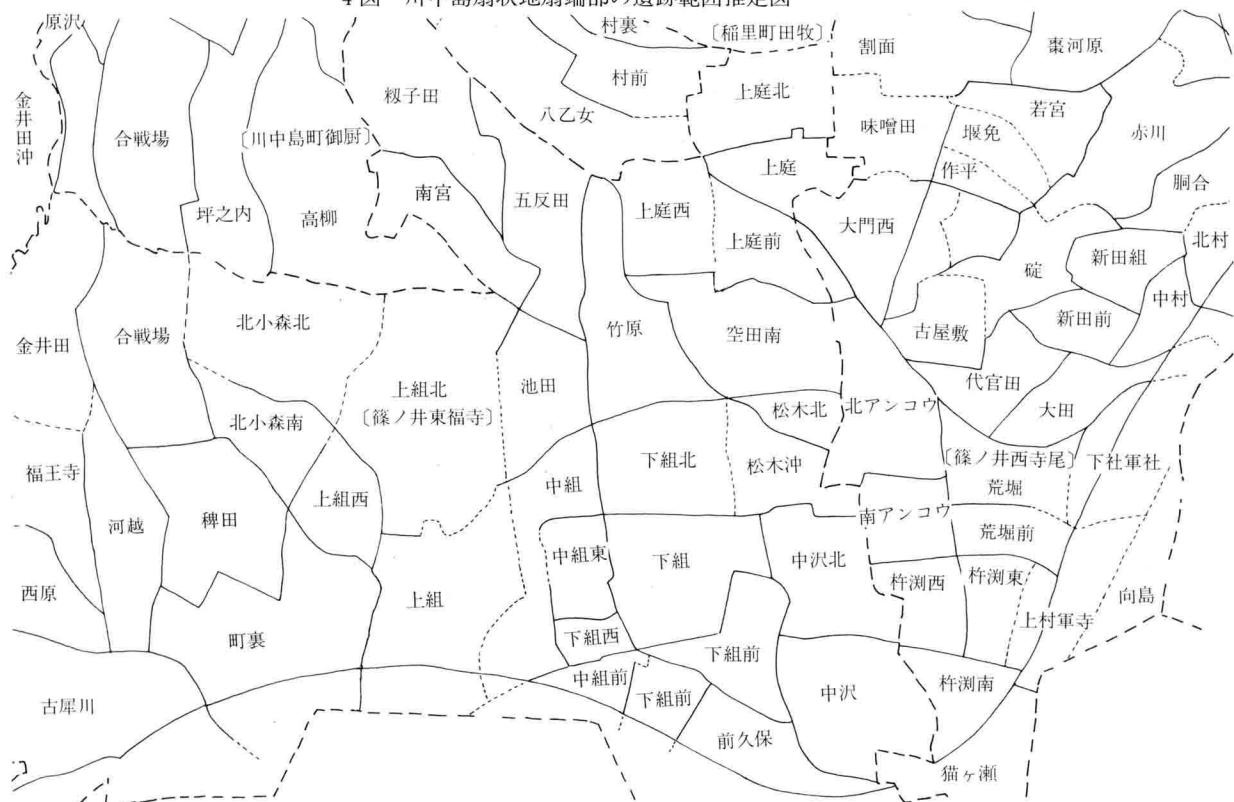
**田中沖遺跡I** 昭和53・54年度に国道18号線篠ノ井バイパス建設に伴う緊急発掘調査が実施された。調査面積1800m<sup>2</sup>内に、古墳時代中期から平安時代末に至る住居址30軒、柱穴群、土坑8基、溝址3本等が検出され、大室古墳群や後の御厨を支えた集落遺跡として注目されるようになった。弥生時代後期土器片も採集されている。

長野市教育委員会『田中沖遺跡—国道18号線篠ノ井バイパス緊急発掘調査報告書—』昭和55年

**田中沖遺跡II** 昭和63年度・平成元年度に長野市神明広田土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査が実施された。調査地は田中沖I遺跡から水田を挟んで南に展開する微高地上にある。調査面積4,100m<sup>2</sup>内に古墳時代後期から



4図 川中島扇状地扇端部の遺跡範囲推定図



5図 調査地周辺の字名

平安時代末に至る住居址106軒、柱穴群13ヶ所・土坑25基・溝址29本を検出し、田中沖I遺跡と同様の性格の遺跡であることが判明して来た。中でも平安時代末に比定される大型の3軒の住居址及び壙・塚類を主体とした出土品の多さは、時代の背景の中から認識すべき重要な示唆に富んでいる資料である。

長野市教育委員会『田中沖II遺跡—長野市神明広田地区画整理事業地点—』平成3年

**花立遺跡** 現在は遺跡推定範囲のほとんどが河川敷に入っている。表面採集調査では弥生時代後期の甕・壺・高壙片等が確認されている。

更級埴科地方誌刊行会『更級埴科地方誌第二卷 原始古代中世編』昭和53年

**田牧遺跡** 昭和62年度長野県住宅供給公社でこの地域開発に伴い、埋蔵文化財包蔵地の有無について事前の打診があった。この地域一帯は周知されている遺跡がなかったが、長野市埋蔵文化財センターでは表面採集調査を試みた。果樹園・畑地を中心とする微高地上から若干ではあるが土師器壙・甕、須恵器甕片が採集され、新発見の遺跡とした。平安時代を主とした集落址と考えている。

#### 4 調査地周辺の環境

南宮遺跡は川中島扇状地三角洲のほぼ中央線上扇端部、標高354m付近に位置している。この扇状地は扇頂から複雑な帶状の微高地と低地が連面と続くのが特色で、調査地も南東に延びる狭隘な微高地上にある（2図）。前節で触れたこの扇状地の開発の要となっている上堰・中堰・下堰のうち調査地は下堰の系統に属し、西に大御堂堰の支流が流下し、東に空田堰の支流が分流する。これらの堰を境にして水田と畑地・果樹園の地目利用が異なり、低地と微高地を画している。地形に影響された古くからの流路であった可能性も高い。5,000分の1の地図内のうち道路面以外から標高をひろい断面を落としたものが6図である。調査地西側ではある程度の勾配を有して來たものが低地で一旦止まり、微高地へ僅かに上がり平坦に近くなる。微高地より更に東へは急傾斜をもって落ち込む。ことほどさように微高地として落差は扇端に行く程大きく明瞭になり、扇央部付近ではそれ程の比較差は見られないようである。この地形の相違は堆積土の厚さによるものと思える。

行政区画では篠ノ井東福寺に位置し、川中島町御厨と接する。東福寺村の地名の由来は定かでないが、和名抄にみる斗女郷に比定され、後に富部御厨に属するという。調査地の字名は南宮である（5図）。周辺の字名が集落名・水田に関するものが多い中で異質な字名である。戸部大神宮又は富部御厨の神庫と推定される岡神明宮に対して南に位置する神明宮の存在に由来するものと考えたいが、今回の調査では裏付ける資料は得られなかった。

### III 調査

#### 1 分布調査

平成2・3年度工事対象地内のうち微高地と予想され、果樹園が展開する西側半分を分布調査対象とし、A～E地点の5ヶ所で小型重機による試掘を実施した。A地点での調査は15cm程で水田の床土が観察され、更に42cm下部で犀川の影響堆積土と推定される白褐色砂質土に至る。中間層は黄褐色粘質土であり、調査地点は上層が削平されていることも予想されるので、近接するB地点の調査を試みたがA地点と同様の所見を得た。C地点の旧地目は水田であったが、耕作土下10cm程の厚さで灰黃褐色砂質土が展開し、III層は茶褐色砂質土層となりA・B地点と質的に異なる土壤になる。D地点はII層がない。E地点は耕作土層が深くなり約30cmを測る。C・Dで認められた茶褐色砂質土が黒褐色砂質土に変り、土器片・炭化物の出土を見た。この地点において初めて遺跡の存在を確認し、後の本格的調査で判明した5号溝址の覆土中を調査したことになる。



III-1 試掘坑A



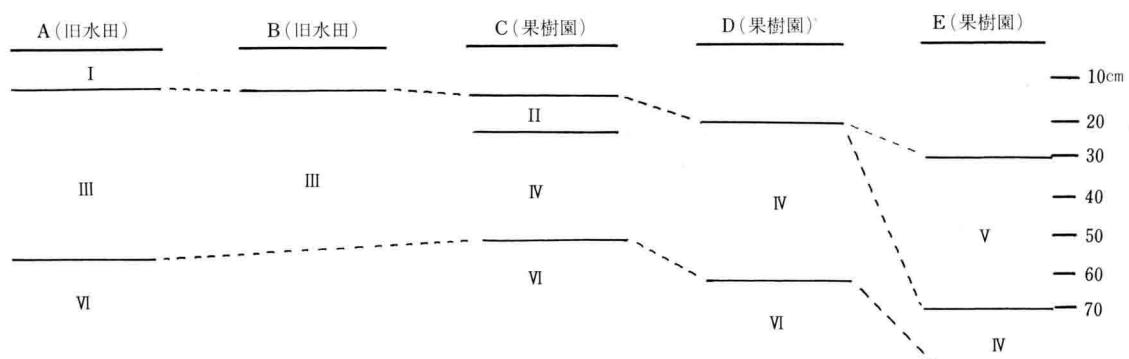
6図 調査地周辺の地形及び試掘坑



III-2 試掘坑D



III-3 試掘坑E



I . 耕作土 II . 灰黃褐色砂質土 III . 黃褐色粘土質 IV . 茶褐色砂質土 V . 黒褐色砂質土(遺物包含層)  
VI . 白黃褐色砂質土

試掘坑土層序模式図

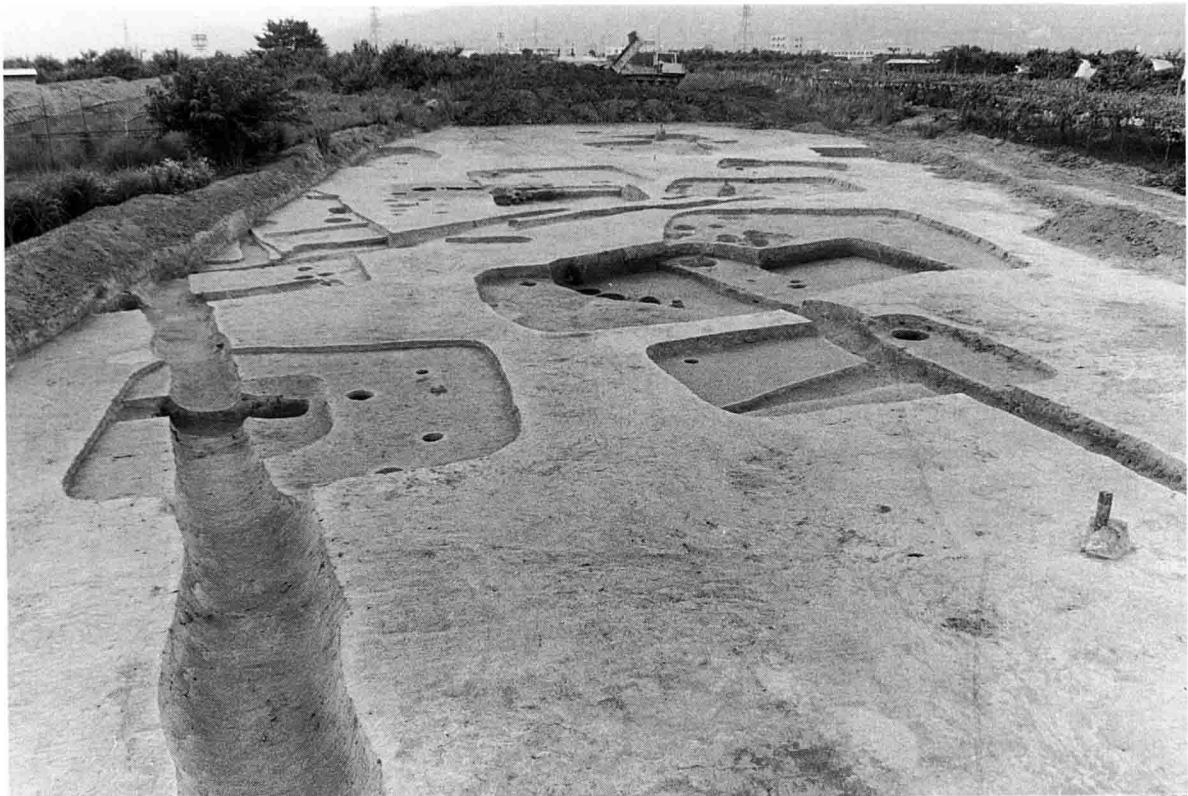
## 2 遺構の分布



III-4 A地区の遺構分布（東より）



7図 遺構分布図（左図数値は平面直角座標第VII系による）



III-5 A地区の遺構分布



III-6 5号住居址周辺の遺構

調査地は昨今果樹園として地目利用されていた市道御厨東福寺線と空田堰間約120mに設定した。このうち遺構の分布が認められたのは市道篠ノ井中335号線を中心とした約85mの範囲におさまり、これ以外から遺物の散布はほとんど認められないことから、この範囲に限定され、微高地上を帯状に展開していくものと予想される。市道篠ノ井中335号線から西側をA地区、東側をB地区として調査を実施した。A地区では遺構が重複関係にあるものが多く認められるのに対し、B地区では遺構数が激減し、また単独検出遺構だけである。またA地区の西端付近の遺構確認面は表土から30cm程で浅く、東へ移行するに従い深くなり、23号住居址付近では80cm前後になる。この傾向は北から南にかけても見受けられる。重複関係にある住居址は、2号と3号、11号と6号、10号と

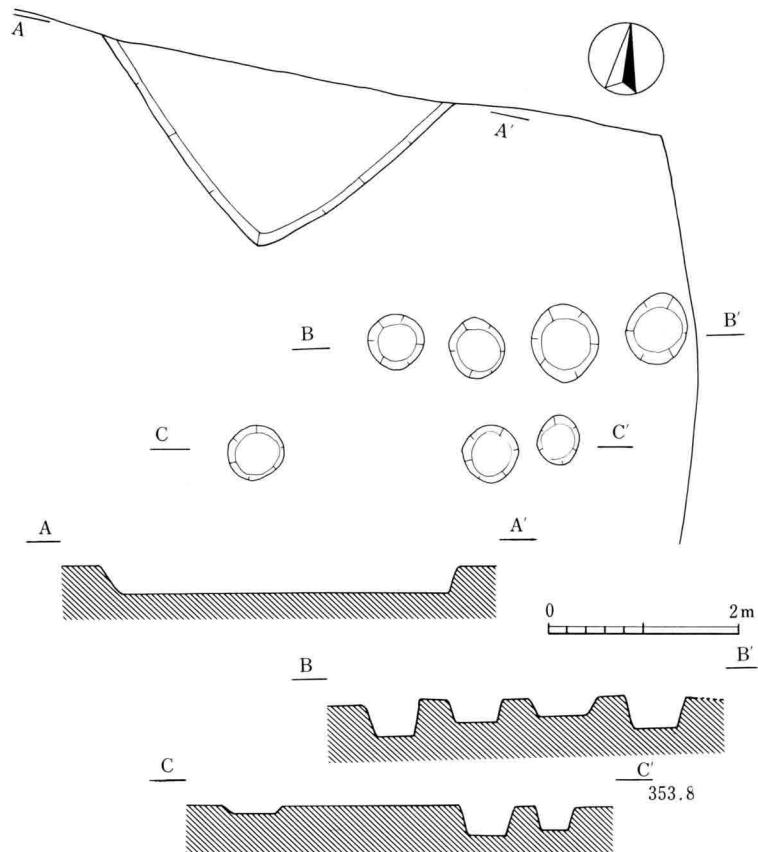
12号、9号と14号、7号・16号と21号・20号(22号)があり、前者が後者より新しい時期のものである。

### 3 遺構と遺物

#### 1号住居址 (8図、III-7)

遺構 A調査区の北東隅付近から検出されたもので、調査では南西隅の一部を確認したにすぎない。近隣遺構にピット群1がある。また東西に走る溝状のものを調査したが、近時における耕作によるものである。住居址形態は方形を呈するものと思われるが規模等は不明である。表土から検出面までの深さは32cm程で、覆土は黒褐色砂質土になり、検出面からの掘り込みは直に近く29cmを測る。床面は平坦で軟弱である。西壁の軸線はN45°W前後を指す。柱穴・カマド等の施設は確認できなかった。

遺物 出土量は少なく、それも図上復元可能な土器片はない。器種には土師器壊・甕、須恵器壊・甕がある。土師器壊の内面は研磨され黒色処理が施される。底部外面には回転糸切り痕を残す。



8図 1号住居址、ピット群1実測図



III-7 1号住居址、ピット群1

## 2号住居址（9図、III-8・9）

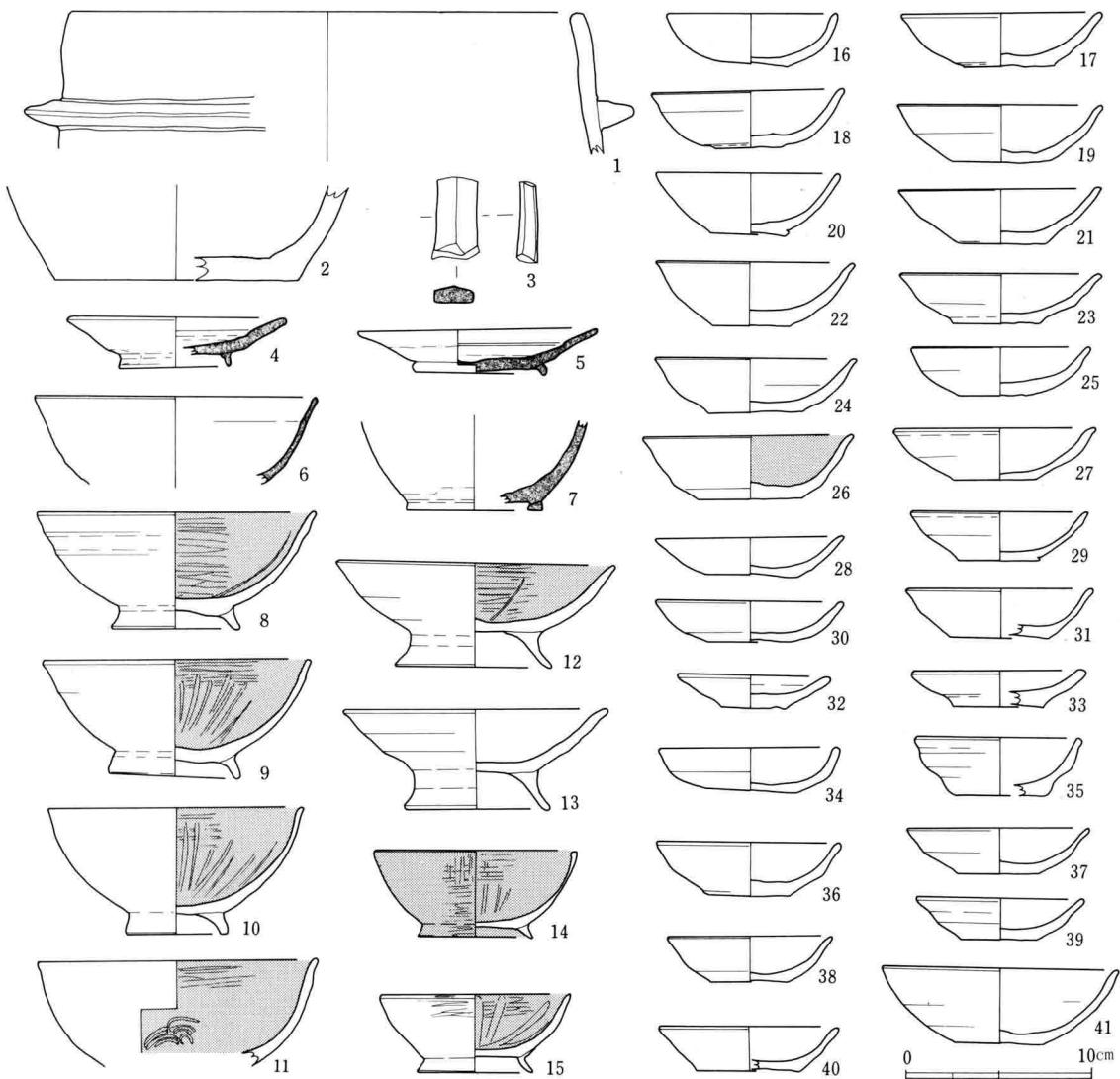
遺構 A調査区の北東に位置し、北東隅は調査対象地域外へ延びる。3号住居址を内包し、1号・7号住居址に隣接する。表土下22cm前後から検出され、覆土は表土層から暗茶褐色砂質土・黒褐色砂質土・炭化物多含の黒褐色砂質土になる。形態は東西軸の長い不整長方形を呈し、長軸8.02m、南北軸6.68m前後の規模になる。検出面からの掘り込みは17cmを測る。床面は中央に若干凹み、炭化物多含土層の下面には黄褐色粘質土による張り床状遺構、焼土塊の散在が認められた。柱穴は東壁添いに3個確認され、3号住居址壁際のピットから鉄鏃の出土をみた。壁際のカマド構築は確認されない。遺物の出土は上層で北西隅からのものが多く、下層では炭化物多含



III-8 2号住居址（南より）



III-9 2号住居址（西より）



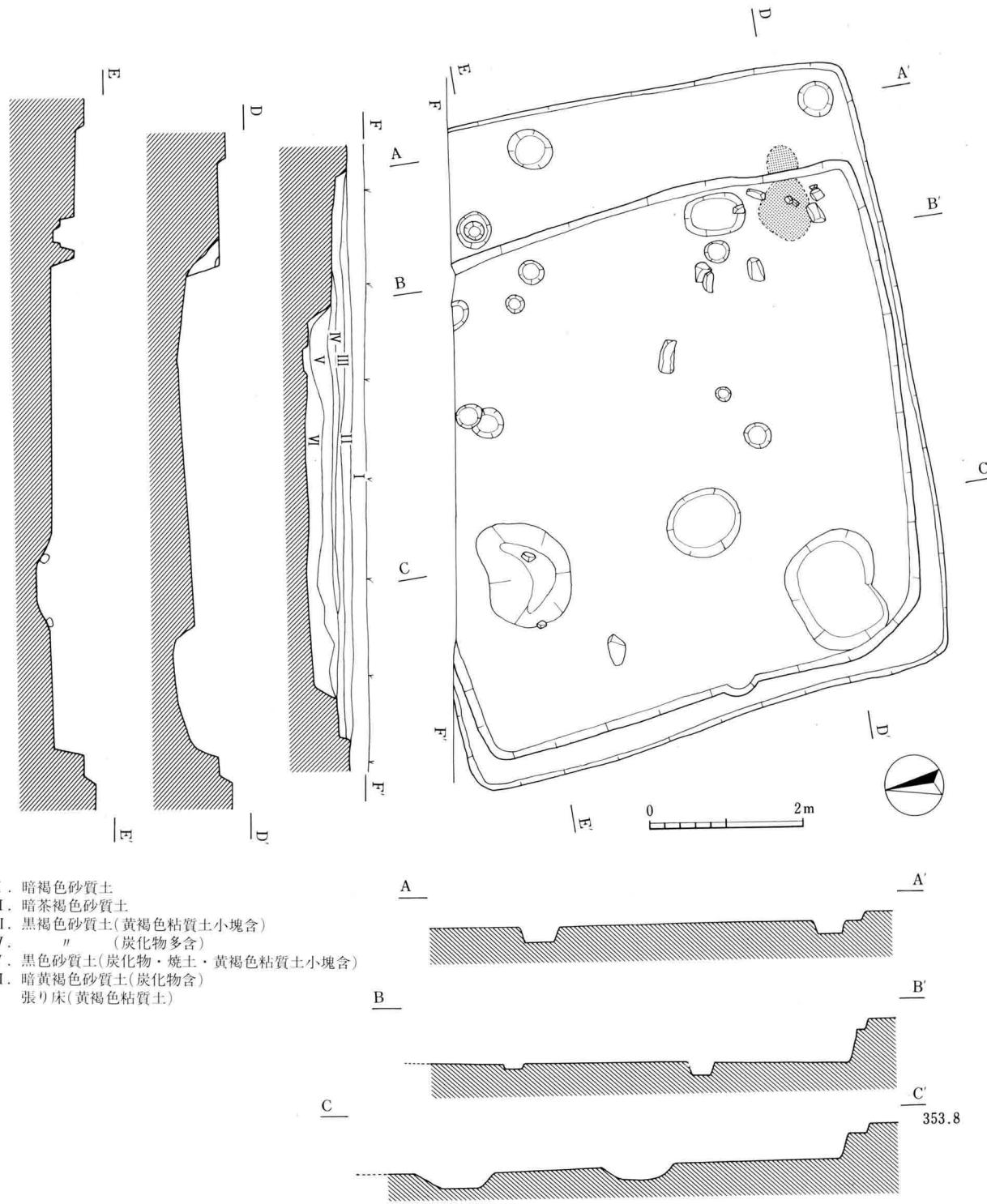
9図 2号住居址出土土器実測図

層から集中して出土している。ただし張り床状遺構が全面に存在していたわけではなく、部分的であったため3号住居址のものが混入している可能性がある。

遺物 出土量は多い。器種には土師器羽釜（1・2）・壺（16～41）・塊（8～15）、緑釉陶器瓶把手（3）、灰釉陶器段皿（4・5）・塊（6）・瓶（7）がある。土器類のほかに刀子状鉄製品・形態不明のもの6点、鐵滓3個、羽口片1点、砥石（60図2）、磨石（7）が出土している。器種別に総体をみると煮沸具が少なく、食膳具であろう壺・塊類が点数・量において他を凌駕する。ちなみに図示した以外に底部破片個体数は壺類60点、塊類62点にのぼる。羽釜は鍔が断面三角形状を呈し全周する。底部は平底である。壺は口径が小さく深い皿形のものが圧倒的に多く、やや大形品（41）が混じる。皿形のものにも大小あり、また体部・口縁部とも内弯するもの（16・34）と口縁部が外反するものがあるなど形態は一様でない。この器種の内面が黒色処理されるものは少ない。塊は大形の壺に高台が付されるもので、体部が内弯する深い壺は低い三角高台で、皿形の壺は高脚高台になる。高脚高台を付されるものは内面黒色処理されるものは少ないが、低脚の塊は黒色処理されるものが多く、内外面とも研磨調整され黒色を呈するもの（14）もある。

### 3号住居址 (10~12図、II-10~13)

遺構 A調査区の北東に位置し、上面遺構に2号住居址があり、各壁ともほぼ平行関係にある。北壁の一部及び北東隅は調査区域外へ延びるため未検出である。形態は東壁がやや長くなる不整方形を予想する。主軸6.56m・西壁寄りの南北軸6.24mを測り、東壁寄り南北軸7m前後の規模になるものと推定される。主軸方向はほぼ東西を指す。覆土は2層に大別され人為的に埋められた様相は認められない。上層は炭化物・焼土・黄褐色粘質土小塊を含む黒色砂質土で、下層は暗黄褐色砂質土になる。2号住居址からの掘り込みは、東壁32~43cm・西壁31



10図 2号・3号住居址実測図



III-10 2号・3号住居址（西より）



III-11 2号・3号住居址（東より）

～38cm・南壁31～42cm・北壁40cmの数値になり、床面は南壁添いでは西からカマドにかけて傾斜し、北東壁添いではほぼ平坦で、西壁添いでは北へ傾斜する。カマド前面及び中央部は黄褐色粘土による張り床が施こされ堅緻である。カマドは東壁の南東隅に構築されるが調査では破壊を受けた状態で検出され、周辺には構築石材が散在し、火床及び煙道を確認したにすぎない。柱穴は土坑状のものを含め大小11個検出したが定型化した方形配列形態にはならない。遺物の出土はほぼ全面から出土しているが、カマド周辺及び中央部からのものが多い。

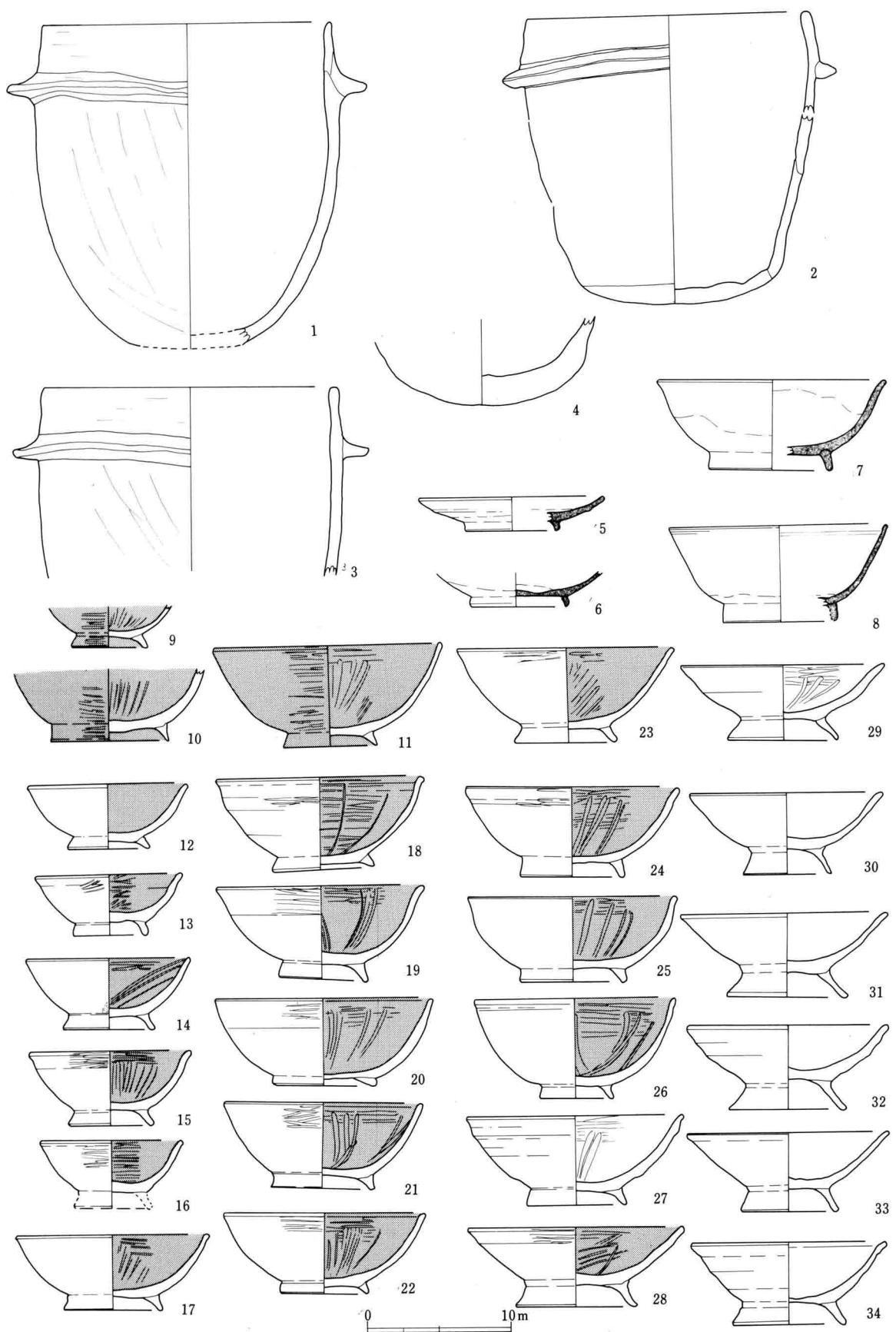


III-12 3号住居址カマド

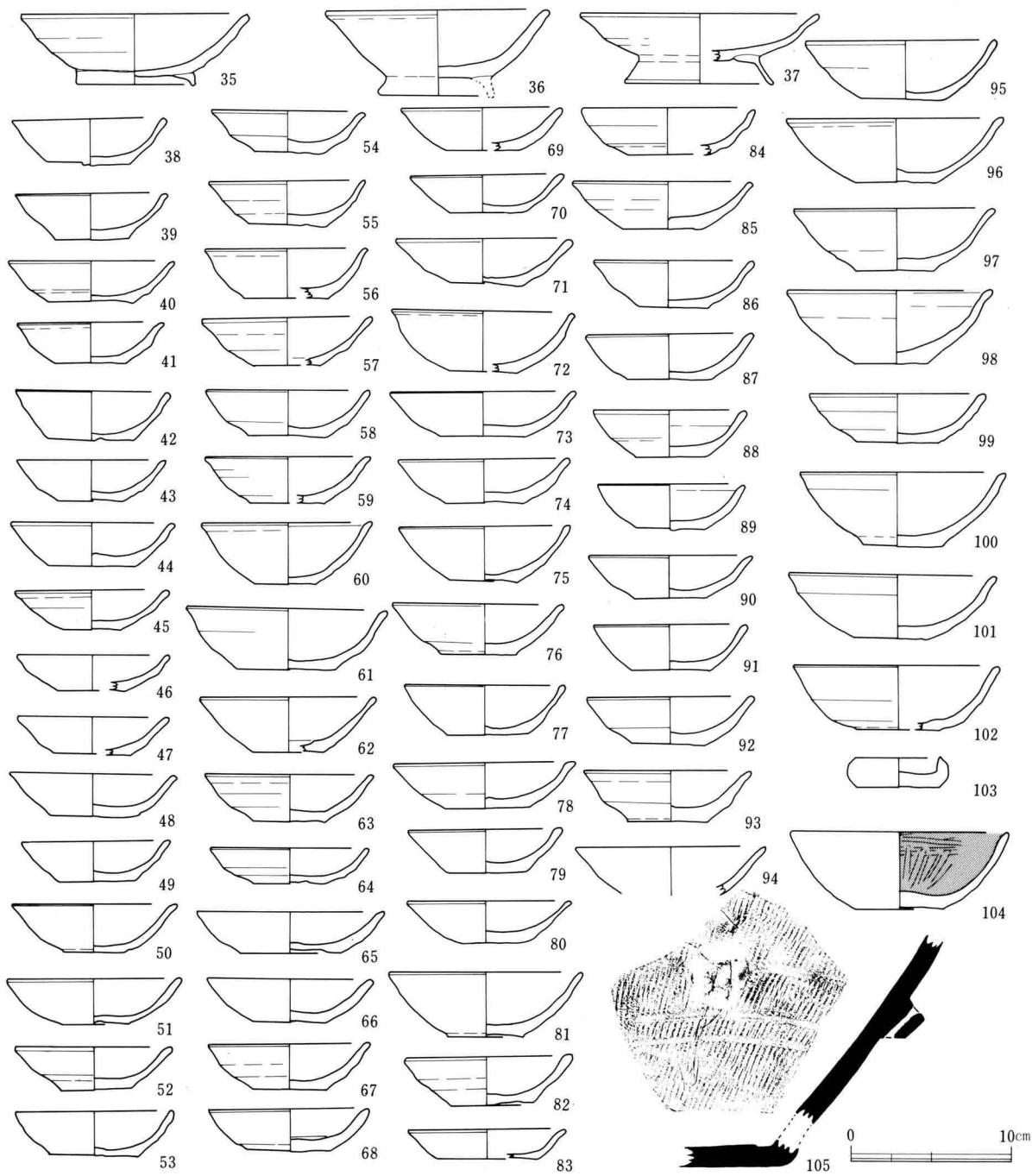


III-13 3号住居址覆土

遺物 今回調査した遺構の中で最も多く出土しており、量的には他を凌駕する。しかし、完形のものが少なく、破片状態での出土のものが目につき注意される。器種には土師器羽釜（1～4）・塊（9～37）・壺（38～102・104）・耳皿（103）、須恵器四耳壺（105）、灰釉陶器皿（5・6）・塊（7・8）・壺がある。土器類の他に鉄製刀子（61図2）・釘状鉄製品（7）、砥石（60図3）、鉄滓3個が出土している。土師器羽釜は体部上位に断面三角形を呈する鍔が全周する。形態的には1・3の口縁部が直立するのに対し、2は内弯し、体部においては前者が内弯気味に立ち上がるのに対し、後者は直線的に外開する相違がある。また1・4は丸底であるのに対し、2は平底気味の形態をとる。内外面の調整は主としてヘラナデによる。塊類のあり方は2号住居址と同様の傾向を示す。低い高台が付され、体部が内弯して立ち上がり丸味を有する塊類は、内面にヘラミガキが施こされ、黒色処理されるものが多い中で27・35・36のみ黒色処理が施こされない。9～11は内外面とも研磨され黒色処理される。またこの器種の中で小形のもの（12～16）が目立つようになる。体部が直線的に外開する皿形の壺に高脚高台が付される塊も多く、28・29の内面は研磨され、28には黒色処理が施こされる。他はロクロ調整痕を残す。た



11図 第3号住居址出土土器実測図



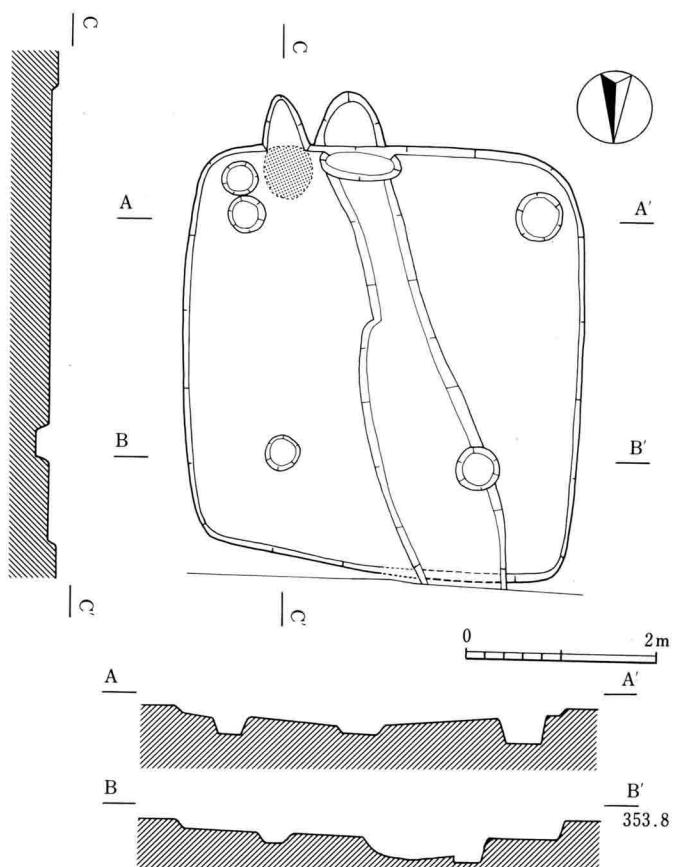
12図 3号住居址出土土器実測図

だ35・36は低い高台が付されるが坏形態は皿形である。27・28・36はこれらの中間形態とも受け取られる。ちなみに図示できなかった塊は47個体と推定され、このうち黒色処理されるものがやや多く26個体ある。坏類の出土数も多く図示した66個体の他に150個体が予想される。体部が直線形を呈し、口縁部が外反する皿形の器形が主流を占めるが、口縁部の外反度が少なく素直に集結するものもある。これらはロクロ調整で仕上げ、底部外面に回転糸切り痕を残す。大形製品の中には内面ヘラミガキ調整を受けるものも見受けられ、104は黒色処理される。未図化製品150個体のうち35個体に黒色処理が施されるものが見られた。須恵器四耳壺では肩部に有孔の耳状突起が付されるもの他に体部下方に有孔突起が付されるもの（105）もある。

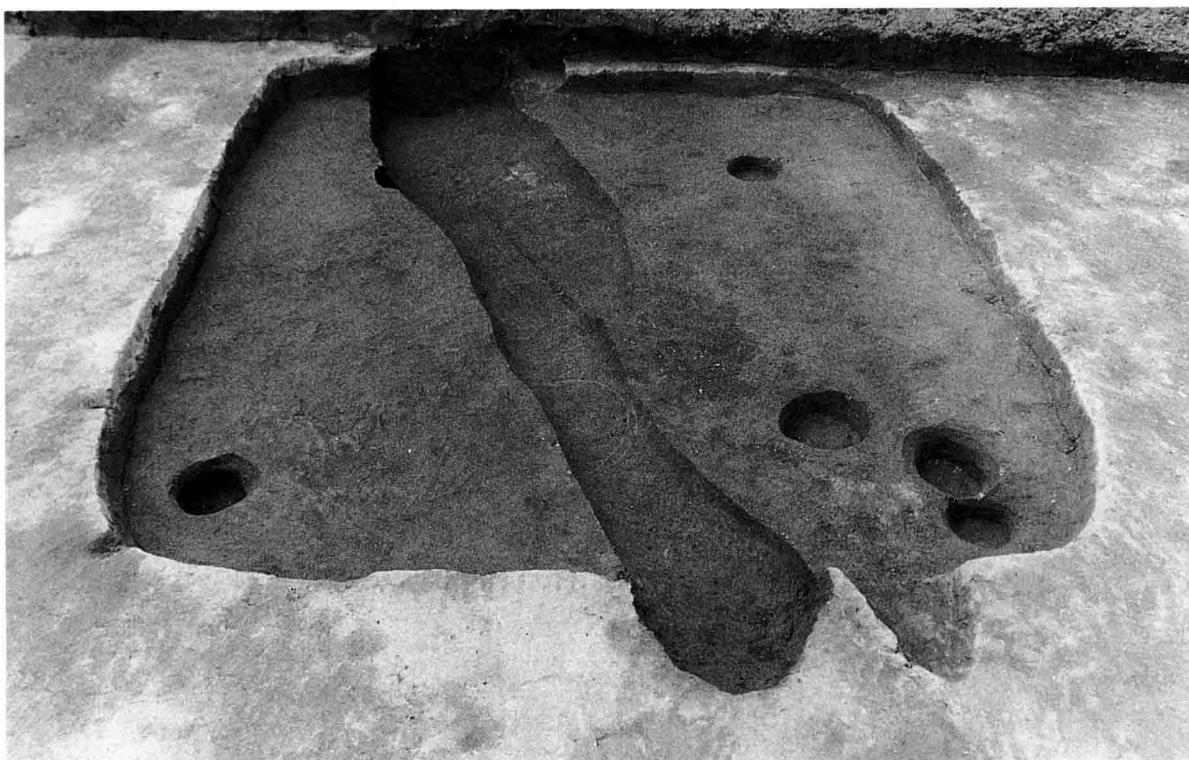
#### 4号住居址 (13図、III-14)

遺構 A調査区の中央付近北端に位置し、3号溝址と重複関係にある。3号溝址は本遺構検出後確認されたもので古い時期の所産と思われる。形態はやや西壁が長い不整隅丸方形を呈する。主軸の東壁寄り4.2m・西壁寄り4.5m、東西軸4.2mの規模になる。掘り込みは東壁8cm・西壁7~20cm・南壁7cm・北壁9cmを測り、黒褐色砂質土が覆土である。主軸方向はほぼ南北線上にある。床面は軟弱で、東西間の南壁寄りでは中央に向け更に12cm前後凹む。南北間は平坦である。カマドは南壁の南東隅に構築され、火床と煙道を残すのみである。柱穴は4個確認され不整方形配列になる。

遺物 出土量は少なく、図示可能な土器片はない。器種には土師器羽釜・壺・壇、灰釉陶器長頸壺がある。土器類の他に粘板岩製巡方(60図1)が出土している。一辺3.1cm・厚さ6mmの大きさで、裏面には皮留金具孔を穿つが3孔欠損している。



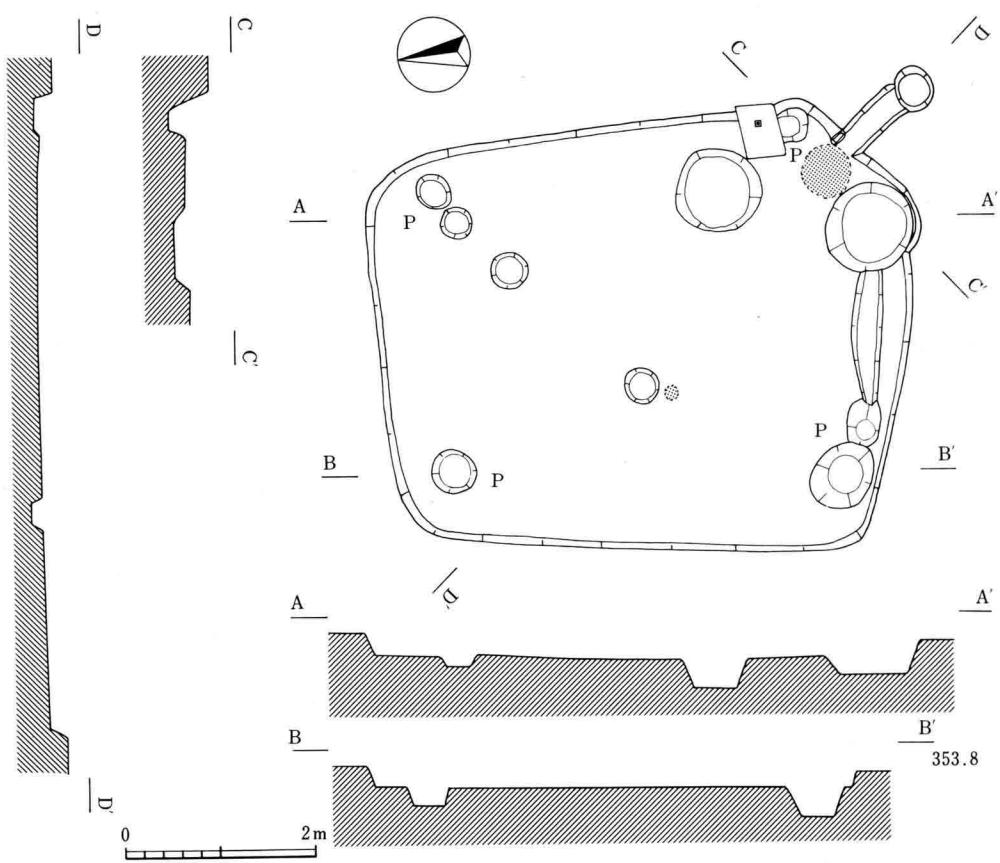
13図 4号住居址、3号溝址実測図



III-14 4号住居址、3号溝址

5号住居址 (14・15図、III-6・15・16)

遺構 A調査区の中央に位置し、近接して7号～9号・14号住居址、4号溝址等があるが、これらとは重複関係ではなく単独検出遺構である。基本形態は隅丸長方形を呈するが、南壁が内湾しやや張り出し、カマド周辺が突出する変形の住居址である。各壁中央での規模は主軸5.61m・東西軸4.5mになり、南壁側最大巾は4.8mである。検出面からの掘り込みは東壁22cm・西壁18cm・南壁19cm・北壁23cmを測り、覆土は黒褐色砂質土であるが、遺構



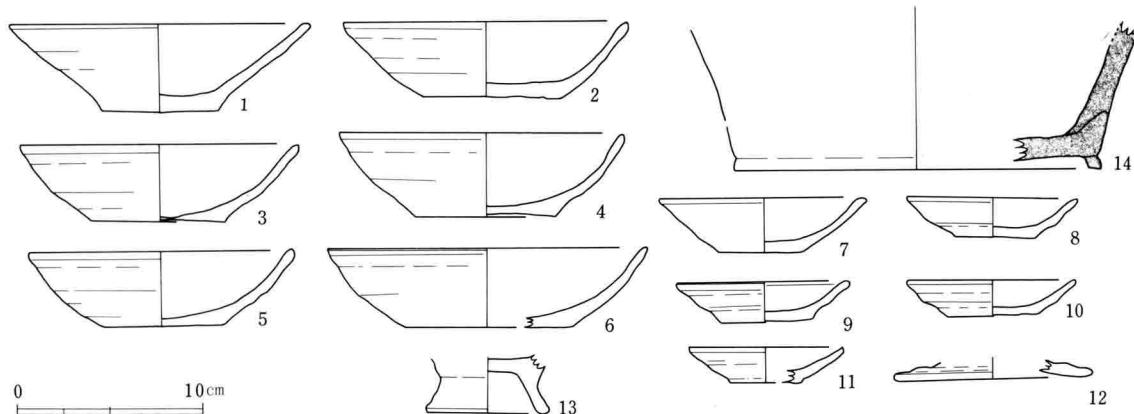
14図 5号住居址実測図



III-15 5号住居址 (西より)



III-16 5号住居址（南より）



15図 5号住居址出土器実測図

中央付近の上層では炭化物が多量に含まれていた。カマドは南東隅に構築され、幅2.15m前後の張り出し部を設け、その中央に直径55cm程の火床が残存し、煙道は全長1.15m・幅30cmである。カマド部煙道左側に角礫が埋め込まれており石芯製両袖型のカマドを推定する。貯蔵穴様土坑は2基確認され、カマド内右側のものは直径89cm・深さ20cm、北側のものは直径87cm・深さ38cmの規模になる。主柱穴は各隅部のものをもってて、4個不整方形配列形態になる。床面は中央に向け若干凹み、主柱穴内方部は堅緻である。北壁添いより床面から5cm程浮いた状態で小刀が出土した。

遺物 住居址形態がしっかりとしている割には遺物の出土量は少ない。器種には土師器甕・壺（1～11）・塊（13）、須恵器壺、灰釉陶器壺（14）がある。このほか粘板岩製の砥石（60図8）、鉄製小刀（61図1）が出土している。壺類は大小に大別されるが、底部から体部への外開度が大きく、体部の内弯もなく、口縁部も素直に仕上げており、塊形というよりも皿形に近い形態になる。共にロクロにより調整され、底部外面に回転糸切り痕を残す。塊類の出土量は少なく図示できるものは高脚高台が付される13の1点にすぎない。12は偏平な器形で蓋と考えたが、高脚高台が付く皿の可能性も高い。14の灰釉陶器は薄い白濁色を呈する。砥石は他遺構出土の手持ち砥石であるのに対し置砥石であろう。小刀は平造りの全長30.5cmを推定し、最大幅4.2cmで、茎中央に目釘穴1孔がある。刃部中央が内弯していることから工作用としての使用が考えられる。

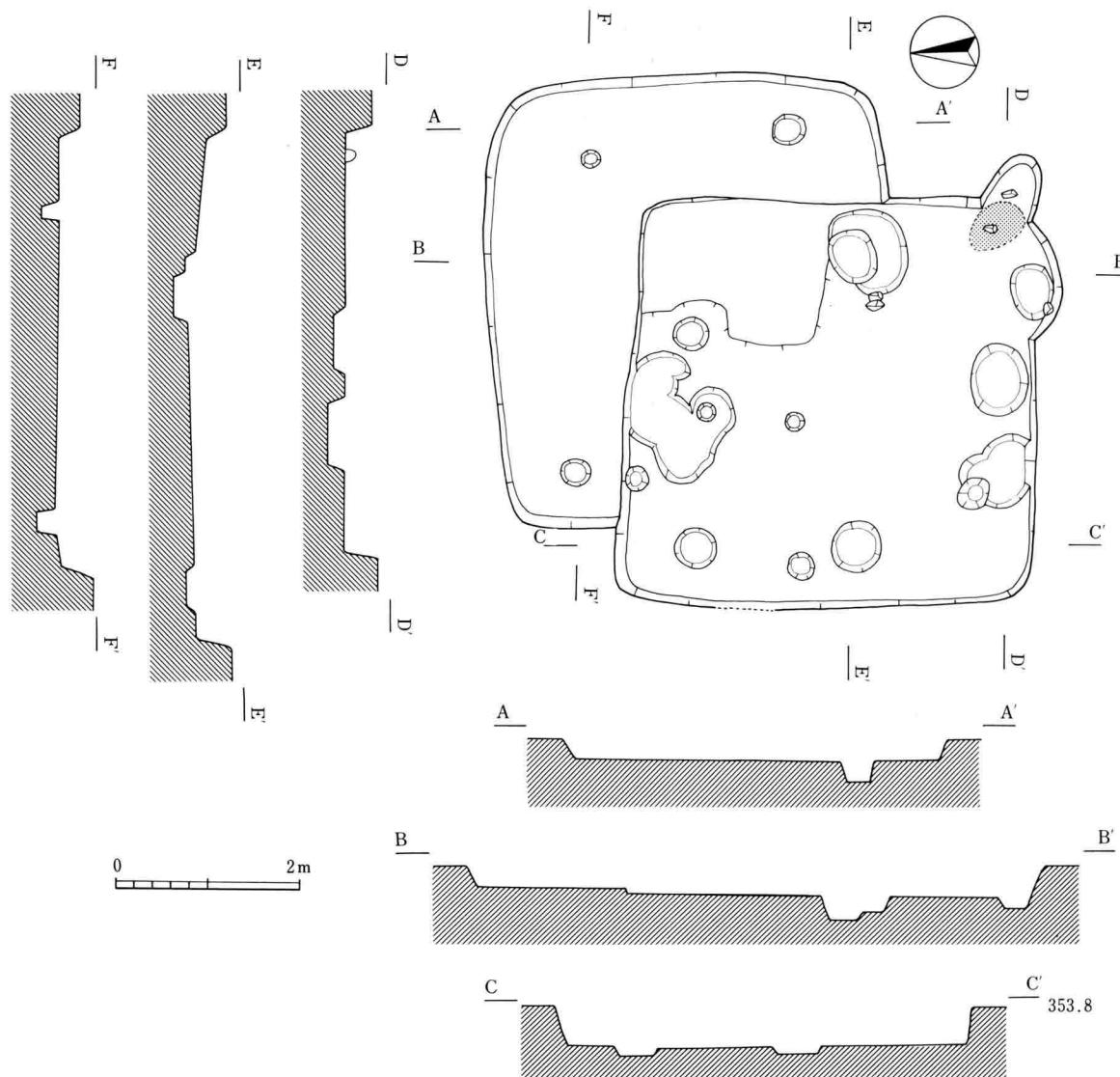
### 6号住居址 (16図、III-17・18)

遺構 A調査区の北西部に位置し、11号住居址と重複関係にある。調査では6号住居址の方が新しいものと推定したが、進展途上で11号住居址の方が後出の遺構と判明した。形態は隅丸長方形と予想され、東西軸4.9m・南北軸4.48mの規模になる。検出面からの掘り込みは東壁22cm・西壁37cm・南壁21cm・北壁23cmを測る。西壁が高いのは地形傾斜によるもので、床面は平坦で軟弱である。主柱穴は6号住居址内3個、11号住居址内の1個をもってこれにあてるが、不整方形配列になる。カマドの痕跡は確認できなかった。

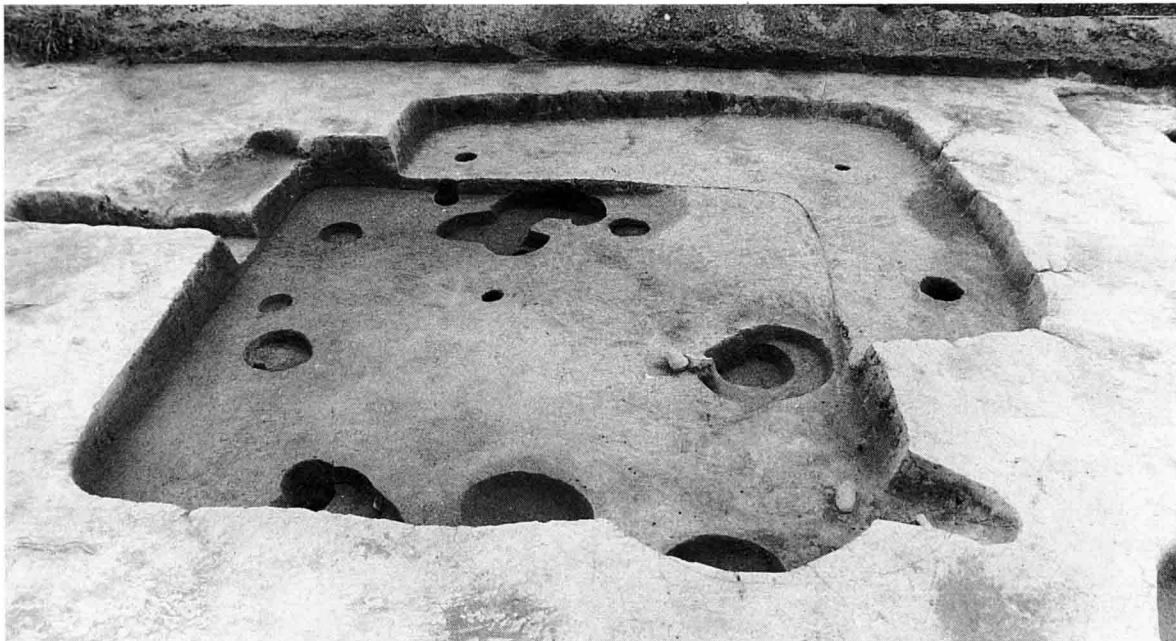
遺物 出土量は少なく、図上復元可能な土器片はない。器種には土師器羽釜・壺・壇、須恵器壺・甕、灰釉陶器瓶がある。

### 11号住居址 (16・17図、III-17・18)

遺構 6号住居址と重複関係があり、南西部を切り込んで構築される。形態は隅丸方形を呈し、主軸4.48m・南北軸4.6mの規模になる。主軸方向はほぼ東西を指す。検出面からの掘り込みは東壁30cm・西壁37cm・南壁41cm・北壁45cmを測る。6号住居址床面との比較差は北壁で5cm前後である。カマドは南東隅に構築されるが既に



16図 6号・11号住居址実測図



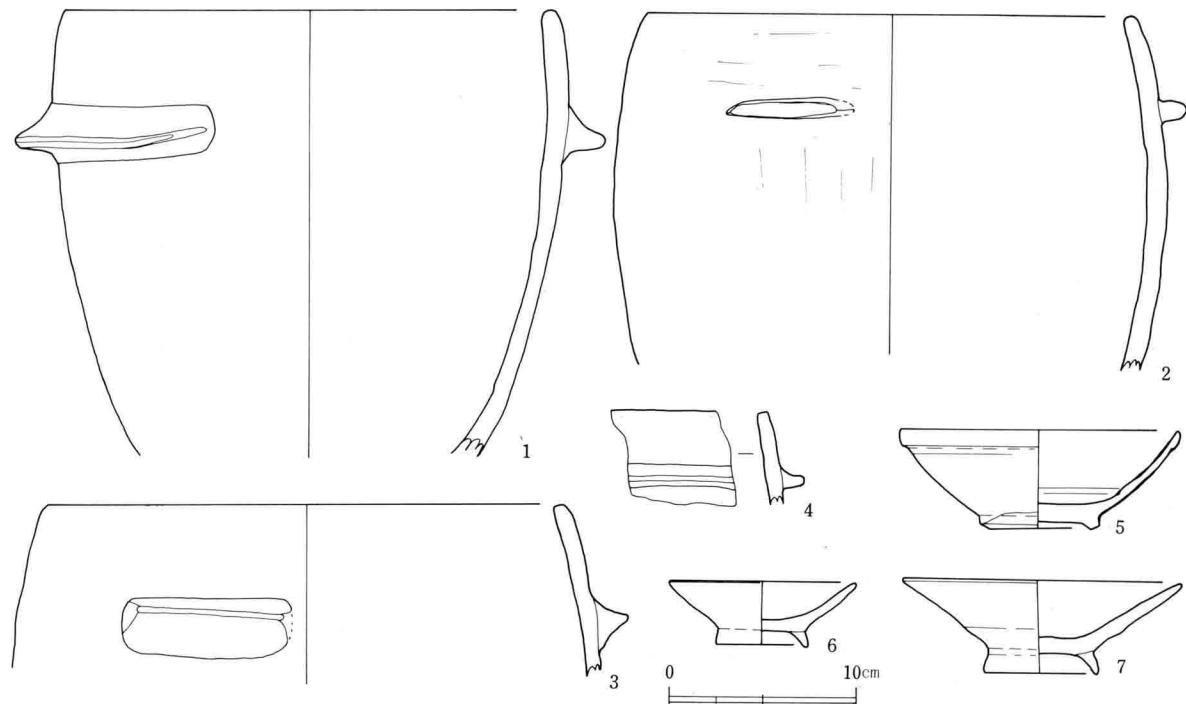
III-17 6号・11号住居址（南より）



III-18 6号・11号住居址（西より）

破壊を受け火床・煙道及び構築石材が散在していたにすぎない。このカマド構築形態は5号住居址のそれと似て住居址外へ張り出しが、火床を中心にして両側へ突出する形態をとらず右側のみに限定する。カマド内火床右側に長軸60cm・深さ15cm程の楕円形を呈する貯蔵穴がある。他に東・南・北の各壁下に大形の土坑がありこれらも貯蔵穴又は主柱穴の可能性がある。主柱穴は規格性のある配列にならず不明である。床面は中央に向け若干凹み、カマド前面及び中央付近は堅緻である。

遺物 出土量は比較的多いが、そのほとんどが破片である。器種には土師器羽釜（1～4）・壺・塊（6・7）、須恵器甕、灰釉陶器塊、白磁碗（5）がある。羽釜のうち1～3は体部から口縁部にかけ内弯気味のもので砲弾形態になる。この器種の特色は鍔が全周せず長楕円で独立して添付される点にある。その個数は4個と推定される。4は鍔が全周するもので、独立する鍔を有する羽釜が後出するものであるならば、6号住居址に付属するものと考えたい。壺には内面が研磨され黒色処理が施されたものもある。5の碗は角高台を削り出し、口縁部が玉縁になる輸入白磁である。須恵器は混入品と考えられる。



17図 11号住居址出土土器実測

#### 7号住居址 (18・19図、III-19・20)

**遺構** A調査区の中央に位置し、21号・20号（22号）住居址と重複関係にあり、これらよりも新しい。形態は東壁がやや長い不整隅丸長方形を呈する。規模は東西軸7.55m・南北軸中央6.84mを測る大型の住居址である。掘り込みは東壁19cm・西壁20cm・南壁17cm・北壁12cmで、床面は平坦である。カマド構築の痕跡は確認されなかつたが、西壁寄り中央付近に直径50cm程の範囲に焼土が認められた。この周辺の床面は堅緻である。主柱穴は各隅付近に位置するもの4個をもってあてるが、不整方形配列になる。南壁中央近くに長軸1.4m・深さ54cmの卵形を呈する土坑状の掘り込みがあり貯蔵穴と推定する。

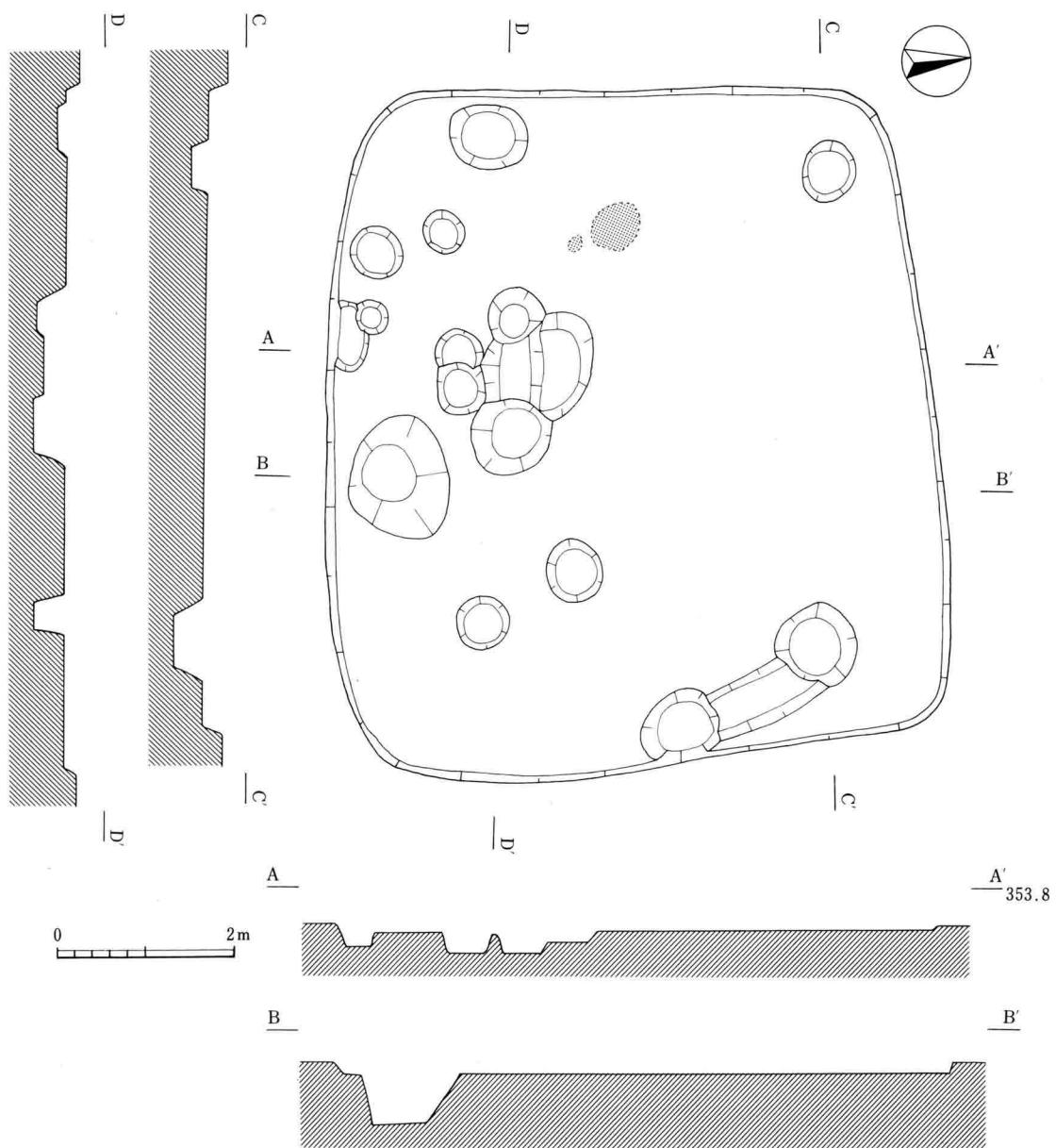
**遺物** 出土量は少ない。器種には土師器壙（2～9）・壙、灰釉陶器壙（1）がある。壙類は皿形の小形のもの（2～7）と大形のものに大別され、9は内面にヘラミガキが施され黒色処理される。



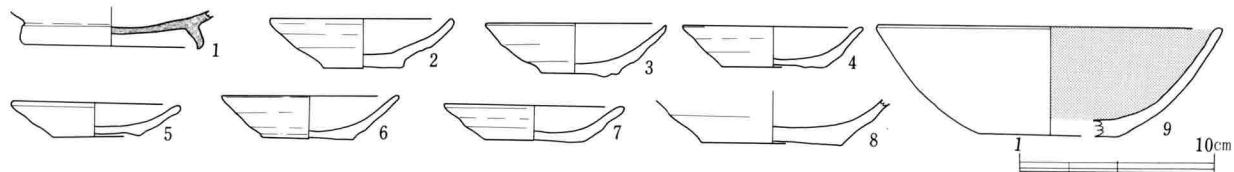
III-19 7号住居址（東より）



III-20 7号住居址（南より）



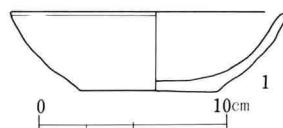
18図 7号住居址実測図



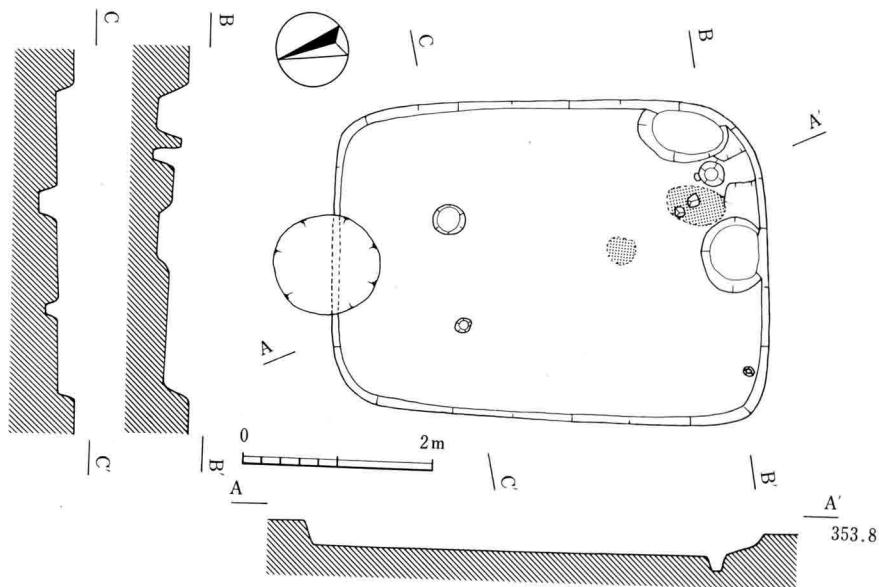
19図 7号住居址出土土器実測図

**8号住居址 (20・21図、III-21図)**

遺構 A調査区の西側に位置し、単独で検出された。形態は南壁がやや長い隅丸長方形を呈する。規模は主軸4.62m・東西軸中央3.4mになり、主軸方向はN15°Eを指す。掘り込みは東壁18cm・西壁19cm・北壁26cm・南20cmを測る。床面は南壁寄りは西傾し、北壁寄りは東傾するが南北軸中央は平坦である。各隅付近を除き堅緻である。カマドは南壁の南東隅に構築が推定されるが調査では住居址内の火床と構築石材の散在を確認したにすぎない。火床両側の土坑状掘り込みは貯蔵穴であろう。柱穴は4個検出され不整配列であるが主柱穴と思



20図 8号住居址出土  
土器実測図



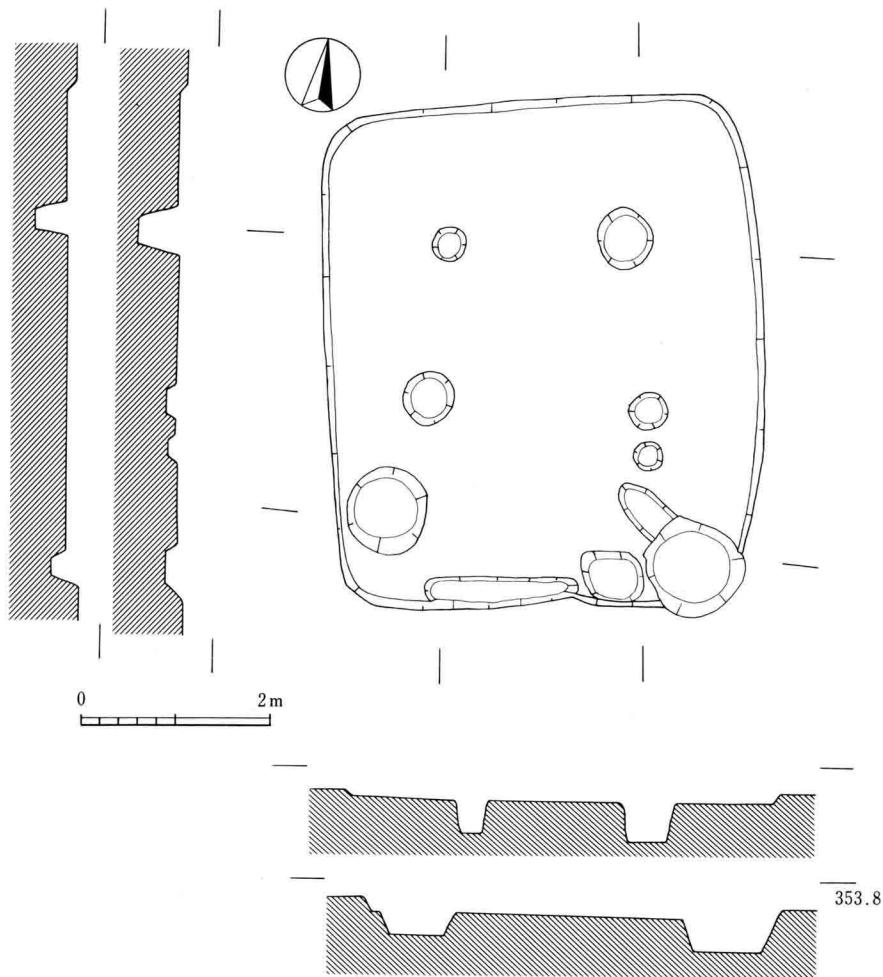
21図 8号住居址実測図



III-21 8号住居址

える。

遺物 出土量は少ない。器種には長楕円形を呈し独立した鍔を有する土師器羽釜・小形の甕・壺、灰釉陶器瓶がある。このほか棒状鉄製品（61図5）が出土している。図示した土師器壺は大形品に属するもので、内面はヘラミガキが施こされるが黒色処理されない。小形の皿形の壺も1個体ある。



22図 9号住居址実測図

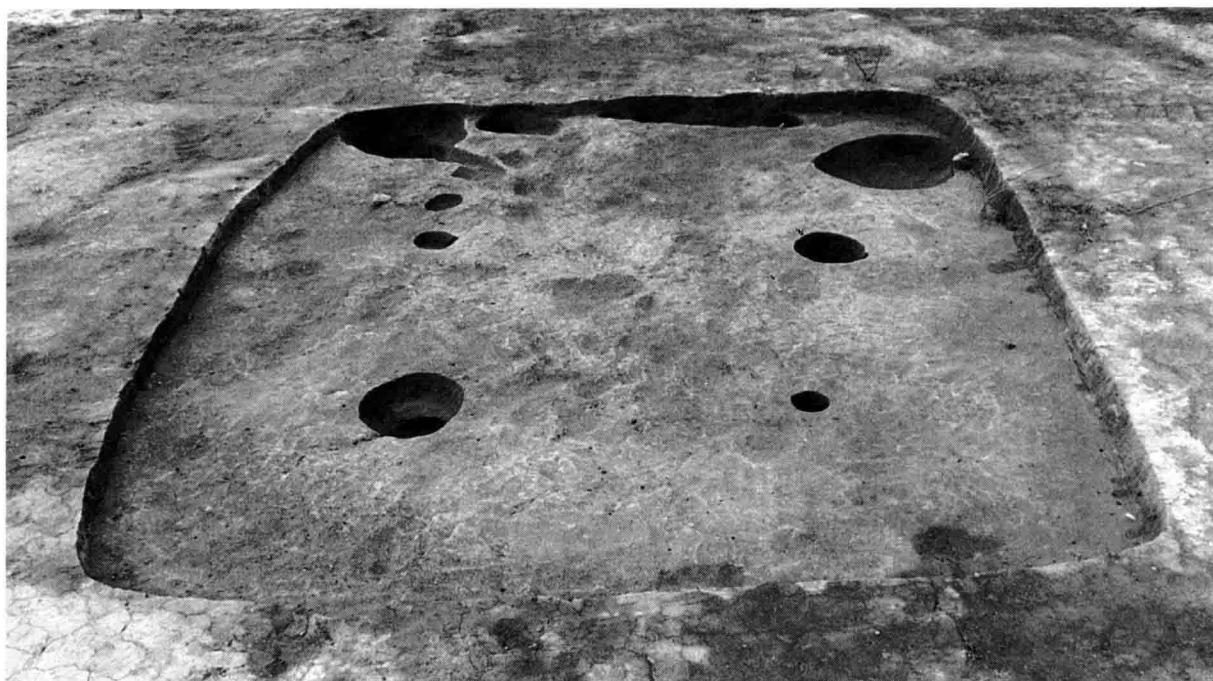


III-22 9号住居址（東より）

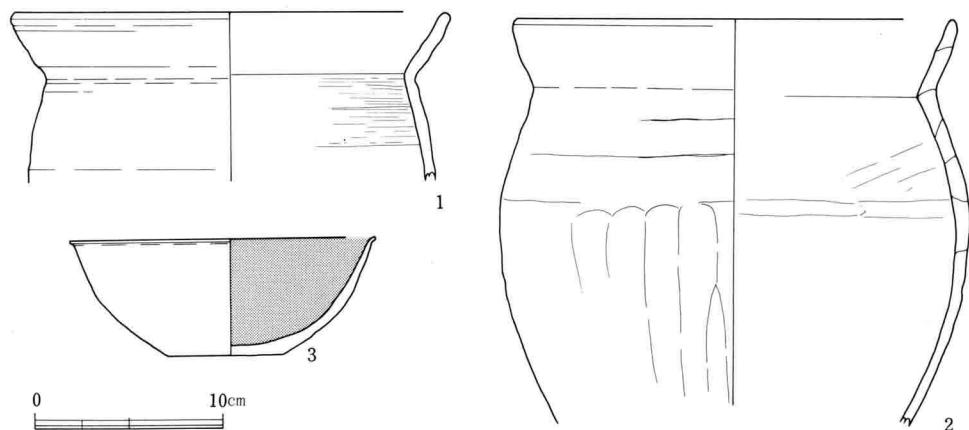
### 9号住居址 (22・23図、III-22・23)

遺構 A調査区の西側に位置する遺構群のひとつで14号住居址と重複関係にあり、これよりも後出の遺構である。形態は東壁が丸味を帯びるが隅丸長方形を呈する。規模は東西軸4.66m、南北軸5.3mになる。南北軸方向はN10°Wを指す。掘り込みは浅く東壁9cm・西壁6cm・南壁10cm・北壁8cmを測り、覆土は黒褐色砂質土である。床面は若干中央へ凹むがほぼ平坦であり、中央及び南東隅付近は堅緻である。カマドの痕跡は確認できなかったが、南東隅の円形土坑が住居址外へ張り出して掘り込まれており後出の遺構と考えれば、南壁東側の張り出し状況からこの位置に求められる。主柱穴は内側の4個方形配列ピットをもってこれにあてる。

遺物 出土量は少ない。器種には土師器甕(1・2)・壺(3)があるにすぎない。甕は口縁部が長く外開し、体部上位に最大径を有し、肩部より上位はロクロ調整、体部はヘラケズリ調整によって仕上げられる。壺は壺形を呈し、内面が研磨され黒色処理を受ける。底部調整は回転ヘラケズリである。



III-23 9号住居址 (北より)



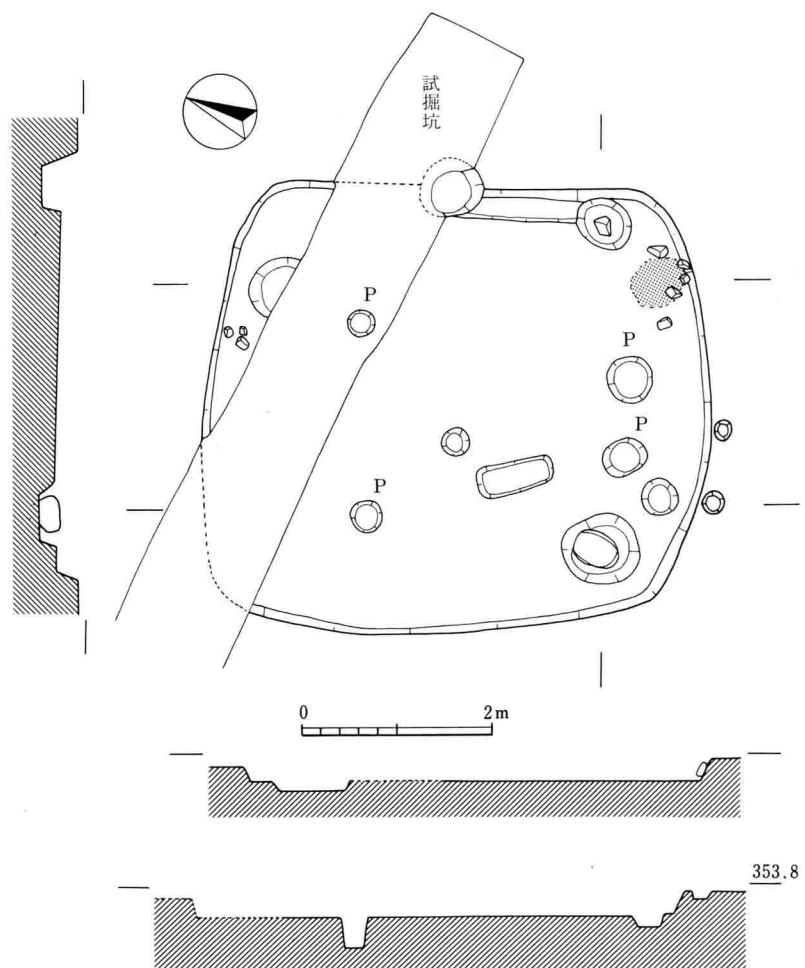
23図 9号住居址出土土器実測図

10号住居址 (24・25図、III-24・25)

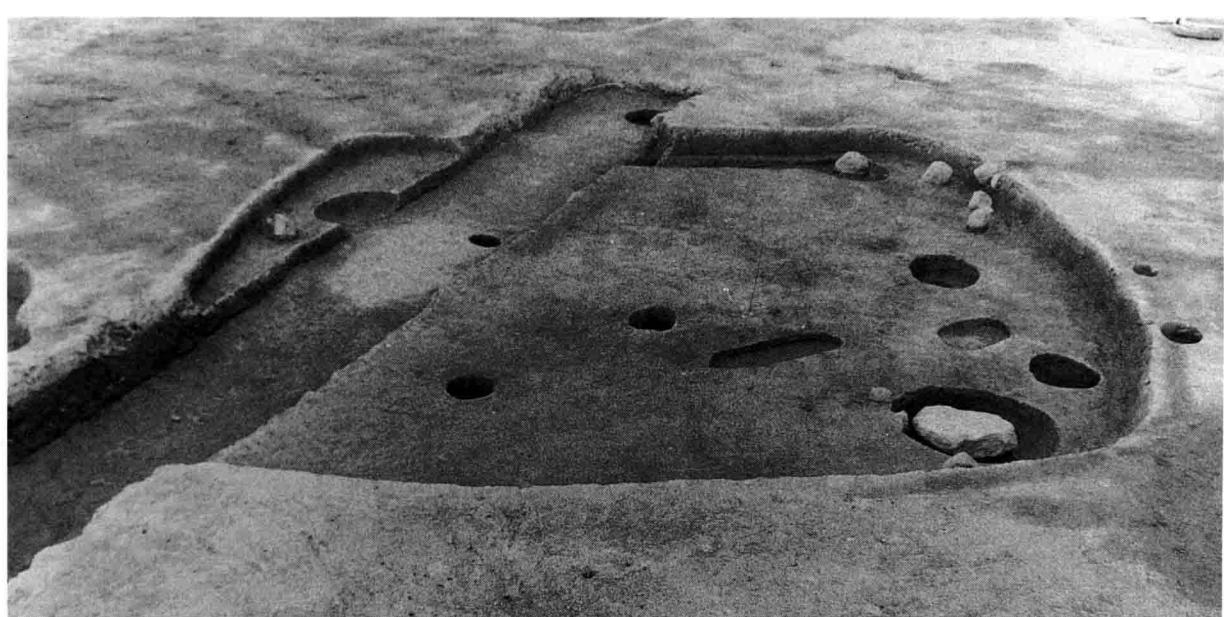
遺構 A調査区の西端の遺構群

のひとつで、12号住居址と重複関係にあり、これよりも後出の遺構である。北壁側の一部は試掘坑により破壊を受ける。形態は各壁が丸味を帯びる隅丸方形を呈する。規模は主軸5.2m・東西軸4.7m程になる。掘り込みは東壁15cm・西壁23cm・北壁16cm・南壁23cmを測り、床面は西・南傾する。カマドは南壁の南東隅に構築されるが調査では火床及び構築石材を検出したにすぎない。主柱穴は中央の台形配列のものをもってあてたい。南西隅部に直径77cm程の土坑に叩き台石と思われる厚さ20cm程の平石が埋め込まれていた。主軸方向はN20°Wを指す。

遺物 出土量は少ない。器種には土師器甕(1)・羽釜(2)・片口鉢(3)・壺(5, 6)、須恵器甕、灰釉陶器瓶、白磁碗(4)がある。このほかに粘板岩製砥石が出土している。



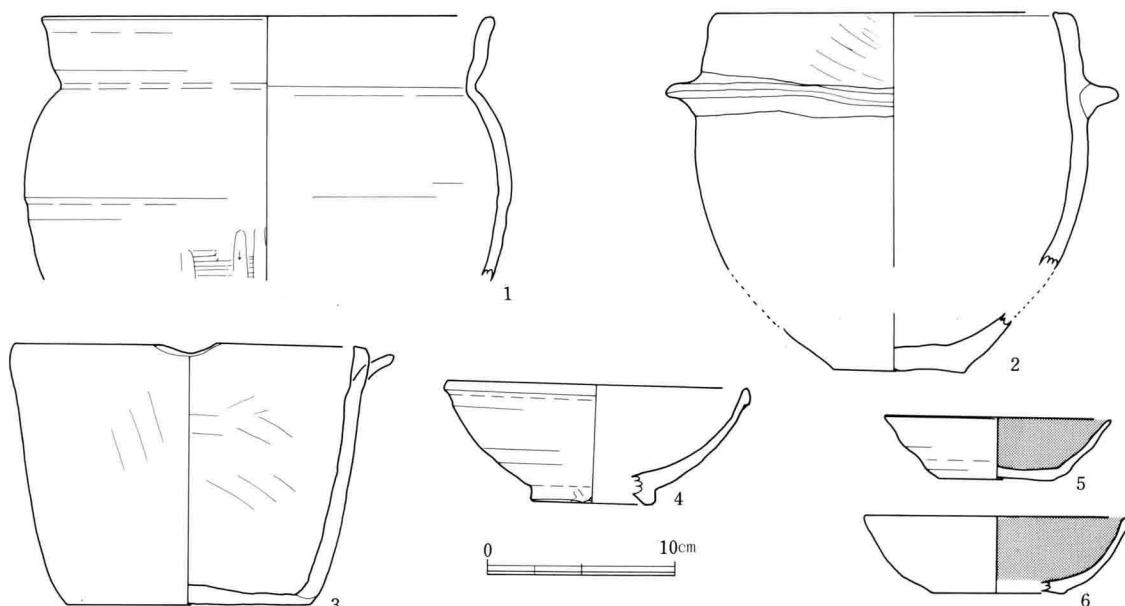
24図 10号住居址実測図



III-24 10号住居址 (西より)



III-25 10号住居址、2号土坑（北より）



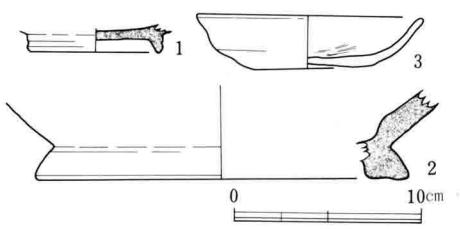
25図 10号住居址出土土器実測図

る。甕の体部上半はロクロ調整で、下半はタタキ後ヘラケズリで仕上げる。羽釜は鍔が全周するもので、体部から口縁部まで内弯気味に立ち上がり底部は平底になる。調整はヘラナデである。3は1口の片口を有する浅鉢形のもので、ヘラナデ調整が施こされ、底部はやや上げ底になる。坏は共に大形に属し、内面が研磨され黒色処理が施こされるが、5の体部は直線的であるのに対し6は内弯する相違がある。4は中国産の輸入磁器で、角高台を削り出し、体部は内弯しながら立ち上がり、玉縁口縁部に至る。内外面と白濁色を呈し、雑な作りである。尚、坏類に皿形の小形のものがあり、灰釉陶器瓶も2個体以上の破片がある。

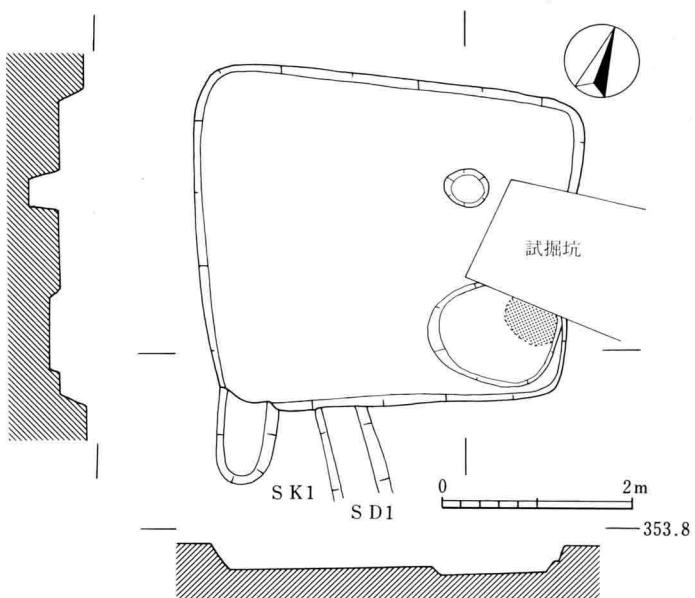
### 12号住居址 (26・27図、III-26)

**遺構** 住居址としてはA地区の北端に位置する。10号住居址、1号土坑、1号溝址と重複関係にあり、10号住居址より先行するが、他の遺構との新旧関係は不明である。形態は隅丸長方形というよりも台形状を呈する。規模は東西軸4.1m・西壁3.6m・東壁3.1mになる。検出面からの掘り込みは東壁17cm・西壁23cm・南壁29cm・北壁30cmを測る。床面は平坦で軟弱である。カマドは南東隅に長軸1.4m・深さ10cm程の不整円形の土坑内に焼土が認められることからこの位置に求めるが構築石材は見られなかった。柱穴は直径40cm・深さ35cmのものを1個検出したにすぎない。

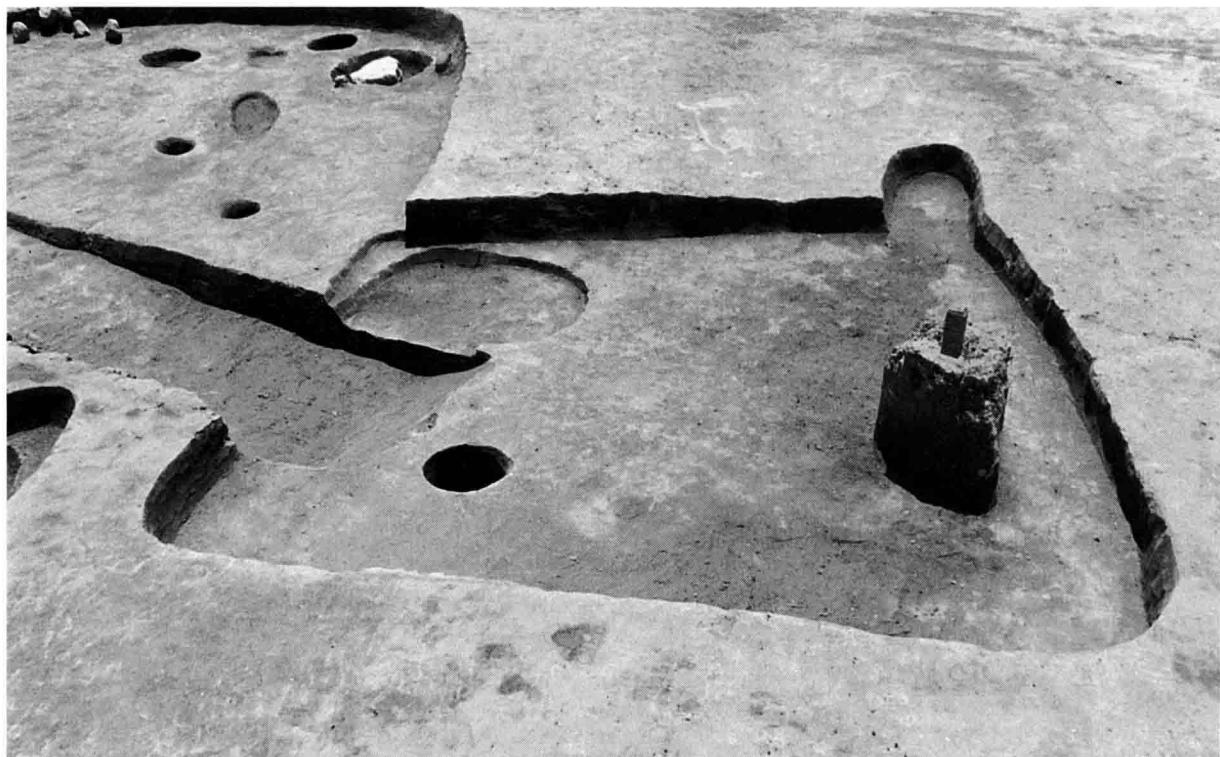
**遺物** 出土量は少ない。器種には土師器甕・鉢・壺(3)・塹、灰釉陶器甕(1)・壺(2)がある。このほかに不明鉄製品が1点出土している。甕には大小2種類あり、小形のものはロクロ調整痕が、大形のものにはヘラケズリ調整痕が残る。鉢の内面は研磨され黒色処理が施される。



26図 12号住居址出土土器実測図



27図 12号住居址、1号土坑実測図



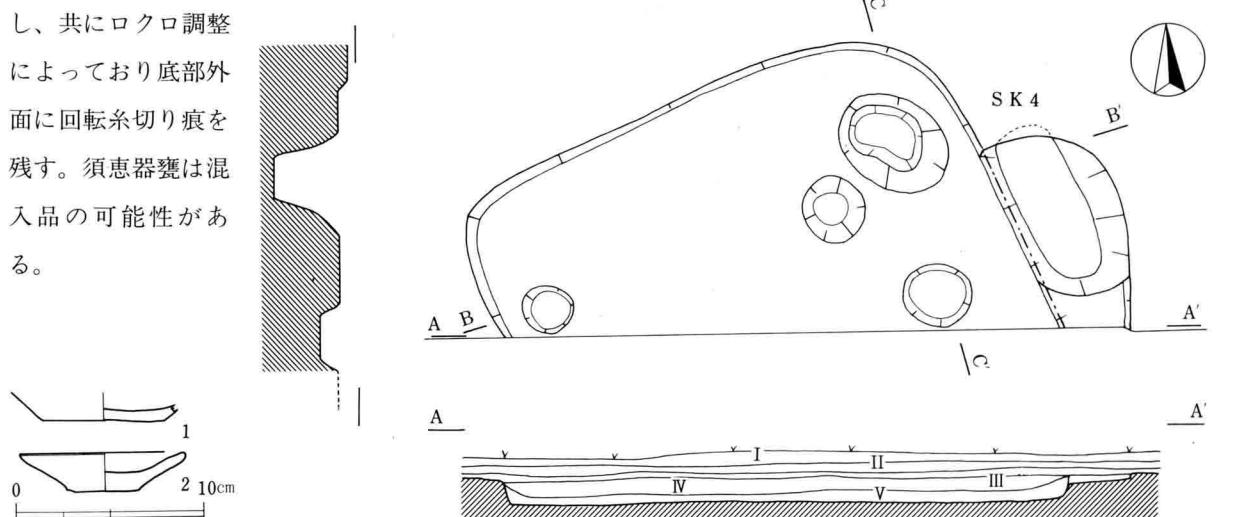
III-26 12号住居址

13号住居址 (28・29図、III-27・44)

遺構 A地区の西側に位置する。4号土坑と重複関係になるがこれよりも新しい。調査では北側半分程露呈したにすぎず、他は調査区域外にある。形態は南北方向に長軸のある隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は長軸不明・東西軸5.3mになる。掘り込みは東壁21cm・西壁22cm・北壁12cmを測る。覆土は2層あり、上層が黒灰色砂質土で、下層が同色同質土であるが黄褐色砂質土小塊を含む。床面は平坦で軟弱である。柱穴様ピットを4個検出したが北壁添いの2個を主柱穴と予想する。調査した範囲からはカマドの痕跡は認められない。

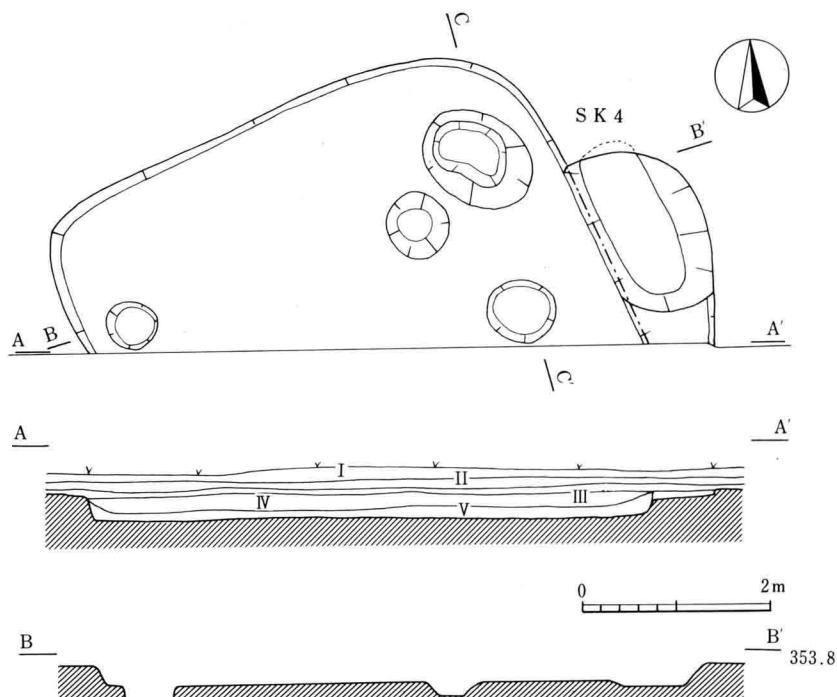
遺物 出土量は少なく、図上復元可能なものは土師器壺(1・2)があるだけである。このほか破片に土師器羽釜・塊、須恵器甕、灰釉陶器塊、綠釉陶器塊がある。破片出土の土師器塊は高脚高台が付される。1は大形品で、2は皿形を呈

し、共にロクロ調整によっており底部外  
面に回転糸切り痕を  
残す。須恵器甕は混  
入品の可能性があ  
る。



28図 13号住居址  
出土土器実測図

- I. 青灰色粘土(旧水田耕作土)
- II. 黄褐色粘質土(床土)
- III. 茶褐色鉄分沈澱層
- IV. 黒灰色砂質土
- V. " (黄褐色砂質土小塊含)



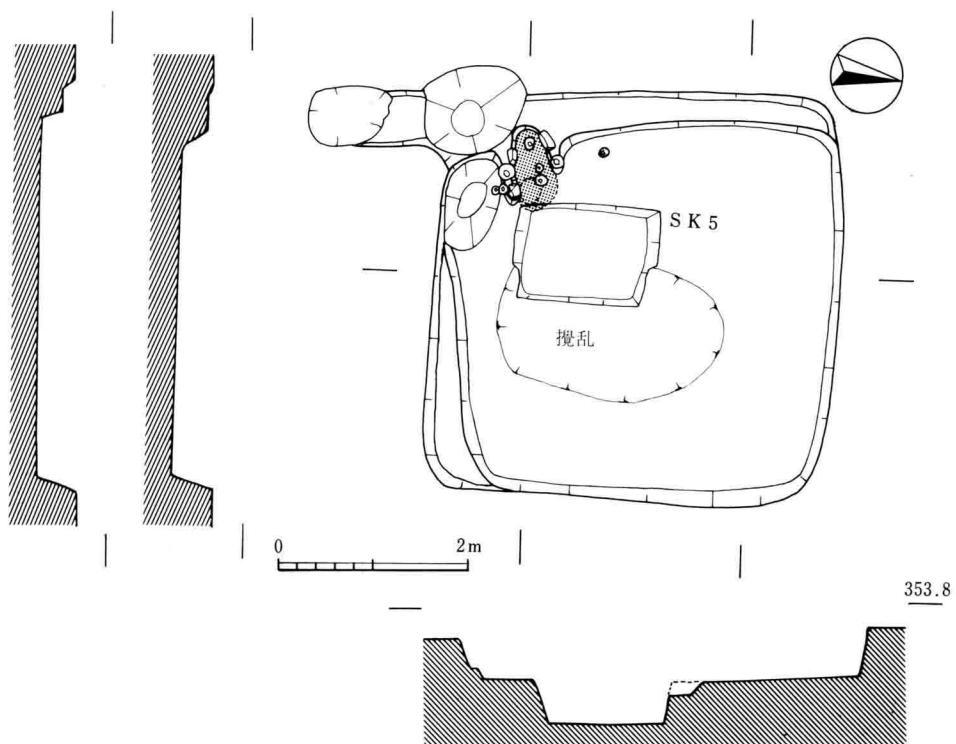
29図 13号住居址、4号土坑実測図



III-27 13号住居址

14号住居址 (30・31図、III-28~31)

遺構 A調査区の中央付近に位置する遺構群のひとつで、9号住居址と重複関係にあり、5号土坑を内包する。形態は隅丸方形をとる住居内の北壁に長い台形の住居が掘り込まれた形になる。北壁・東壁を共有する2軒の住居址の可能性があり、また西壁のテラスはピット群2へ連ながる溝状遺構も考えられる。規模は中の住居址の法量で測ると主軸南壁3.56m・北壁3.88m、南北軸4m前後になる。掘り込みは東壁32cm・西壁(28)cm・南壁(30)cm・北壁52cmになるが床面は平坦である。カマドは西壁の南西隅に構築され、石芯両袖形のものである。カマ



30図 14号住居址、5号土坑実測図



III-28 9号(上)・14号(下)住居址



III-29 14号住居址、5号土坑（北より）



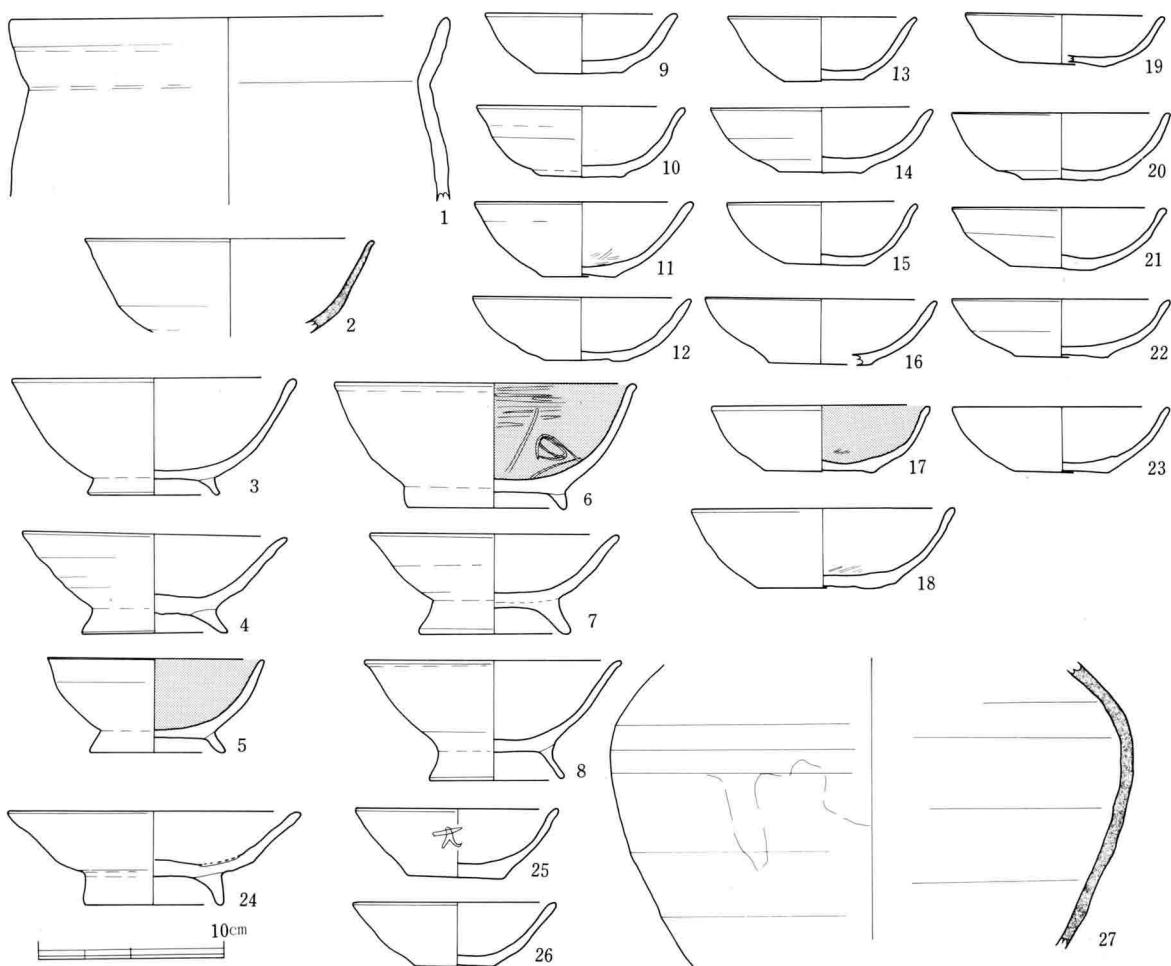
III-30 14号住居址カマド付近遺物出土状態



III-31 14号住居址カマド

ド周辺から完形の土師器壺・塊が8個体出土した。カマド左側に長軸1m・深さ10cm程の楕円形を呈する貯蔵穴がある。床面は比較的堅緻で5号土坑上面も同様であった。住居址の調査終了後床面が乾燥しひび割れ状態から5号土坑の存在を知ったが、土坑内から出土した土器片と住居址内の調査で得たものと接合したものがあり、14号住居址の付属施設としての利用も考えられる。柱穴は検出されない。

遺物 出土量は比較的多い。器種には土師器甕(1)・壺(9~23)・塊(3~8)、須恵器甕、灰釉陶器塊(2)がある。このほかにL字状を呈する鉄製品(61図6)が出土している。



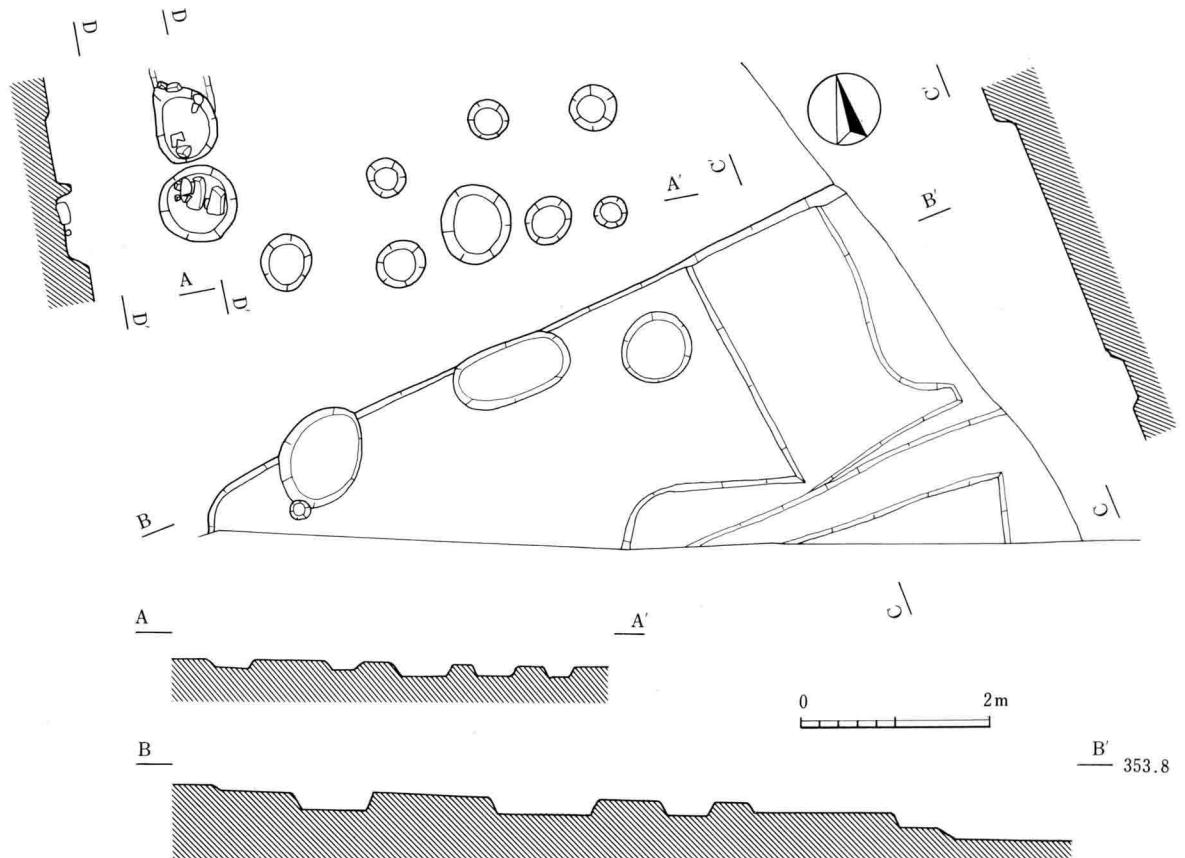
31図 14号住居址（1～23）、5号土坑（24～27）出土土器実測図

### 15号住居址（32図・III-32）

遺構 A地区の中央より南東に位置する。調査では北壁側の一部を検出したにすぎず、大部分は調査対象地域外にある。またピット群2と重複関係にあり、他の遺構とも切り合っているよう複雑な様相を呈す。特に東側では2軒以上の住居址、溝址が存在するよう床面に段を形成する。形態は北西隅の様相から隅丸方形を推定する。規模は不明である。掘り込みは浅く8cmを測るにすぎない。床面は東に傾斜し軟弱である。北壁の方向はN



III-32 15号住居址、ピット群2



32図 15号住居址、ピット群2 実測図

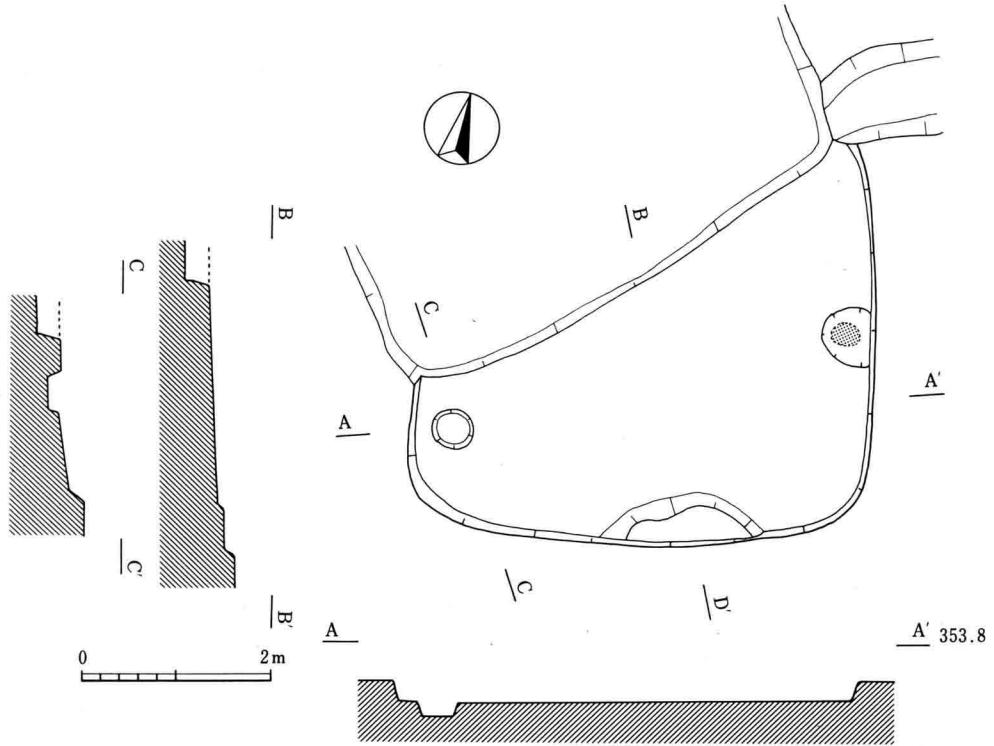
66° Eを指す。柱穴は北西隅に直径20cm・深さ15cmのものを1個検出したにすぎず、カマドも確認されない。

遺物 出土量は少なく、図上復元可能なものはない。器種には土師器甕・壺・壇、灰釉陶器瓶・皿がある。

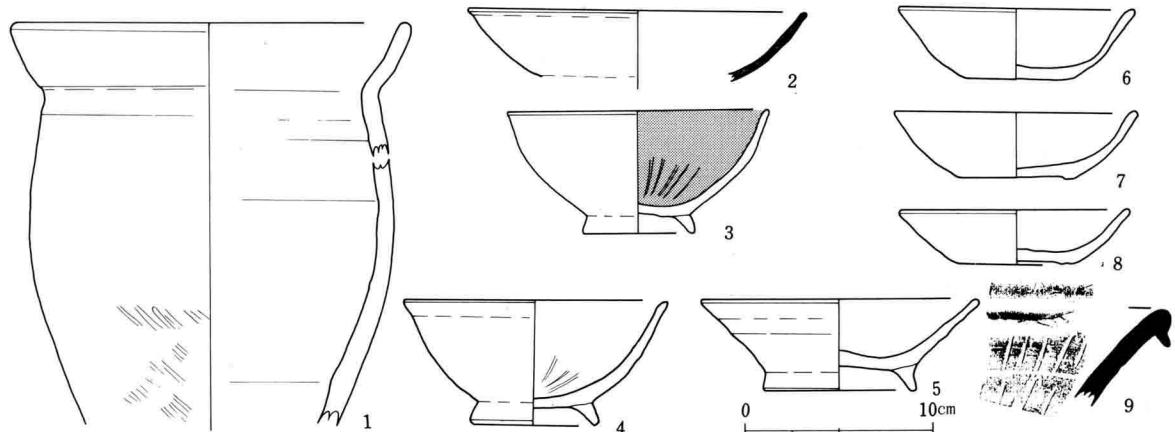
#### 16号住居址 (33・34図、III-33)



III-33 16号・20・22号・21号住居址（南より）



33図 16号住居址実測図



34図 16号住居址出土土器実測図

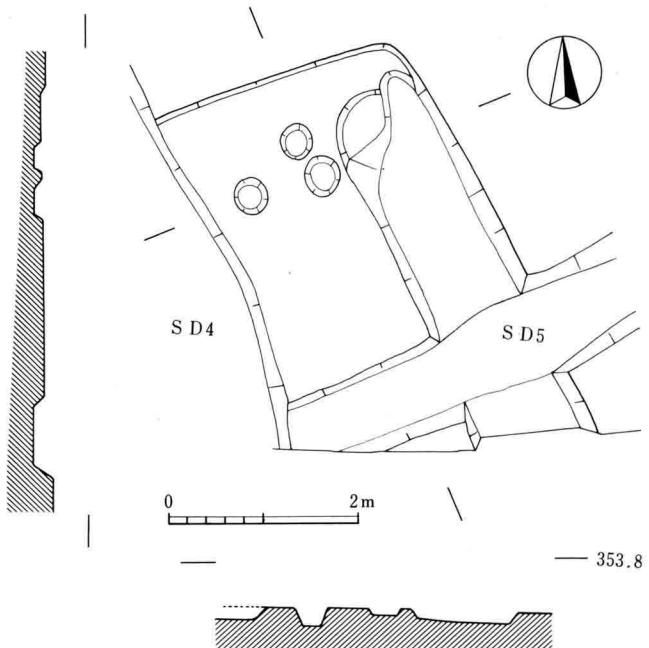
遺構 A調査区中央の東側に展開する住居群のひとつで、20号住居址と重複関係にあり、これよりも新しい。調査では新旧関係が不明であったので同時に調査を進めたため形態全容を把握することができなかった。形態は隅丸長方形で、東西軸4.85m・南北軸4.4mの規模になるものと推定する。検出面からの掘り込みは東壁21cm・西壁19cm・南壁18cmを測る。床面は西・北に傾斜し軟弱である。カマドは東壁中央に構築されたものと思われ、5cm程の凹みの中に焼土が残存していた。南壁東寄りに入口施設とも考えられる高まりが見られる。柱穴は南西隅から直径32cm・深さ15cmのものが1個検出されたにすぎない。

遺物 出土量はそれ程多くない。器種には土師器甕(1)・羽釜・塹(3～5)・壺(6～8)、須恵器甕(9)、灰釉陶器皿(2)・塹がある。1の体部上半はロクロ調整で、下半にはタタキ目が残る。塹類は体部が内弯し低い三ヶ月高台が付されるものと、同様な高台が付され体部が直線的に外開するものがあり、後者に見られた高脚高台のものはない。3・4の内面は研磨され、3には黒色処理が施こされる。壺は大形製品に属し、小形の皿形のものは認められない。このほかに鉄鎌の茎(61図4)及び大小の鉄滓が7個出土している。

### 17号住居址 (35図、III-34)

遺構 A調査区中央より南東に位置し、西側を4号溝址、南側を5号溝址により破壊をうけているため全容は不明である。形態は方形あるいは長方形を呈するものと推定する。規模は南北軸が5号溝址内に存在が求められることから南北軸4.1m以内になる。掘り込みは東壁8cm・北壁6cmを測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴は直径35~40cm・深さ10~20cm程のを4個検出したが主柱穴の比定は困難である。カマドの存在は確認されない。尚、東壁に添って幅1.15m・深さ20cmのU字溝が南方向へ貫いている。覆土は同色同質であるが住居址との関係は不明である。5号溝址を切斷して更に南に延びていることから、別個の遺構と考えた方が妥当であろう。南北軸の方向はN24°Wを指す。

遺物 出土量は少なく、小破片が多いため図上復元可能なものはない。器種には土師器羽釜・环・碗、須恵器短頸壺、灰釉陶器瓶・碗がある。



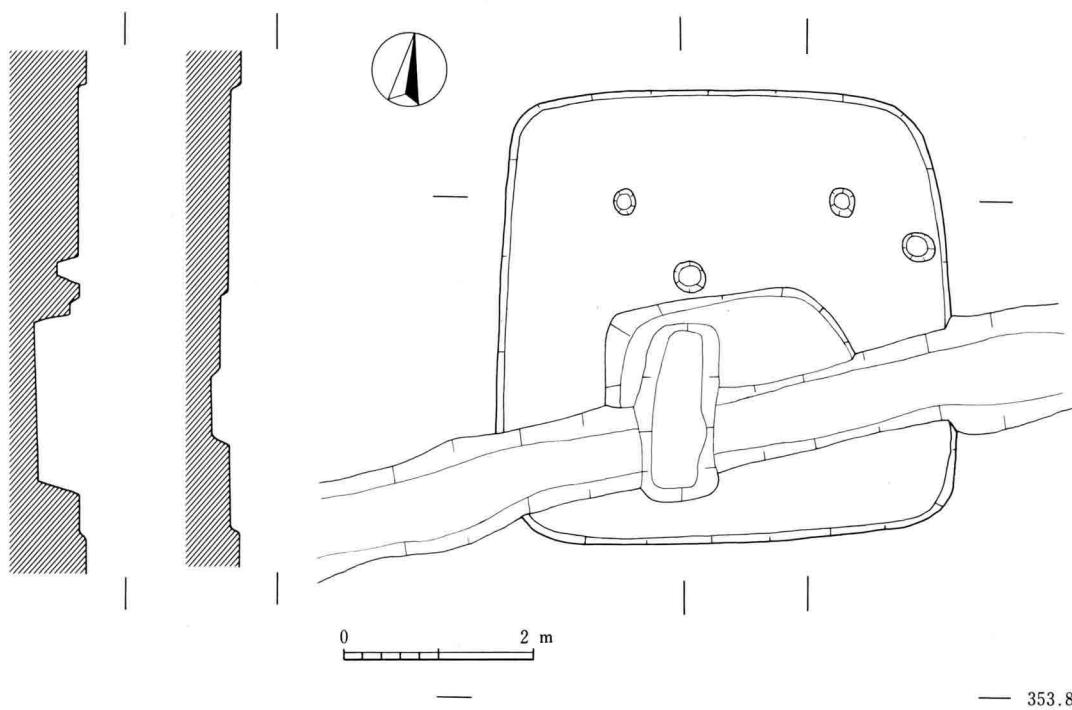
35図 17号住居址実測図



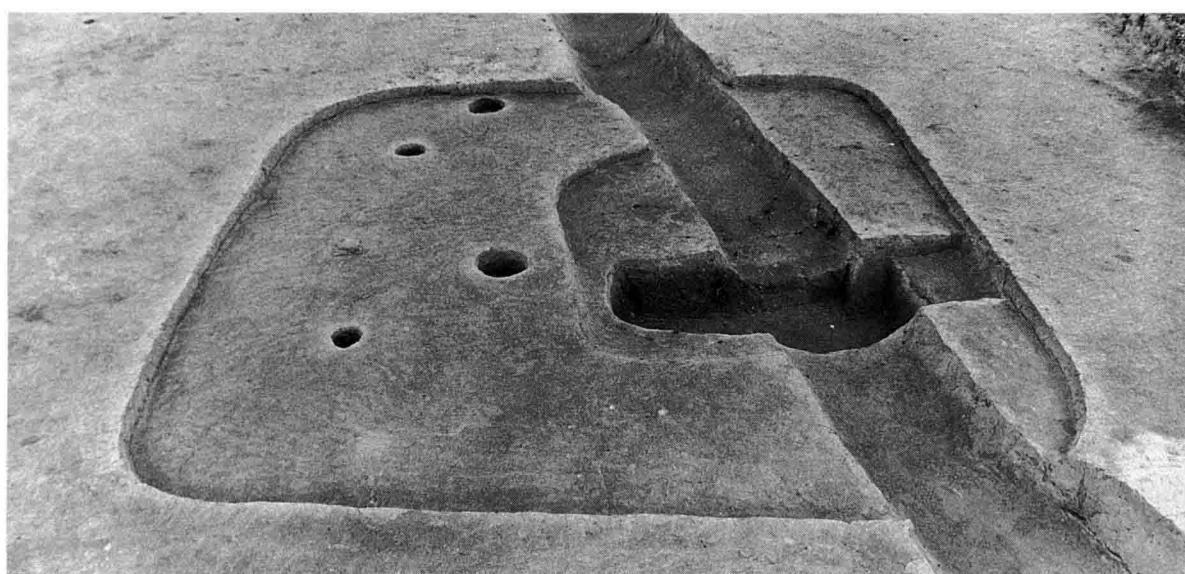
III-34 17号住居址

18号住居址 (36図、III-35)

遺構 A調査区の東端南側に位置し、南側を5号溝址が貫ぬく。形態は南壁が若干長い隅丸方形を呈する。東西軸4.8m・南北軸4.75mの規模になる。検出面からの掘り込みは東壁11cm・西壁6cm・南壁10cm・北壁12cmを測る。南北軸方向はN10°Wを指す。床面は南北では中央やや凹み、東西では東傾気味である。柱穴は直径30cm前後・深さ15~25cmのもの4個検出され、北壁に添った2個は壁間の距離が同等であり主柱穴であろう。南壁添いには認められないが5号溝址内にその存在を求めるこどもできる。カマドの痕跡は確認されない。尚、この遺構内に長方形を呈する土坑を内包するが付属施設かどうか不明である。14号居住址内5号土坑と同様の機能が考



36図 18号住居址実測図



III-35 18号住居址

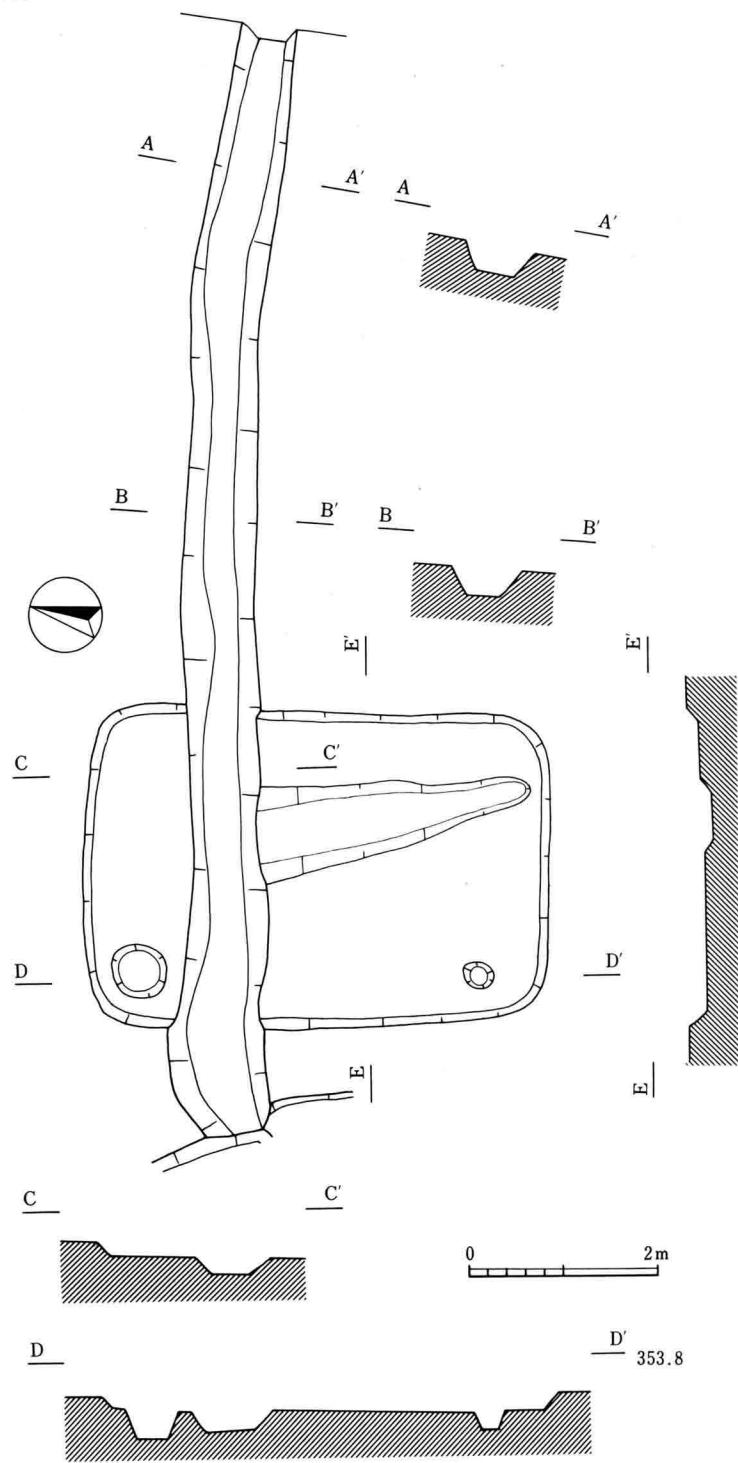
えられる。長軸1.9m・東西軸0.9m・深さ47cmの規模で、底面は平坦である。

遺物 出土量は少なく、図上復元可能な土器片はない。器種には土師器甕・壺・塊、須恵器甕、灰釉陶器瓶・皿がある。土師器甕は体部上半に口クロ調整痕、下半にタタキ目を残す。塊は内面が研磨され黒色処理が施される。

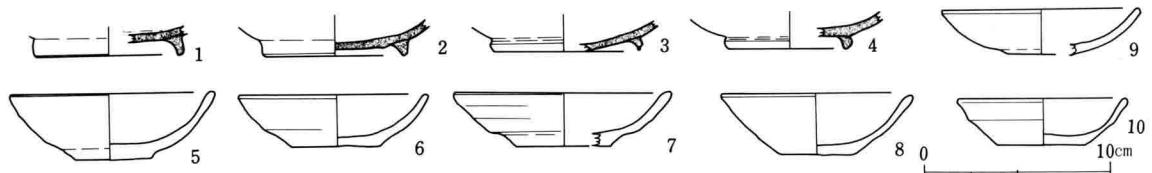
#### 19号住居址 (37・38図、III-36)

遺構 A調査区の東端中央に位置し、北側を6号溝址が貫ぬく。形態は隅丸長方形を呈する。長軸4.92m・東西軸3.38mの規模で検出面から掘り込みは東壁12cm・西壁16cm・南壁20cm・北壁12cmを測る。床面は平坦であるが西・南へ若干傾斜する。柱穴は直径54cm・深さ28cmのものと直径29cm・深さ20cmのもの2個が西壁際で検出されたが東壁際にはない。カマドの痕跡は確認されない。長軸の方向はN10°Wを指す。

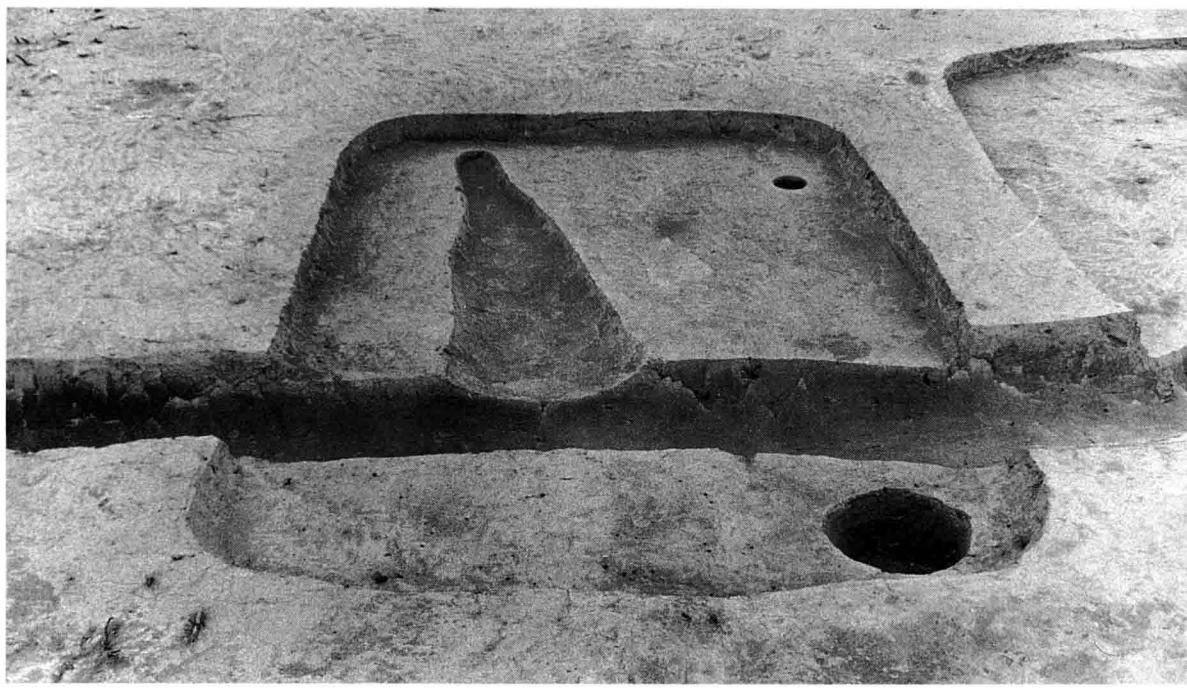
遺物 出土量は比較的多いが、そのほとんどは小破片である。器種には土師器甕・羽釜・壺(5~10)・塊、灰釉陶器塊(1~4)、羽口片がある。壺、塊類の破片が多く、塊は小形に属するものが多い。塊は低い高台が付され、中には内面が研磨され黒色処理が施されたものが7個体ある。ともに口クロ調整で底部外面に回転糸切り痕を残す。甕は体部下半の破片でタテヘラゲリ調整で仕上げる。



37図 19号住居址、6号溝址実測図



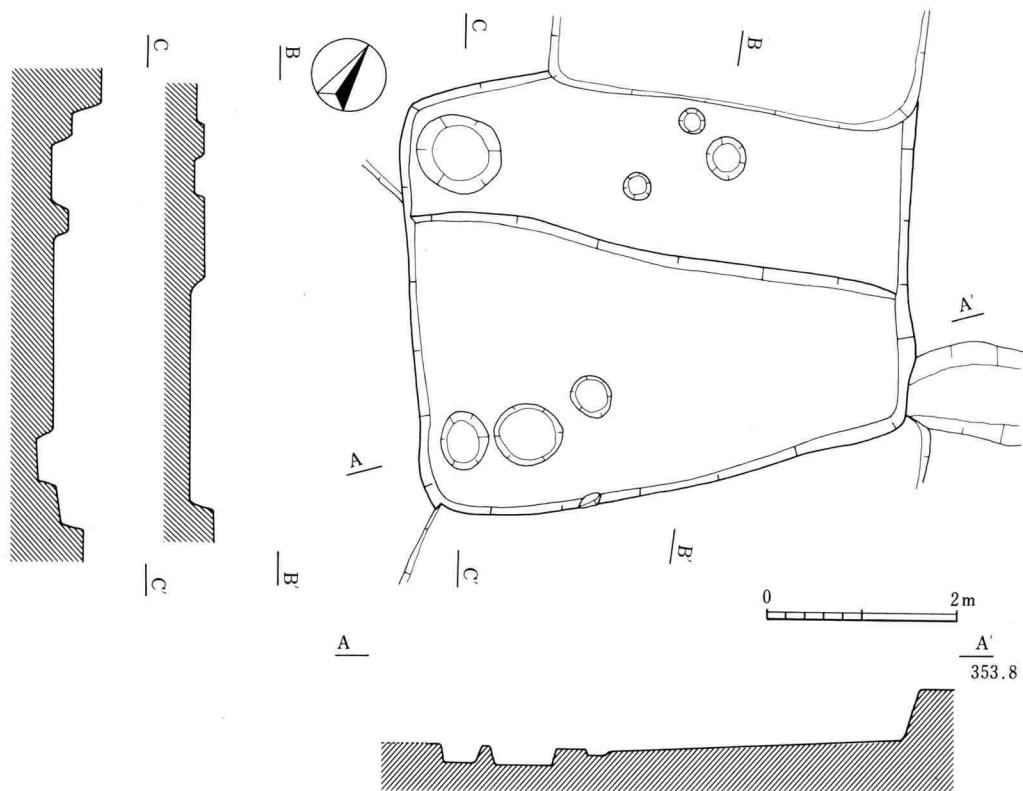
38図 19号住居址出土土器実測図



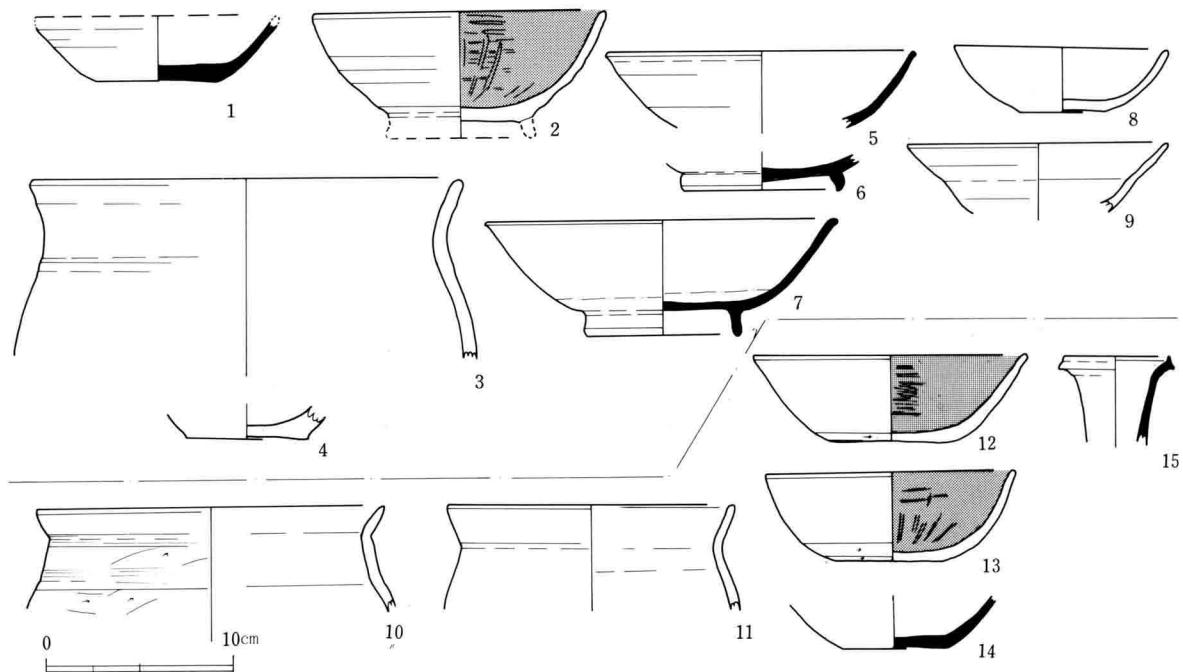
III-36 19号住居址

**20号・(22号)住居址 (39・40図、III-33・37)**

遺構 A調査区の東側中央の遺構群のひとつで7号・16号・21号住居址と重複関係にあり、中で最も古いものと予想する。形態は幾分ゆがみのある不整長方形を呈し、東西軸中央5.2cm・南北軸南側4.6mの規模になる。床面を追求中新たな落ち込みを確認し、遺物を分離するためこれを22号住居址とした。この落ち込みは20号住居址



39図 20号(22号)住居址実測図



40図 20号（1～9）・22号（10～15）住居出土土器実測図

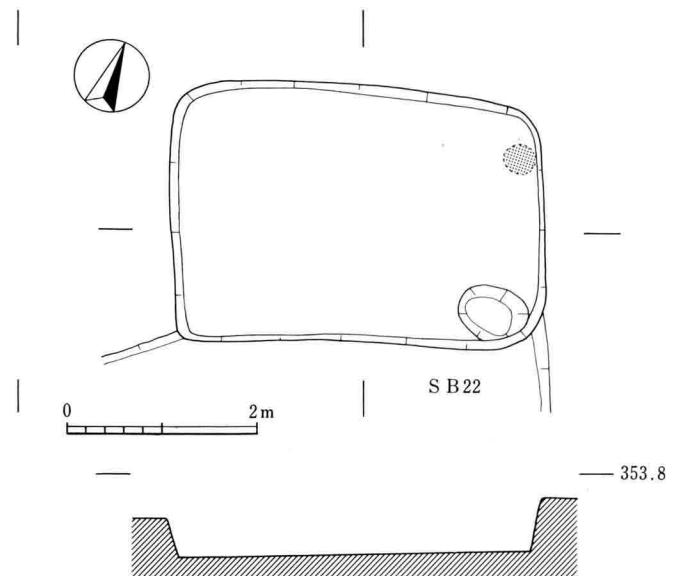
内に内包され、住居址形態にならないため20号居住址の施設と考えられる。北側半分程はベット状に高くなり、検出面からの東壁の掘り込みは43cm、西壁26cm、7号住居址床面から北壁は22cmをそれぞれ測る。ベット状床面と南半分の落ち込みの比高差は14cmである。覆土には炭化物が多く含まれていたのに対しカマド・焼土の痕跡は認められなかった。柱穴はベット部に3個、落ち込み部に3個検出したが規格性のある配列にはならない。

**遺物** 出土量は少ない。20号住居址の出土土器には土師器甕（3・4）・壺（2）・坏（8・9）、須恵器坏（1）、灰釉陶器壺（5～7）、綠釉陶器段血がある。22号住居址からは土師器甕（10・11）・坏（12・13）、須恵器坏（14）・長頸壺（15）、土錐（60図11）、棒状鉄製品（61図11）が出土している。10の甕はヘラケズリが多用され、12・13の坏底部外縁及び底部は回転ヘラケズリが施こされる。

#### 21号住居址（41・42図、III-33・37）

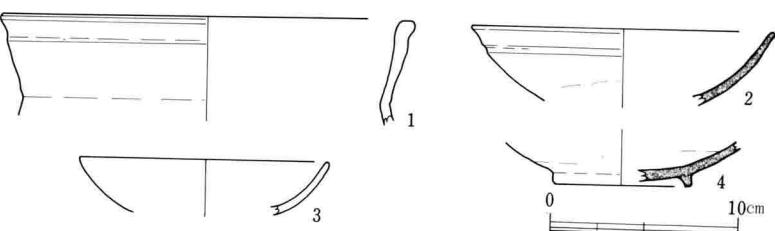
**遺構** A調査区の東側中央に展開する遺構のひとつで、7号・20号住居址と重複関係にある。7号より古く20号より新しい。形態は不整隅丸長方形を呈し、長軸4.0m・南北軸2.7m程の規模になる。検出面からの掘り込みは東壁で57cmを測る。長軸方向はN70°Wを指す。床面は平坦で軟弱である。北東隅に焼土が残存していた。柱穴は南東隅に長軸74cm・深さ20cmのものが1個検出されたにすぎない。

**遺物** 出土量は少ない。器種には土師



41図 21号住居址実測図

器甕(1)・壺(4)、須恵器甕・壺、灰釉陶器塊(2・3)がある。1の調整はロクロによっており、体部下半にタタキ目を残す。須恵器は混入品であろう。



42図 21号住居址出土土器実測図

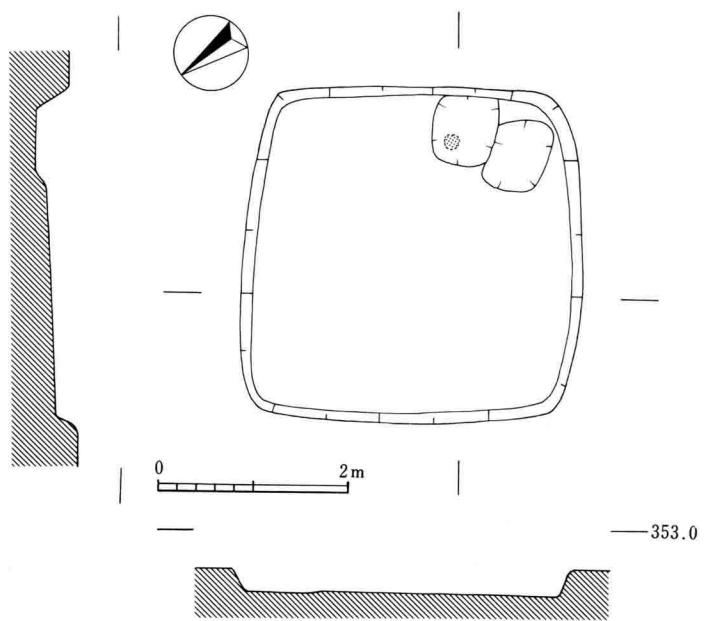


III-37 16号(上)・20号(22号)(中)・21号住居址

### 23号住居址 (43図、III-38)

遺構 B調査区の西端に位置し、単独検出遺構である。近隣遺構に7号溝址があるだけである。形態は壁に丸味を帯びる隅丸方形を呈する。東西軸3.56m・南北軸3.58mの規模になる。掘り込みは東壁24cm・西壁22cm・南壁30cm・北壁26cmを測る。東西軸方向はN55°Wを指す。床面は東・南へ幾分傾斜し軟弱である。カマドは明確でなく、東壁南寄りに10cm程の掘り込みがあり、薄い焼土を確認したのでこの位置に求める。柱穴はない。

遺物 出土量は少なく、図上復元可能なものはない。器種には土師器甕・壺、須恵器壺がある。このほかに土錐(60図11)、棒状鉄製品(61図11)出土している。



43図 23号住居址実測図



III-38 23号住居址

#### 24号住居址 (44・45図、III-39・40)

**遺構** B調査区の東端に位置し、南西隅部は調査区域外にある。形態は西壁が南に張り出す不整隅丸方形を呈する。主軸3.92m・東西軸中央3.8mの規模になる。掘り込みは東壁11cm・西壁10cm・南壁14・北壁10cmを測る。主軸方向はN32°Eを指す。床面は北・東へ傾斜し軟弱である。カマドは北壁東寄りに構築され、調査では火床と構築石材・支脚石を検出した。全長70cm程の石芯両袖形のものと推定する。柱穴は直径28cm・深さ12cmのものを1個検出にすぎない。カマド右側には貯蔵穴があり、接近した東壁下には須恵器の大甕が埋置されていた。住居址中央に長軸1.26m・短軸0.87m・深さ18cmの楕円形土坑を検出したが用途は不明である。

**遺物** 出土量は比較的多い。器種には  
土師器甕(1～3)・壺(6)、須恵器甕(7)  
・壺(5)・壺、灰釉陶器碗(4)がある。この  
ほかに土錘(60図12)が出土している。  
土師器甕は体部上半がロクロにより調整  
され、1の下半はタテハケ、2はヘラケ  
ズリ調整である。3は小形の甕で底部か  
らロクロによって作られ底部外面に回転  
糸切り痕を残す。壺類は全てロクロ調整  
で、ロクロからの切離は回転糸切り技法  
によっており、6の内面は研磨され黒色  
処理が施される。須恵器甕は口縁部が  
直立し短頸壺形態である。肩部から底部  
外面全体に平行タタキ目を残す。肩部に  
突起が付される。55cmの器高を推定す  
る。

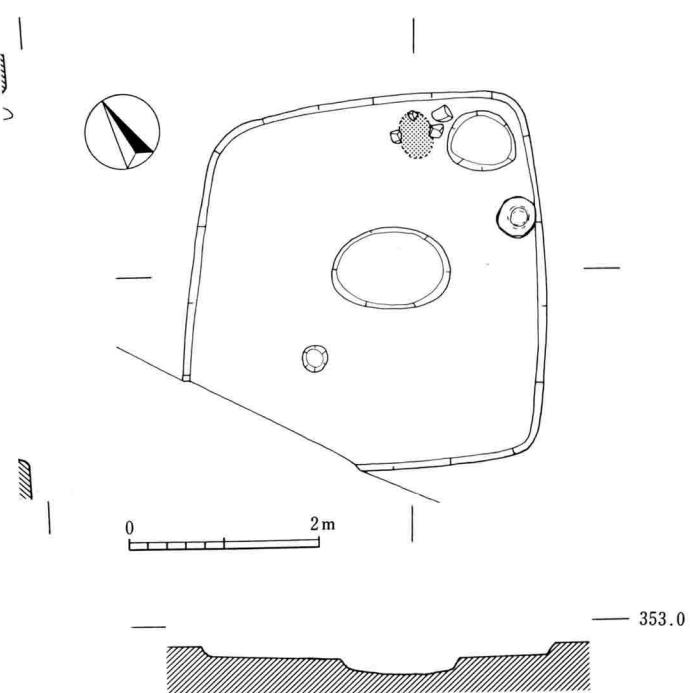
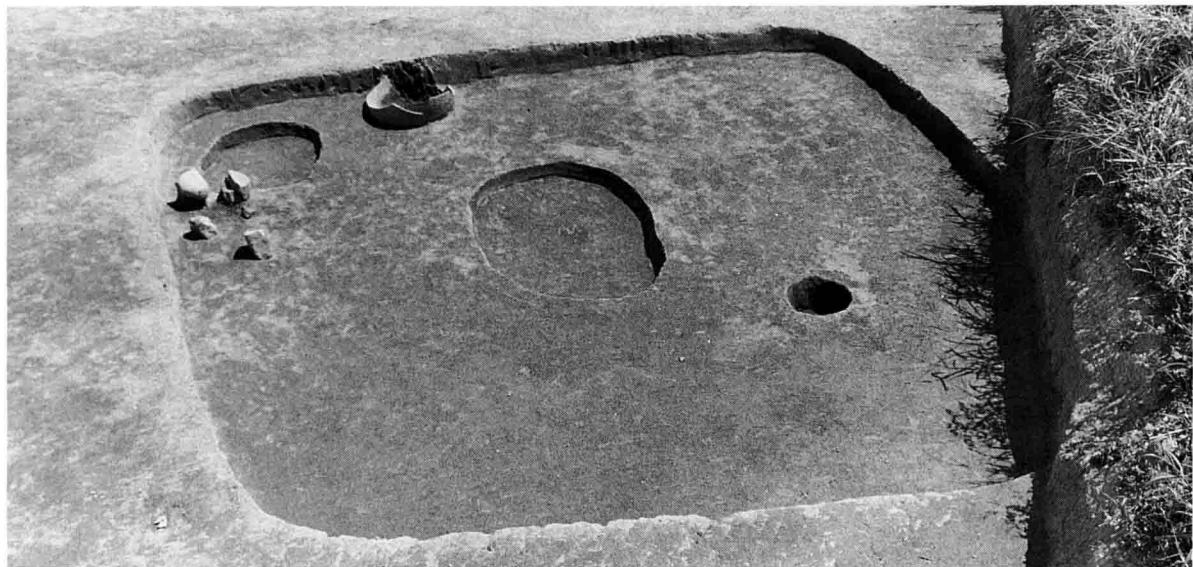


図44 24号住居址実測図



III-39 24号住居址



III-40 24号住居址カマド周辺

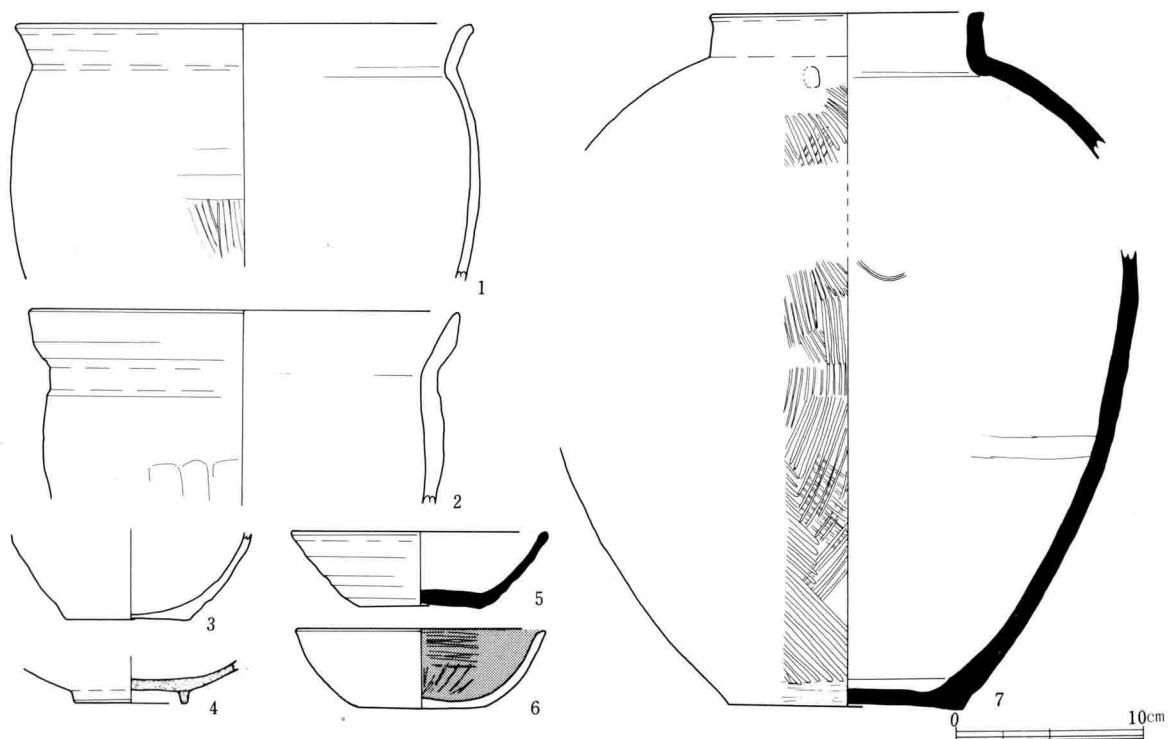
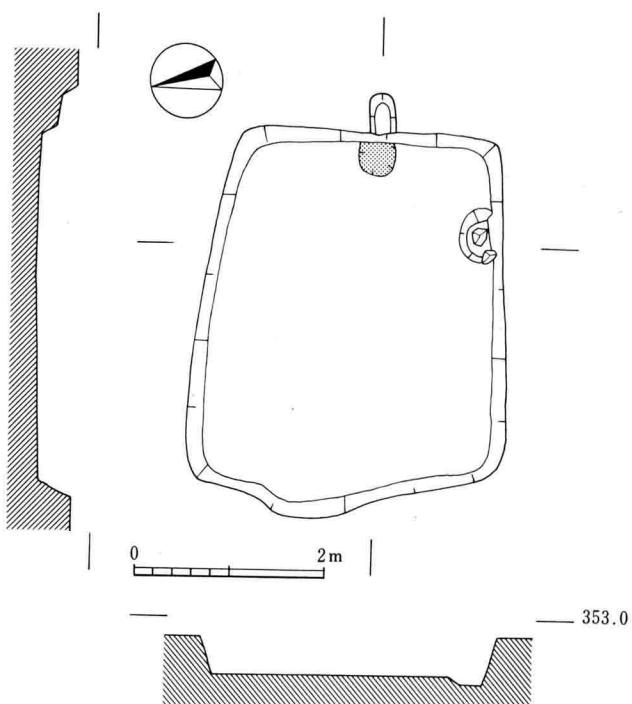


図45 24号住居址出土土器実測図

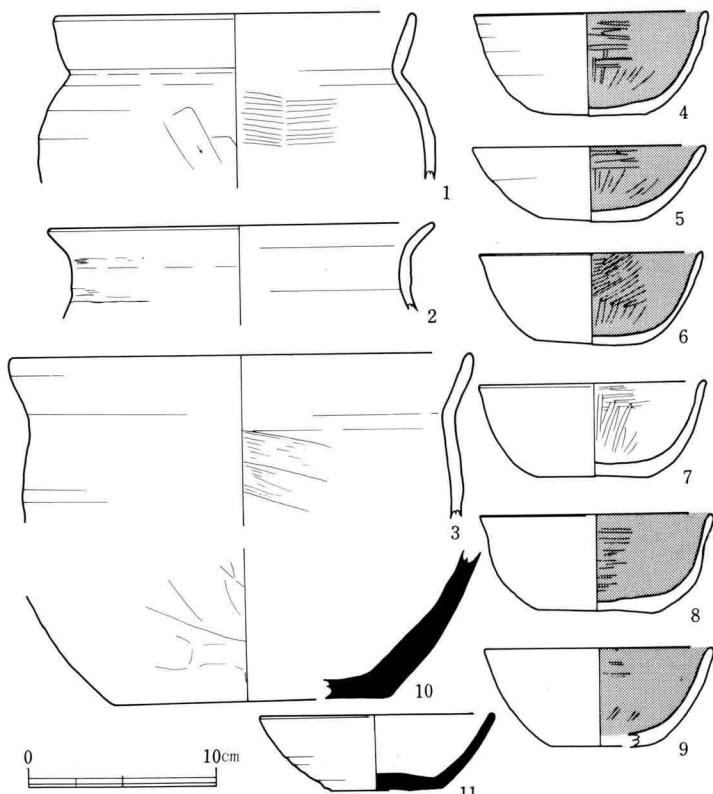
### 25号住居址 (46・47図、III-41・42)

遺構 B調査区の東側遺構群のひとつで、単独検出遺構である。近隣に24号・26号住居址、6号土坑、8号溝址がある。形態は西壁が長く張り出す、台形状を呈する不整長方形を呈する。主軸最大長4.1m・西壁長3.3m・東壁長2.7mの規模になる。掘り込みは東壁36cm・西壁35cm・南壁44cm・北壁40cmを測る。主軸方向はN85°Wを指す。床面は比較的堅緻であるが東西間は中央が若干凹む。カマドは東壁中央に構築されており、調査では外へ45cm程突出する煙道及び浅く凹む火床を確認したにすぎない。南壁カマド寄りに長軸58cm・深さ8cmの掘り込みがあり、貯蔵穴と思える。柱穴は確認されない。

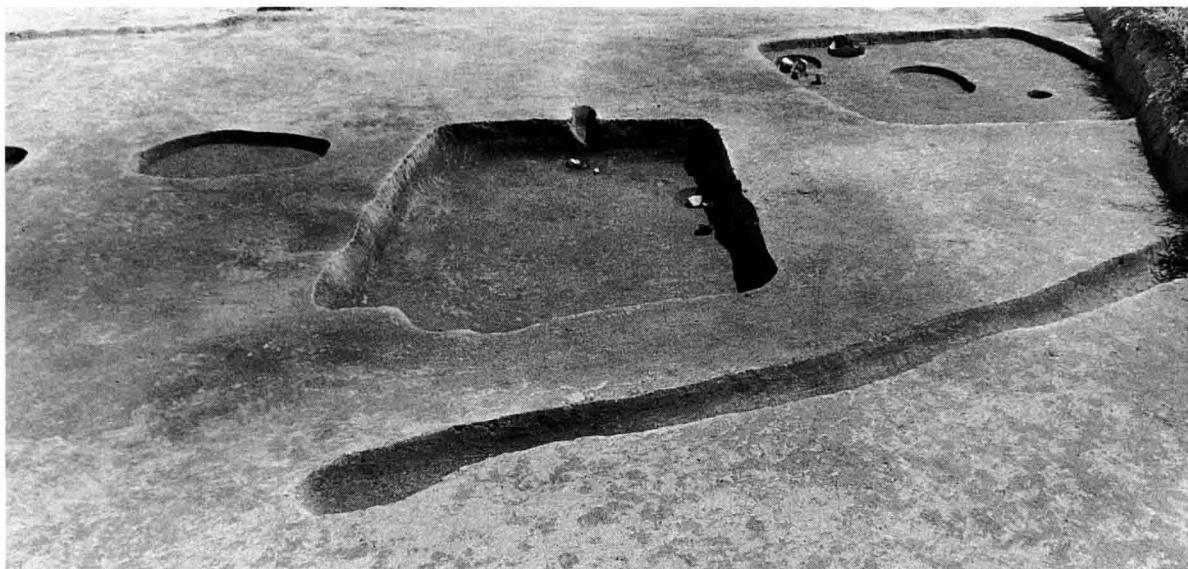
遺物 出土量は比較的多いが、その多くは小破片である。器種には土師器甕(1～3)・壺(4～9)、須恵器甕(10)・壺(11)がある。このほかコ字状の用途不明の鉄製品(61図8)が出土している。1・3は体部上半はロクロにより調整され、1の下半はヘラケズリで仕上げる。2は頸部が立ち上がり、体部をヘラケズリによって薄くする武藏型の甕である。土師器壺は共に体部が内弯する器形になり、内面はヘラミガキを施し、7を除き黒色処理を受ける。底部外面の調整は4が回転ヘラケズリ、5・9は手持ちヘラケズリによるが、7・8には回転糸切り痕を残す。6は磨耗が著しく観察できなかった。須恵器の壺には回転糸切り痕がある。



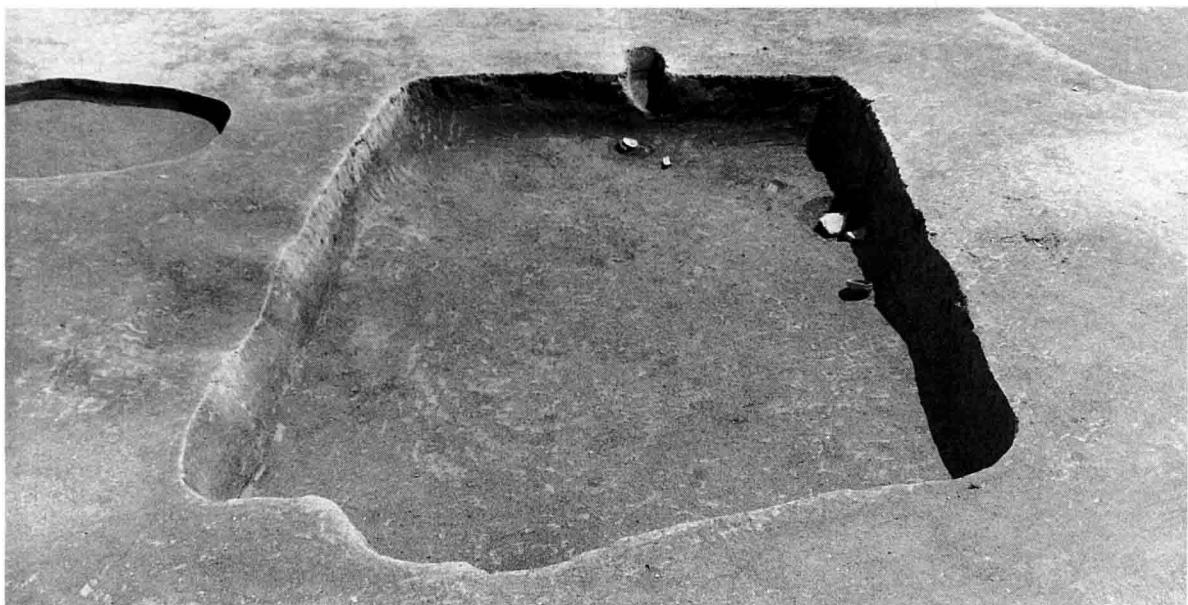
46図 25号住居址実測図



47図 25号住居址出土土器実測図



III-41 25号住居址、6号土坑、8号溝址



III-42 25号住居址

#### 26号住居址 (48図、III-43)

遺構 B調査区の東側中央に位置し、単独で検出された。近接遺構に6号土坑がある。形態は隅丸方形を呈する。主軸3.96m・南北軸3.92mの規模になる。掘り込みは東壁21cm・西壁23cm・南壁21cm・北壁30cmを測る。長軸方向はN50°Wを指す。カマドは東壁南寄りに構築され、調査では火床・焼土及び煙道の立ち上がりピット、支脚石抜取痕ピットを検出したにすぎない。柱穴は北西隅に長軸48cm・深さ18cm規模の楕円形を呈するもの1個確認した。また同所内側に隅丸長方形土坑が掘り込まれている。長軸94cm・短軸60cm・深さ24cmの規模のもので角礫が据え置かれていた。用途は不明である。

遺物 出土量は少なく、図上復元可能な土器片はない。器種には土師器甕・壺、須恵器壺がある。このほかに土錐（60図10）が出土している。甕・壺はそれぞれロクロによって仕上げられ、壺の底部外面には回転糸切り痕を残す。



III-43 26号住居址

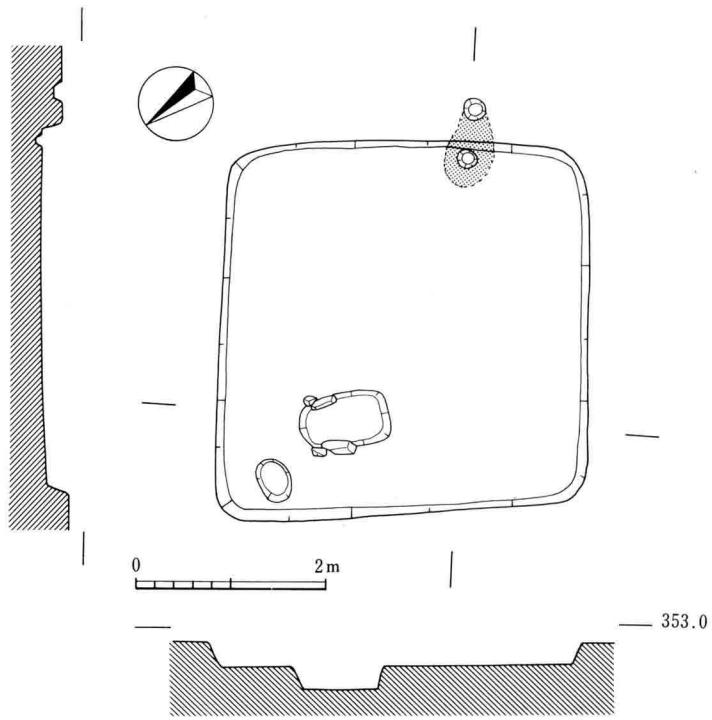
#### ピット群1 (8図、III-7)

遺構 A調査地の北東隅に展開する柱穴様土坑群で、調査では7個を検出した。直径35cm~70cm、深さ8cm~30cmの規模のものである。北側の4個はほぼ東西に等間隔で直列するが、総体として建物址にみられる配列にはならない。付近に近時の耕作による攪乱が認められ、さだかでないが北側へ広がる可能性もある。

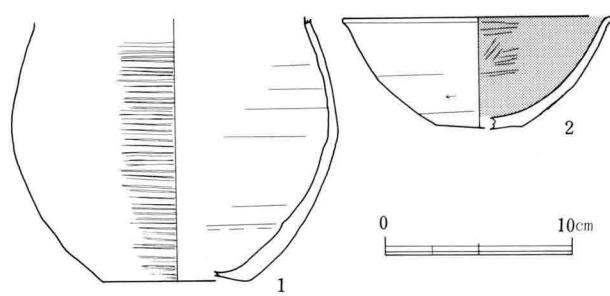
遺物 ピット中よりタテヘラケズリ調整でタタキ目痕を残す土師器甕、内面黒色を呈する壺、須恵器壺、灰釉陶器壺片が出土しているにすぎなく、図上復元可能なものはない。

#### ピット群2 (32・49図、III-32)

遺構 A調査区の15号住居址内及び北側に展開する12個のピットをもって1群とする。断面Dライン上の2個のピットは14号住居址からの溝状遺構に接合するもので、ピット内に角礫・焼土が見られ他のものと性格が異なる。他のものは規格性ある配列にならず建物址を想定することはできない。ただ小規模なものには3個、4個と連



48図 26号住居址実測図



49図 ピット群2出土土器実測図

らなる様相を見い出すことができるが何の施設であるか不明である。

遺物 出土量は少ない。器種には土師器甕（1）・壺（2）、灰釉陶器壺がある。1は小形の甕で、外面にカキ目を、底部外面に回転糸切り痕を残す。2の壺はロクロ調整で、内面は研磨され黒色処理される。

#### 1号土坑（27図、III-48・53）

遺構 1号・2号溝址にはさまれ、12号住居址と重複関係にあるが新旧関係は不明である。形態は長楕円形を呈するものと思われるが、長軸の規模は不明で、短軸0.65m・深さ28cmである。長軸方向はN20°Wを指す。

遺物 土師器壺片が2点出土しているにすぎない。

#### 2号土坑（50図、III-25）

遺構 A調査区の西端に位置し、近接遺構に10号・12号住居址がある。形態は隅丸三角形状を呈し、北側では2段掘りになる。覆土に炭化物を多く混入する。長軸1.6m・南北最大幅1.48m・深さ30cm程の規模になる。底面は平坦である。長軸方向はN50°Eを指す。

遺物 出土量は少ない。器種には土師器甕・壺、灰釉陶器壺がある。このほか花崗岩製磨石が出土している。甕の体部外面にはタタキ目を残し、壺の内面は研磨され黒色処理が施こされる。

#### 3号土坑（53図、III-45・46）

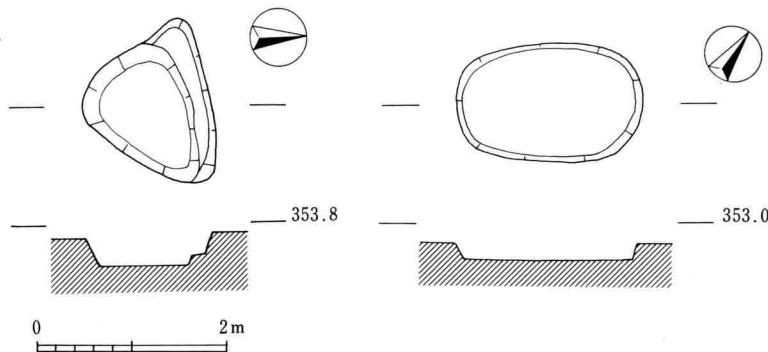
遺構 A調査区の西端に位置する。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.46m・短軸0.8m・深さ30cmの規模になる。底面は平坦で軟弱である。長軸方向はN17°Wを指す。

遺物 土師器壺片が3点出土しているにすぎない。

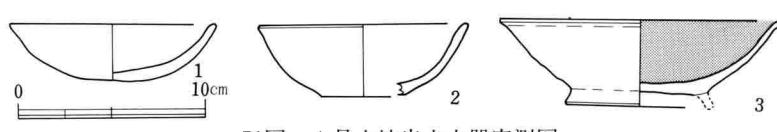
#### 4号土坑（29・51図、III-44）

遺構 13号住居址の東壁と重複関係にあり、これよりも古い遺構である。形態は不整楕円形を呈し、長軸1.8m・東西軸1.2m・深さ23cm程の規模になる。北側の底面は上端に対し10cm程えぐれ込む。底面はやや舟底状を呈し小さな凹凸がある。覆土に炭化物を多く含む。長軸方向はN20°Eを指す。

遺物 出土量は少ない。器種には土師器壺（1・2）・壺（3）、須恵器短頸壺がある。



50図 2号・6号土坑実測図



51図 4号土坑出土土器実測図



III-44 13号住居址、4号土坑



III-45 12号住居址、1号・3号土坑、1号・2号溝址

24)・坏(25・26)・灰釉陶器壺(27)がある。

#### 6号土坑(50図)

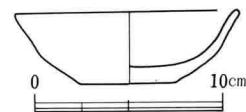
遺構 B調査区の東端に位置し、24号・25号住居址にはさまれる。形態は楕円形を呈し長軸1.96m・短軸1.24m・深さ18cmの規模になる。長軸方向はN56°Eを指す。底面は平坦で軟弱である。覆土は黒褐色砂質土であり、焼土・炭化物を多く含む。

遺物 出土量は少なく、図上復元可能なものはない。器種には土師器甕・坏がある。

### 1号溝址 (53図、III-46)

遺構 A調査区の西端に位置し、2号溝址と平行関係にある。両端は調査地域内で終結する。走行方向は中央部でN30°Wであるが、先端付近は西へ幾分弯曲する。直線全長14.3m・幅0.28~0.5m・深さ12~16cmの規模になり、断面U字形を呈する。この遺構に隣接して柱穴様ピット2個、3号土坑が西に展開しているのみで他の遺構はないことから推察すると集落を画するものとも考えられる。

遺物 土師器甕・壺の小破片が出土しているだけで図上復元可能なものはない。



52図 3号溝址出土  
土器実測図

### 2号溝址 (53図、III-46)

遺構 A調査区の西側に位置し、12号住居址と重複関係にあるが、時間差は不明である。1号溝址から約2.2mの距離にあり、併走する。北側の終結は12号住居址内にあるが残存規模は長さ4.3m・幅0.54~0.7m・深さ12cmを測る。

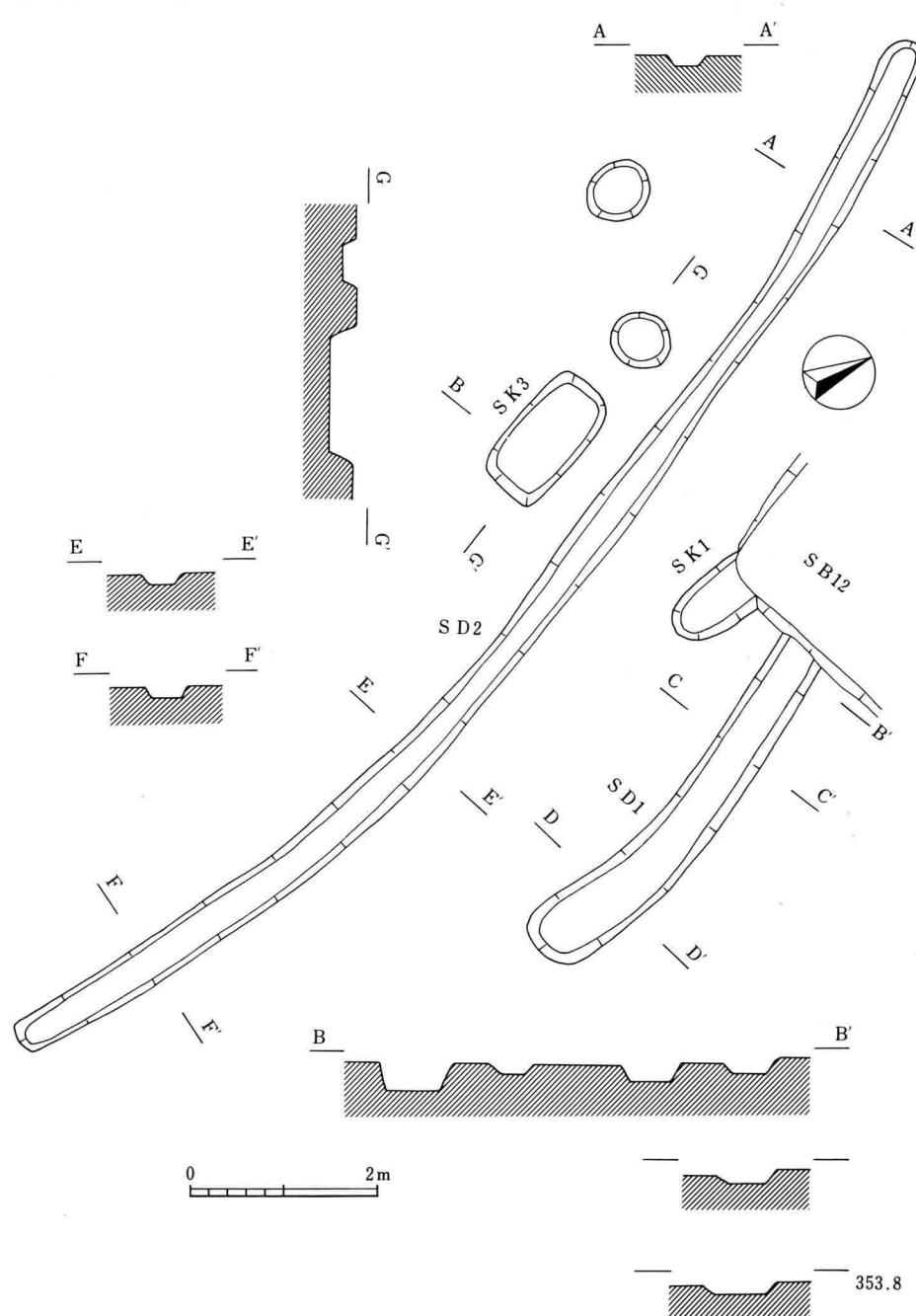
遺物 土師器壺片が1点出土したのみである。

### 3号溝址

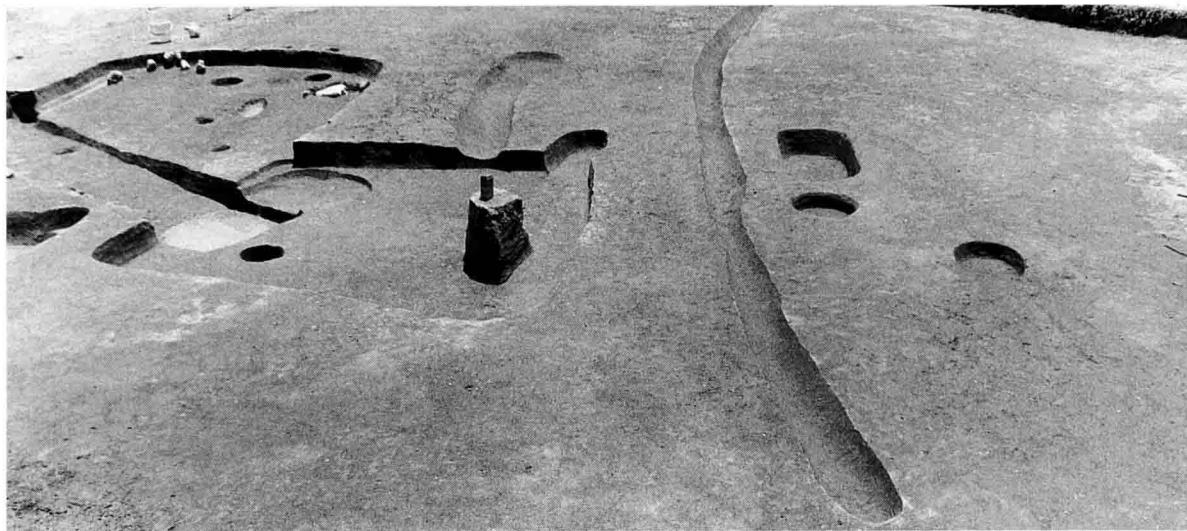
(13・52図、III-14)

遺構 4号住居址を南北に貫く。この遺構よりも古い。溝の掘り込み方向はN15°Wで、4号住居址の南壁付近で南端は終結する。断面形態はU字形を呈し、幅0.53~1.18mを測り、4号住居址床面からの深さは10~23cmの規模になる。底面の傾斜は南から北方向にある。

遺物 出土量は少ない。器種にはロクロ調整された土師器甕・壺、須恵器甕がある。壺の中には内面が黒色を呈するものもある。



53図 1号・3号土坑、1号・2号溝址実測図

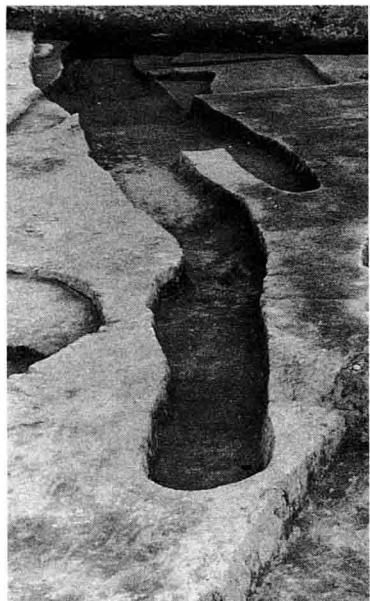


III-46 12号住居址、1号・3号土坑、1号・2号溝址（北より）

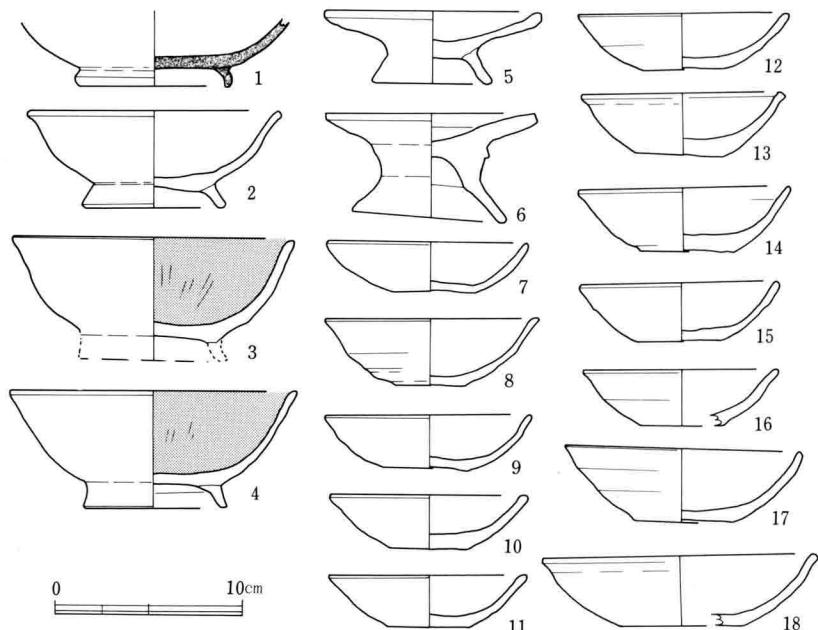
#### 4号溝址 (54・55図、III-47)

**遺構** A調査区の中央付近に位置し、15号・17号住居址、5号溝址と重複関係にあり、住居址遺構より新しく、溝址との時間差は不明である。走行は北西より南東に展開し、3本の溝址により構成され、検出全長は15m程である。北端は5号住居址の東壁に近接して終結する。幅0.7~1.0m・深さ22cm程の規模になる。この部位からの出土遺物は多い。中位のものは14号住居址東壁付近より掘り込まれ、約2m南方で上位のものと合体する。幅0.7m・深さ18~20cmを測る。合体部付近の幅は1.9mになる。下位のものは上位の溝右側に位置し、底面の掘り込み段差より時間差があるものと思われる。幅0.75~0.8m・深さ10cmの規模である。総体として底面は北から南方向に深くなる。南端付近の幅は1.15mで、標高基準線からの深さは北端部より32cm深くなる。

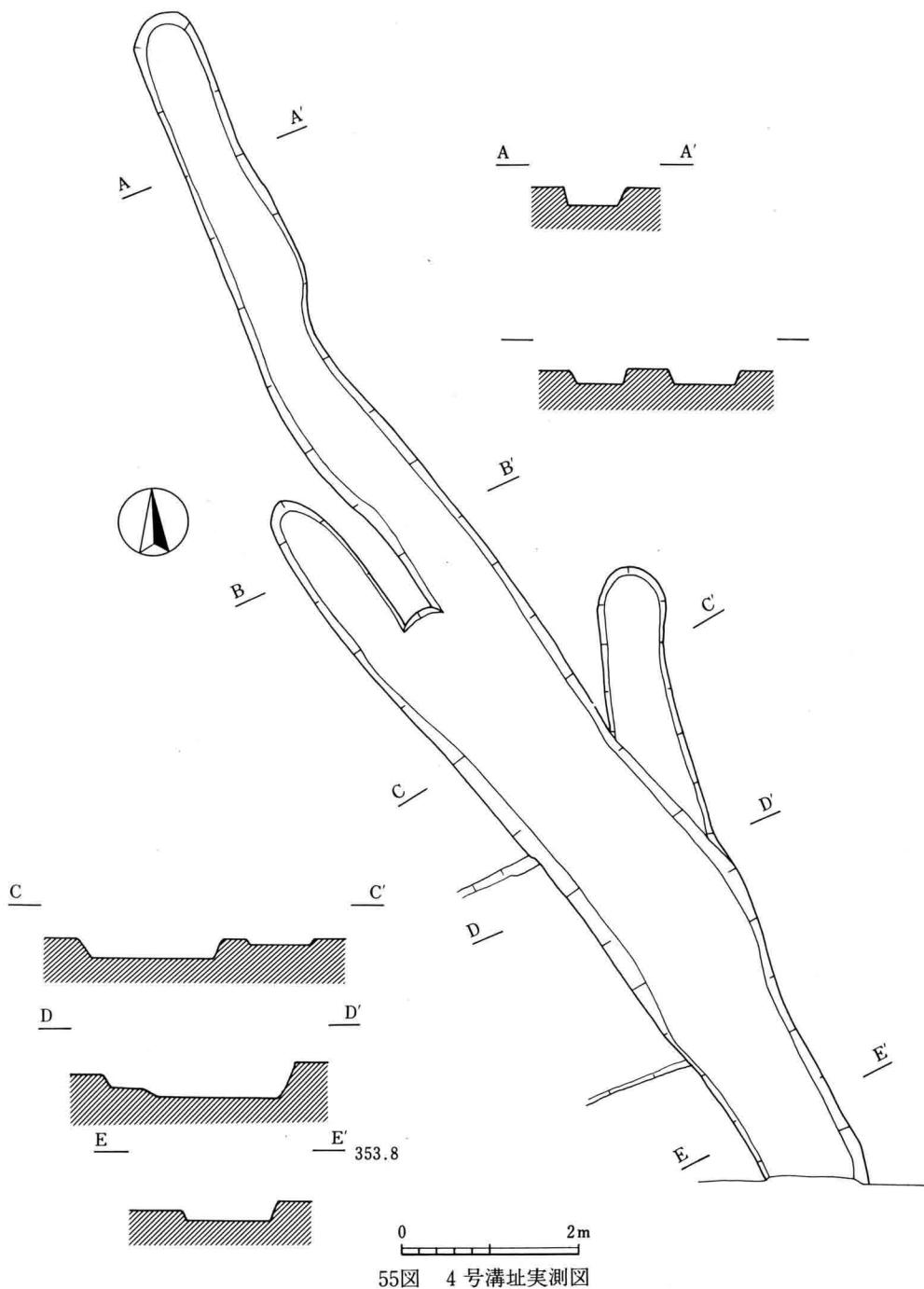
**遺物** 出土量は壺・塊類を主体に比較的多い。器種には土師器壺（7~18）・塊（2~4）・高脚皿（5・6）、灰釉陶器塊（1）がある。これらは全てロクロで仕上げられ、3・4の内面は研磨を受け黒色処理される。



III-47 4号溝址



54図 4号溝址出土土器実測図

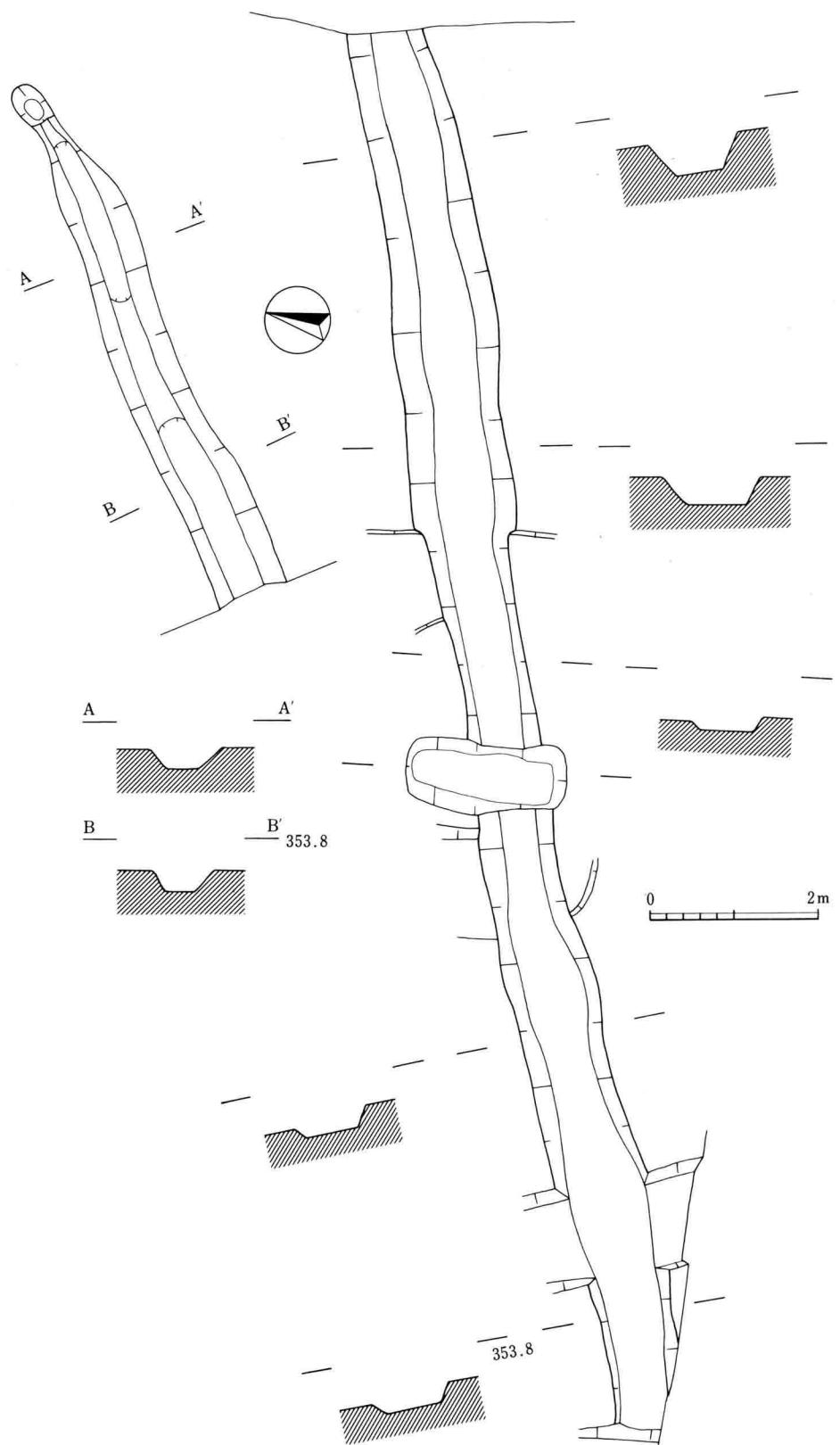


55図 4号溝址実測図

### 5号(7号)溝址(56図、III-5)

遺構 A調査区のものを5号、B調査区のものを7号としたが、東から南西方に展開する一連の溝址である。重複遺構に17号・18号住居址があり、これらよりも新しい。4号溝址と接して終結しているようであるが前後関係は不明である。検出全長は29.5m程になる。東端は柱穴状掘り込みをもって終結し、溝幅を増しながら西方に延びる。7号溝址は幅0.7~0.9m、深さ26~30cmを測る。底面は西に傾斜する。5号住居址は幅0.95~1.3mになるが、深さは東側で深くなる。東端の標高基準線からの深さは77cmを測るのに対し、西端は60cmである。

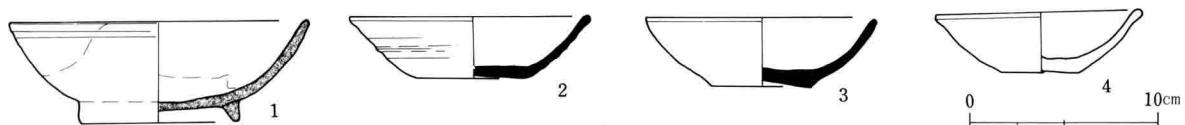
遺物 出土量は少なく、図上復元可能な土器片もない。器種には土師器甕・壺・壇、須恵器甕・壺がある。



56図 5号・(7号)号溝址実測図

#### 6号溝址 (37図、III-4)

遺構 A調査区の東端中央に位置し、19号住居址の北側を貫ぬくU字溝で、東端は市道内で、西端は20号住居址内でそれぞれ終結しているようである。溝址の走路は幾分南へ弯曲するがほぼ東西方向にある。調査範囲内の長さは約12mで、幅は0.68~1.0mを測る。基準断面線よりの深さは東端で65cm、中間付近で70cm、20号住居



57図 6号溝址出土土器実測図



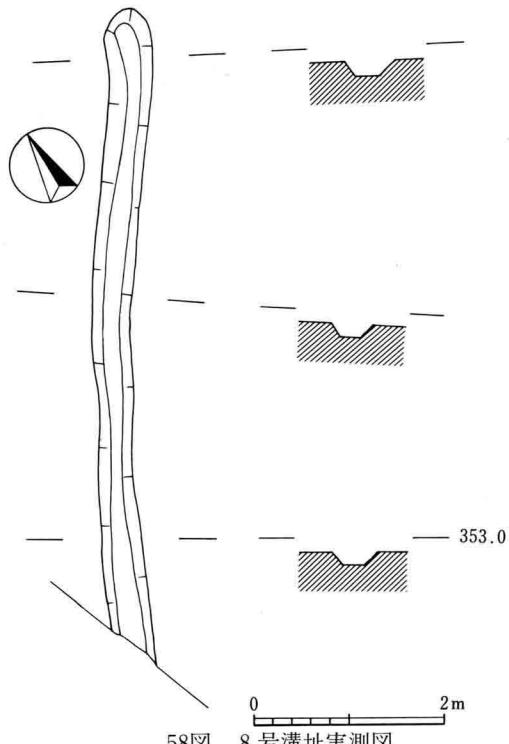
III-48 (7号)・5号溝址  
址との接点付近で72cmになり、底面は西に緩く傾斜する。

**遺物** 出土遺物は少なく、図上復元可能な土器片の出土は見られなかった。器種には土師器甕・壺・碗、須恵器壺・甕、灰釉陶器碗がある。壺・碗類の破片が多い。

#### 8号溝址 (58図、III-41)

**遺構** B調査区の東側遺構群のひとつで、単独で検出された。近接して東に23号・24号住居址がある。走行はN30°E方向を南に延び調査区域外へ至る。検出全長は6.9mである。幅0.35~0.4m・深さ14cm程の小規模なものである。覆土は他のものが黒褐色砂質土になるのに対し、粘質土になる。

**遺物** 土師器壺片が2点出土しているにすぎない。



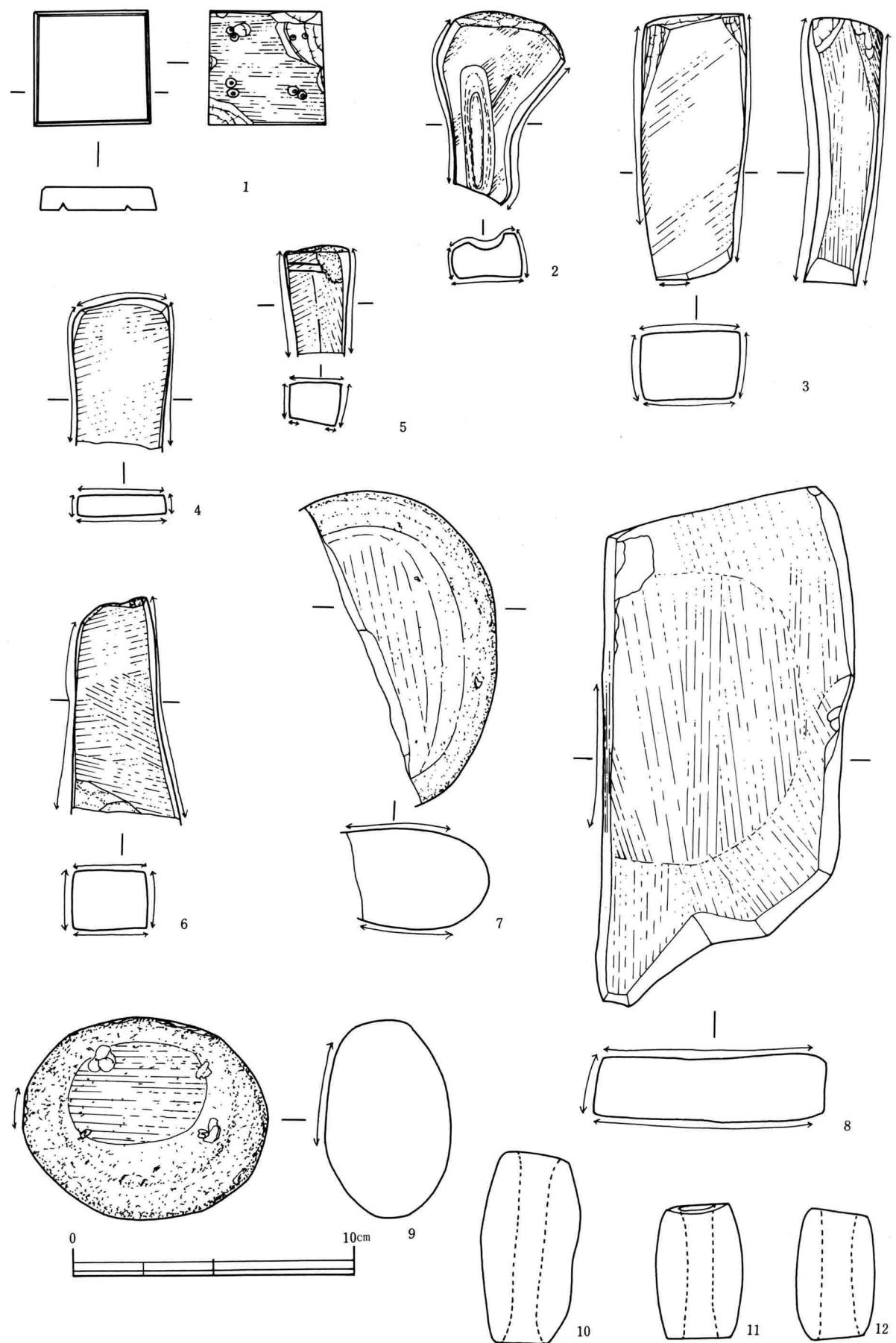
58図 8号溝址実測図

#### 遺出面出土遺物 (59図)

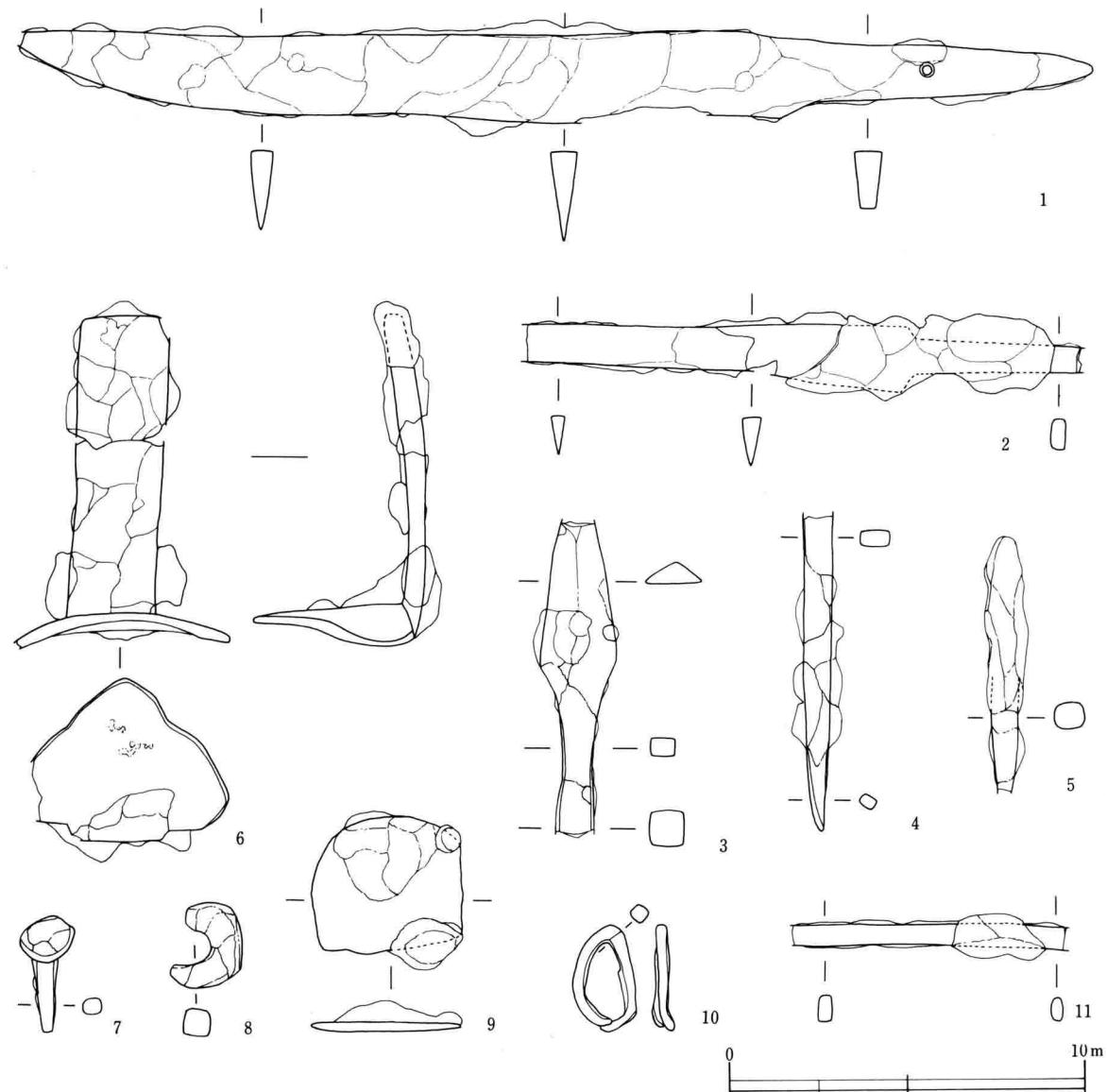
この地域を表採踏査した時点では土師器壺の小破片を1点採集しただけで、この1点がなければ試掘をためらったかもしれない程の散布状況であった。調査での表土除去の際多くの遺跡で認められる

遺物包含層がなく、土器の出土を確認するに至らない程希薄なものであった。このような状態の中で検出面の遺構として抽出したものは少量にすぎず、ほとんどの遺物は遺構に帰属する。59図1は高台の付される皿形のものであるが、皿部中央に円孔が穿たれ、内面には指頭ナデツケ圧痕が残る。外面はヘラケズリ調整である。2は土師器碗である。





60図 南宮遺跡出土石製品・土製品



61図 南宮遺跡出土鉄製品

#### 石製品（60図）

1 粘板岩製巡方（SB 4）、2 粘板岩製砥石（SB 2）、3 凝灰岩製砥石（SB 3）、4 同（SB10）、5 粘板岩製砥石（SB10）、6 砂岩製砥石（検出面）、7 安山岩製磨石（SB 2）、8 粘板岩製砥石（SB 5）、9 花崗岩製磨石（SK 2）

#### 土製品（60図）

10 土錘（SB26、(59) g）、11 同（SB23、39 g）、12 同（SB24、32 g）

#### 鉄製品（61図）

1 小刀（SB 5）、2 刀子（SB 3）、3 鉄鎌（SB 2）、4 鉄鎌茎（SB16）、5 不明（SB 8）、6 不明（SB14）、7 釘（SB 3）、8 不明（SB25）、9 不明（検出面）、10 不明（SD 5）、11 不明（SB23）

この他に鉄滓が2号・3号・16号住居址、4号溝址より出土し、特に16号住居址に多く見られた。これに関連する羽口は3号・19号住居址より2点出土したにすぎない。

## 遺物觀察表

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調製等	番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等								
			口径	底径	器高						口径	底径	器高										
2号住居址(9図)																							
1	土師器	羽釜	27.4		<7.5>	1/6	ヨコナデ・ヘラナデ	33	土師器	壺	9.6	4.9	2.0	1/4	ロクロ・回転糸切り								
2	土師器	羽釜		13.0	<5.0>	1/3	ナデ	34	土師器	壺	9.8	5.0	2.5	1/2	ロクロ・回転糸切り								
3	縁釉陶器	瓶把手			<4.4>			35	土師器	壺	9.1	3.1	4.6	1/5	ロクロ・回転糸切り								
4	灰釉陶器	段皿	11.8	6.1	2.7	1/3	つけ掛け釉	36	土師器	壺	9.8	4.5	2.9	1/2	ロクロ・回転糸切り								
5	灰釉陶器	段皿	12.8	6.9	2.4	1/2	つけ掛け釉	37	土師器	壺	9.7	4.3	2.4	3/4	ロクロ・回転糸切り								
6	灰釉陶器	碗	15.2		<4.7>	1/3	ロクロ	38	土師器	壺	8.8	4.1	2.6	2/3	ロクロ・回転糸切り								
7	灰釉陶器	長頸瓶		7.4	<5.0>	1/4	高台付	39	土師器	壺	9.0	3.8	2.2	1/3	ロクロ・回転糸切り								
8	土師器	碗	15.0	7.0	6.2	2/1	ロクロ・内黒	40	土師器	壺	9.8	5.4	2.4	1/4	ロクロ・回転糸切り								
9	土師器	碗	14.4	6.2	7.0	3/4	ロクロ・内黒	3号住居址(11・12図)															
10	土師器	碗	13.8	5.5	6.7	1/2	ロクロ・内黒	1	土師器	羽釜	20.2	8.0	22.3	1/3	ナデ								
11	土師器	碗	15.7	—	<5.7>	1/3	ロクロ・内黒	2	土師器	羽釜	19.5	13.0	20	2/3	ナデ								
12	土師器	碗・高脚	15.0	8.3	5.5	完	ロクロ・内黒	3	土師器	羽釜	20.3	—	<13.0>	1/2	ナデ								
13	土師器	碗・高脚	14.2	7.8	5.3	完	ロクロ	4	土師器	羽釜			<6.2>	底のみ	ナデ・筵状压痕								
14	土師器	碗・高脚	11.0	6.2	4.6	3/4	ロクロ・内外黒	5	灰釉陶器	皿	12.8	6.5	2.3	3/1	つけ掛け釉・重ね焼痕								
15	土師器	碗	10.2	6.2	4.6	3/4	ロクロ・内黒	6	灰釉陶器	碗		6.5	<2.3>	1/2	つけ掛け釉・重ね焼痕								
16	土師器	碗	9.0	4.0	3.2	2/3	ロクロ・回転糸切り	7	灰釉陶器	碗	15.8	8.6	6.3	1/3	つけ掛け釉・重ね焼痕								
17	土師器	碗	10.7	5.8	2.9	完	ロクロ・回転糸切り	8	灰釉陶器	碗	15.0	8.0	6.6	1/4	つけ掛け釉・重ね焼痕								
18	土師器	碗	10.3	3.1	3.7	1/3	ロクロ・回転糸切り	9	土師器	碗	—	5.2	<3.6>	3/4	ロクロ・内外黒								
19	土師器	碗	11.0	5.0	3.0	1/3	ロクロ・回転糸切り	10	土師器	碗		8.2	<5.0>	1/3	ロクロ・内外黒								
20	土師器	碗	9.9	4.0	3.3	1/2	ロクロ・回転糸切り	11	土師器	碗	16.0	6.4	7.0	1/2	ロクロ・内外黒								
21	土師器	碗	10.8	4.3	3.1	完	ロクロ・回転糸切り	12	土師器	碗	11.2	5.7	4.4	1/2	ロクロ・内黒								
22	土師器	碗	10.6	4.5	3.4	完	ロクロ・回転糸切り	13	土師器	碗	10.4	4.2	4.2	1/2	ロクロ・内黒								
23	土師器	碗	10.7	2.7	4.7	3/4	ロクロ・回転糸切り	14	土師器	碗	11.6	6.6	5.0	1/2	ロクロ・内黒								
24	土師器	碗	10.7	2.9	5.0	3/4	ロクロ・回転糸切り	15	土師器	碗	11.4	6.0	5.2	2/3	ロクロ・内黒								
25	土師器	碗	9.6	4.4	2.6	完	ロクロ・回転糸切り	16	土師器	碗	10.0	—	<3.5>	壺部	ロクロ・内黒・糊痕								
26	土師器	碗	11.3	7.0	3.4	1/2	ロクロ・回転糸切り・内黒・糊痕	17	土師器	碗	13.5	6.9	5.2	1/2	ロクロ・内黒								
27	土師器	碗	11.8	4.2	2.8	3/4	ロクロ・回転糸切り	18	土師器	碗	14.3	7.1	6.3	完	ロクロ・内黒								
28	土師器	碗	10.1	4.7	2.2	1/2	ロクロ・回転糸切り	19	土師器	碗	14.4	6.2	6.5	完	ロクロ・内黒								
29	土師器	碗	9.6	4.4	2.7	完	ロクロ・回転糸切り	20	土師器	碗	15.0	7.2	6.0	2/3	ロクロ・内黒								
30	土師器	碗	10.1	2.2	4.5	1/4	ロクロ・回転糸切り	21	土師器	碗	13.8	7.3	5.8	2/3	ロクロ・内黒								
31	土師器	碗	10.2	5.4	2.7	1/3	ロクロ・回転糸切り	22	土師器	碗	14.0	5.6	6.1	1/2	ロクロ・内黒								
32	土師器	碗	8.3	3.5	1.8	1/4	ロクロ・回転糸切り	23	土師器	碗	15.0	7.1	6.7	完	ロクロ・内黒								

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等	番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
24	土師器	碗	14.8	7.2	6.2	1/2	ロクロ・内黒	58	土師器	坏	10.1	5.0	2.9	1/3	ロクロ・回転糸切り
25	土師器	碗	14.4	7.4	5.8	1/2	ロクロ・内黒	59	土師器	坏	10.1	4.4	2.9	1/3	ロクロ・回転糸切り
26	土師器	碗	11.4	6.0	5.2	3/4	ロクロ・内黒	60	土師器	坏	10.6	3.7	3.7	1/3	ロクロ・回転糸切り
27	土師器	碗	15.0	6.9	6.1	1/3	ロクロ・内黒	61	土師器	坏	12.2	6.0	3.7	1/3	ロクロ・回転糸切り
28	土師器	碗・高脚	15.0	8.5	5.5	1/3	ロクロ・内黒	62	土師器	坏	10.8	4.2	3.4	1/2	ロクロ・回転糸切り
29	土師器	碗・高脚	14.0	7.4	5.1	1/3	ロクロ・内黒	63	土師器	坏	10.4	4.4	2.9	2/3	ロクロ・回転糸切り
30	土師器	碗・高脚	13.2	6.1	5.6	1/3	ロクロ	64	土師器	坏	9.7	4.5	2.2	1/4	ロクロ・回転糸切り
31	土師器	碗・高脚	14.3	8.3	5.8	1/3	ロクロ	65	土師器	坏	9.8	6.2	2.5	1/4	ロクロ・回転糸切り
32	土師器	碗・高脚	14.0	8.2	5.8	2/3	ロクロ	66	土師器	坏	10.2	4.5	2.6	1/4	ロクロ・回転糸切り
33	土師器	碗・高脚	14.0	6.8	5.4	1/3	ロクロ	67	土師器	坏	10.0	4.5	4.4	2/3	ロクロ・回転糸切り
34	土師器	碗・高脚	13.6	3.9	5.7	1/3	ロクロ	68	土師器	坏	9.8	5.0	2.7	2/3	ロクロ・回転糸切り
35	土師器	碗	14.0	7.3	4.5	1/3	ロクロ	69	土師器	坏	10.0	4.5	2.6	1/4	ロクロ・回転糸切り
36	土師器	碗・高脚	13.8	—	<4.1	脚なし	ロクロ	70	土師器	坏	10.0	4.5	2.3	2/3	ロクロ・回転糸切り
37	土師器	碗・高脚	14.7	14.1	4.3	1/3	ロクロ	71	土師器	坏	10.6	4.5	2.9	2/3	ロクロ・回転糸切り
38	土師器	坏	9.5	5.0	2.8	3/4	ロクロ・回転糸切り	72	土師器	坏	11.2	4.8	2.1	1/4	ロクロ・回転糸切り
39	土師器	坏	9.2	4.4	2.8	1/3	ロクロ・回転糸切り	73	土師器	坏	11.4	4.5	2.8	3/4	ロクロ・回転糸切り
40	土師器	坏	10.2	5.0	2.5	1/2	ロクロ・回転糸切り	74	土師器	坏	10.6	4.7	2.6	1/4	ロクロ・回転糸切り
41	土師器	坏	9.0	4.5	2.5	1/3	ロクロ・回転糸切り	75	土師器	坏	10.5	4.1	3.3	2/3	ロクロ・回転糸切り
42	土師器	坏	9.4	5.4	3.0	1/3	ロクロ・回転糸切り	76	土師器	坏	10.5	4.6	3.2	2/3	ロクロ・回転糸切り
43	土師器	坏	9.2	4.0	2.5	1/3	ロクロ・回転糸切り	77	土師器	坏	10.0	4.9	3.1	完	ロクロ・回転糸切り
44	土師器	坏	10.0	5.5	2.7	1/4	ロクロ・回転糸切り	78	土師器	坏	11.2	5.2	2.9	2/3	ロクロ・回転糸切り
45	土師器	坏	9.5	3.5	2.4	1/4	ロクロ・回転糸切り	79	土師器	坏	9.4	4.6	2.7	2/3	ロクロ・回転糸切り
46	土師器	坏	9.4	4.1	2.2	1/4	ロクロ・回転糸切り	80	土師器	坏	10.0	3.3	2.6	1/3	ロクロ・回転糸切り
47	土師器	坏	9.2	4.8	2.4	1/4	ロクロ・回転糸切り	81	土師器	坏	12.0	4.9	5.0	1/3	ロクロ・回転糸切り
48	土師器	坏	10.2	5.0	2.5	1/3	ロクロ・回転糸切り	82	土師器	坏	10.4	5.0	3.0	1/3	ロクロ・回転糸切り
49	土師器	坏	9.0	4.8	2.5	2/3	ロクロ・回転糸切り	83	土師器	坏	9.8	6.0	1.9	1/4	ロクロ・回転糸切り
50	土師器	坏	10.2	3.7	3.0	1/3	ロクロ・回転糸切り	84	土師器	坏	10.6	4.5	2.9	1/4	ロクロ・回転糸切り
51	土師器	坏	10.8	4.0	2.8	1/3	ロクロ・回転糸切り	85	土師器	坏	11.1	4.5	2.9	1/3	ロクロ・回転糸切り
52	土師器	坏	9.6	4.4	2.7	3/4	ロクロ・回転糸切り	86	土師器	坏	9.8	4.3	2.8	1/3	ロクロ・回転糸切り
53	土師器	坏	9.8	5.5	2.7	1/2	ロクロ・回転糸切り	87	土師器	坏	10.4	5.0	3.8	完	ロクロ・回転糸切り
54	土師器	坏	10.7	4.0	2.6	完	ロクロ・回転糸切り	88	土師器	坏	9.4	4.2	3.0	1/3	ロクロ・回転糸切り
55	土師器	坏	9.6	5.0	2.8	完	ロクロ・回転糸切り	89	土師器	坏	10.2	4.0	2.7	1/3	ロクロ・回転糸切り
56	土師器	坏	10.0	5.2	3.1	1/3	ロクロ・回転糸切り	90	土師器	坏	10.2	4.3	4.3	3/4	ロクロ・回転糸切り
57	土師器	坏	10.6	4.2	2.9	1/3	ロクロ・回転糸切り	91	土師器	坏	9.6	4.8	2.8	完	ロクロ・回転糸切り

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等	番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
92	土師器	壺	10.4	4.4	3.0	完	口クロ・回転糸切り	5	土師器	壺	8.5	4.3	1.8	完	口クロ・回転糸切り
93	土師器	壺	10.4	5.0	3.1	完	口クロ・回転糸切り	6	土師器	壺	9.0	4.6	2.2	2/3	口クロ・回転糸切り
94	土師器	壺	8.8	4.5	2.3	1/3	口クロ・回転糸切り	7	土師器	壺	9.0	5.0	1.8	完	口クロ・回転糸切り
95	土師器	壺	13.5	5.0	3.9	1/2	口クロ・回転糸切り	8	土師器	壺	—	7.0	<2.1>	1/3	口クロ・回転糸切り
96	土師器	壺	11.8	5.0	3.5	1/3	口クロ・回転糸切り	9	土師器	壺	17.4	7.0	5.5	1/3	口クロ・回転糸切り
97	土師器	壺	12.4	4.8	3.8	1/2	口クロ・回転糸切り	8号住居址 (20図)							
98	土師器	壺	12.5	4.8	3.8	1/2	口クロ・回転糸切り	1	土師器	壺	14.5	7.3	4.2	3/4	口クロ・回転糸切り
99	土師器	壺	10.9	5.5	3.0	完	口クロ・回転糸切り	9号住居址 (23図)							
100	土師器	壺	12.6	4.5	4.8	1/3	口クロ・回転糸切り	1	土師器	甕	23.4	—	<9.0>	1/4	ロクロ
101	土師器	壺	12.8	4.5	3.9	1/4	口クロ・回転糸切り	2	土師器	甕	23.0	—	<21.5>	1/4	ロクロ・タテヘラ削
102	土師器	壺	12.8	5.0	4.8	1/4	口クロ・回転糸切り	3	土師器	壺	15.4	6.0	6.2	1/4	ロクロ・内黒・回転ヘラ削り
103	土師器	耳皿	3.8	1.3	3.8	1/3	口クロ・回転糸切り	10号住居址 (25図)							
104	土師器	壺	13.6	5.5	4.8	1/2	口クロ・回転糸切り・内黒	1	土師器	甕	24.0	—	<13.9>	1/5	ロクロ・タタキ・ヘラ削
105	須恵器	甕	—	—	—	破片	タタキメ	2	土師器	羽釜	19.0	7.0	—	1/3	ナデ
5号住居址 (15図)								3	土師器	片口鉢	19.0	12.8	13.8	1/2	ナデ
1	土師器	壺	16.0	6.2	4.8	完	口クロ・回転糸切り	4	白磁	碗	16.2	6.6	6.2	1/6	白濁釉・削り出し高台
2	土師器	壺	15.0	7.2	4.0	完	口クロ・回転糸切り	5	土師器	壺	12.1	6.0	3.3	1/2	ロクロ・内黒
3	土師器	壺	14.8	7.0	4.1	完	口クロ・回転糸切り	6	土師器	壺	14.2	7.0	4.1	1/4	ロクロ・内黒
4	土師器	壺	15.0	7.3	4.5	完	口クロ・回転糸切り	11号住居址 (17図)							
5	土師器	壺	14.1	6.3	4.1	完	口クロ・回転糸切り	1	土師器	羽甕	26.0	—	<23.5>	1/3	鍔4個分離 (?)・ナデ
6	土師器	壺	17.0	8.8	4.2	完	口クロ・回転糸切り	2	土師器	羽甕	26.0	—	<18.5>	1/3	鍔4個分離 (?)・ナデ
7	土師器	壺	11.0	4.5	2.9	完	口クロ・回転糸切り	3	土師器	羽甕	27.4	—	9.0	1/3	鍔4個分離 (?)・ナデ
8	土師器	壺	9.0	4.2	2.1	完	口クロ・回転糸切り	4	土師器	羽甕	—	—	—	破片	鍔全周・ナデ
9	土師器	壺	9.0	4.9	2.2	完	口クロ・回転糸切り	5	白磁	碗	14.8	6.3	5.3	1/3	白濁釉・削り出し高台
10	土師器	壺	9.0	4.9	2.0	完	口クロ・回転糸切り	6	土師器	碗	10.0	5.0	3.3	1/3	ロクロ
11	土師器	壺	8.2	3.8	1.9	1/5	口クロ・回転糸切り	7	土師器	碗	14.8	6.0	5.0	2/3	ロクロ
12	土師器	蓋(皿)	10.6	—	<1.0>	1/2	ロクロ	12号住居址 (26図)							
13	土師器	塊	—	6.5	<3.2>	1/3		1	灰釉陶器	塊	—	7.0	<1.4>	底部	
14	灰釉陶器	瓶	—	19.2	<8.0>	1/4		2	灰釉陶器	壺	—	20.0	<4.8>	1/6	
7号住居址 (19図)								3	土師器	壺	12.2	6.1	3.0	1/2	ロクロ・回転糸切り・内面研磨
1	灰釉陶器	塊	—	8.6	<2.0>	1/2	つけ掛け釉	13号住居址 (28図)							
2	土師器	壺	9.2	4.0	2.5	完	ロクロ・回転糸切り	1	土師器	壺	—	6.3	<1.5>	底部	ロクロ・回転糸切り
3	土師器	壺	9.1	3.9	2.7	完	ロクロ・回転糸切り	2	土師器	壺	8.8	3.7	2.0	2/3	ロクロ・回転糸切り
4	土師器	壺	9.0	5.2	2.1	完	ロクロ・回転糸切り	14号住居址 (31図)							

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等	番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
1	土師器	甕	23.4		<9.5>	1/3	ロクロ	7	土師器	壺	12.8	5.0	3.5	1/2	ロクロ・回転糸切り
2	灰釉陶器	碗	15.3		<5.0>	1/4	つけ掛け釉	8	土師器	壺	12.8	5.5	3.0	3/4	ロクロ・回転糸切り
3	土師器	碗	15.1	7.0	6.2	2/3	ロクロ	9	須恵器	甕	—	—	—	破片	ヨコナデ
4	土師器	壺	13.9	7.6	5.5	1/2	ロクロ	19号住居址 (38図)							
5	土師器	壺	11.6	7.5	5.0	2/3	ロクロ・内黒	1	灰釉陶器	碗		7.6	<1.5>	底部	つけ掛け釉・重ね焼痕
6	土師器	壺	16.0	8.6	6.6	1/4	ロクロ・内黒	2	灰釉陶器	碗		7.2	<2.0>	底部	つけ掛け釉
7	土師器	壺	13.0	7.6	5.4	2/3	ロクロ	3	灰釉陶器	碗		7.6	<1.5>	底部	つけ掛け釉
8	土師器	壺	13.6	7.2	6.4	完	ロクロ	4	灰釉陶器	碗		6.0	<2.0>	底部	つけ掛け釉
9	土師器	壺	10.2	4.7	3.2	完	ロクロ・回転糸切り	5	土師器	壺	10.9	4.0	3.5	3/4	ロクロ・回転糸切り
10	土師器	壺	11.0	4.5	3.8	1/3	ロクロ・回転糸切り	6	土師器	壺	10.0	4.7	2.8	3/4	ロクロ・回転糸切り
11	土師器	壺	11.4	3.7	4.0	完	ロクロ・回転糸切り	7	土師器	壺	11.5	5.1	2.8	1/3	ロクロ・回転糸切り
12	土師器	壺	11.5	4.5	3.3	完	ロクロ・回転糸切り	8	土師器	壺	10.2	4.0	3.3	1/2	ロクロ・回転糸切り
13	土師器	壺	10.2	4.2	3.5	1/3	ロクロ・回転糸切り	9	土師器	壺	10.8	3.5	2.5	1/3	ロクロ・回転糸切り
14	土師器	壺	11.7	4.2	3.4	1/3	ロクロ・回転糸切り	10	土師器	壺	9.5	4.5	2.4	1/3	ロクロ・回転糸切り
15	土師器	壺	10.1	4.5	3.3	完	ロクロ・回転糸切り	20・22号住居址 (40図)							
16	土師器	壺	12.1	5.5	3.4	3/4	ロクロ・回転糸切り	1	須恵器	壺	(13.0)	—	6.4	1/2	ロクロ・回転糸切り
17	土師器	壺	11.5	5.8	3.5	完	ロクロ・回転糸切り・内黒	2	土師器	碗	15.6	—	<6.7>	1/3	ロクロ・内黒
18	土師器	壺	14.0	7.2	4.2	完	ロクロ・回転糸切り	3	土師器	甕	22.6	—	<9.7>	1/5	ロクロ
19	土師器	壺	10.5	4.5	2.5	1/3	ロクロ・回転糸切り	4	土師器	甕	—	6.4	<1.8>	底	ロクロ
20	土師器	壺	11.6	4.2	3.5	完	ロクロ・回転糸切り	5・6	灰釉陶器	碗	16.0	5.0	14.0	1/2	つけ掛け釉
21	土師器	壺	11.3	4.5	3.2	完	ロクロ・回転糸切り	7	灰釉陶器	碗	18.0	8.0	6.0	1/4	つけ掛け釉
22	土師器	壺	11.6	5.0	3.1	1/2	ロクロ・回転糸切り	8	土師器	壺	11.4	4.4	3.4	1/2	ロクロ・回転糸切り
23	土師器	壺	11.4	5.0	3.1	完	ロクロ・回転糸切り	9	土師器	碗	14.0		<3.7>	1/4	ロクロ
24	土師器	碗	15.6	7.5	5.0	1/3	ロクロ	10	土師器	甕	18.3		<5.5>	1/6	ヨコヘラ削り
25	土師器	壺	10.7	5.0	3.6	1/2	ロクロ・回転糸切り・内黒	11	土師器	小甕	15.3		<5.5>	1/5	ロクロ
26	土師器	壺	10.8	4.0	3.4	1/2	ロクロ・回転糸切り	12	土師器	壺	14.8	6.0	4.5	1/4	ロクロ・内黒・回転ヘラ削り
27	灰釉陶器	短頸壺	—	—	—	1/5		13	土師器	壺	13.3	5.5	4.8	2/3	ロクロ・内黒・回転ヘラ削り
16号住居址 (34図)								14	須恵器	壺	(13.0)	6.4	(3.4)	1/3	ロクロ・回転糸切り
1	土師器	甕	12.0	—	<21.3>	1/6	ロクロ・タタキ	15	須恵器	長頸壺	5.6	—	<4.5>	1/3	
2	灰釉陶器	碗	17.8	—	<3.6>	1/5	つけ掛け釉	21号住居址 (42図)							
3	土師器	碗	14.0	6.0	6.5	1/3	ロクロ・内黒	1	土師器	甕	22.0	—	<5.5>	1/3	ロクロ
4	土師器	碗	14.2	6.5	6.6	1/3	ロクロ・内黒	2	灰釉陶器	碗	16.2	—	<4.0>	1/5	つけ掛け釉
5	土師器	碗	14.9	8.2	4.9	1/3	ロクロ	3	灰釉陶器	碗	—	6.8	<2.5>	1/5	つけ掛け釉
6	土師器	壺	12.4	5.0	3.7	1/3	ロクロ・回転糸切り	4	土師器	壺	13.0	—	2.8	1/3	ロクロ

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等	番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等								
			口径	底径	器高						口径	底径	器高										
24号住居址 (45図)																							
1	土師器	甕	24.4	—	13.5	1/4	ロクロ・タテハ ケナデ	5	土師器	高脚皿	11.5	6.4	3.9	1/3	ロクロ								
2	土師器	甕	23.0	—	10.0	1/5	ロクロ・ヘラ削 り	6	土師器	高脚皿	11.2	8.2	5.5	完	ロクロ								
3	土師器	小甕	—	6.5	<4.5>	2/3	ロクロ・回転糸 切り	7	土師器	坏	10.7	4.2	2.7	1/2	ロクロ・回転糸 切り								
4	灰釉陶器	塊	—	5.5	<2.2>	1/2	つけ掛け釉	8	土師器	坏	11.4	3.7	3.6	2/3	ロクロ・回転糸 切り								
5	須恵器	坏	13.6	6.4	4.0	1/3	ロクロ・回転糸 切り	9	土師器	坏	11.0	4.5	3.0	完	ロクロ・回転糸 切り								
6	土師器	坏	13.2	6.7	4.3	1/3	ロクロ・回転糸 切り・内黒	10	土師器	坏	10.5	4.2	2.9	1/3	ロクロ・回転糸 切り								
7	須恵器	甕	21.8	18.6	(55.0)	1/2	タタキメ	11	土師器	坏	10.5	4.1	2.8	1/3	ロクロ・回転糸 切り								
25号住居址 (47図)																							
1	土師器	甕	19.2	—	<9.0>	1/4	ロクロ・ヘラ削 り	13	土師器	坏	10.8	4.7	3.3	完	ロクロ・回転糸 切り								
2	土師器	甕	20.5	—	<4.5>		ロクロ・ヘラ削 り	14	土師器	坏	11.3	5.0	3.4	完	ロクロ・回転糸 切り								
3	土師器	甕	24.4	—	<8.8>	1/5	ロクロ・ヘラ削 り	15	土師器	坏	10.7	4.2	3.1	2/3	ロクロ・回転糸 切り								
4	土師器	坏	12.0	5.5	5.5	完	ロクロ・回転糸 切り	16	土師器	坏	10.4	4.5	3.0	2/3	ロクロ・回転糸 切り								
5	土師器	坏	12.5	5.5	4.0	完	ロクロ・ヘラ削 り	17	土師器	井	12.7	5.1	3.8	2/3	ロクロ・回転糸 切り								
6	土師器	坏	11.9	5.5	4.8	2/3	ロクロ	18	土師器	坏	14.7	6.2	3.7	1/3	ロクロ・回転糸 切り								
6号溝址 (57図)																							
7	土師器	坏	12.2	6.0	5.0	1/3	ロクロ・回転糸 切り	1	灰釉陶器	塊	16.0	8.0	5.3	2/3	つけ掛け釉								
8	土師器	坏	12.4	6.4	5.0	2/3	ロクロ・回転糸 切り	2	須恵器	坏	12.6	5.5	3.2	2/3	ロクロ・回転糸 切り								
9	土師器	坏	12.2	5.5	5.2	1/3	ロクロ・ヘラ削 り	3	須恵器	坏	12.2	5.2	3.7	1/4	ロクロ・回転糸 切り								
10	須恵器	甕	—	15.0	<8.0>	1/5	ヘラナデ・ヨコ ナデ	4	土師器	坏	10.8	4.0	3.0	完	ロクロ・回転糸 切り								
11	須恵器	坏	12.4	4.9	4.0	完	ロクロ・回転糸 切り	検出面 (59図)															
ピット群2 (49図)																							
1	土師器	小甕		7.6	13.9	1/4	カキメ	1	土師器	器台 (?)	8.6		3.6	1/3	ヘラ削り・指頭 圧痕								
2	土師器	坏	14.4	4.7	5.8	1/4	ロクロ・回転ヘ ラ削り	2	土師器	塊		6.0	<2.6>	1/2	ロクロ・回転糸 切り								
4号土坑 (51図)																							
1	土師器	坏	11.0	2.8	4.0	完	ロクロ・回転糸 切り	1	土師器	坏	11.0	2.8	4.0	完	ロクロ・回転糸 切り								
2	土師器	坏	11.0	3.7	4.4	1/2	ロクロ・回転糸 切り	2	土師器	坏	11.0	2.8	4.0	完	ロクロ・回転糸 切り								
3	土師器	塊	14.9	4.7	8	1/3	ロクロ	3	土師器	坏	11.0	2.8	4.0	完	ロクロ・回転糸 切り								
3号溝址 (52図)																							
1	土師器	坏	11.9	5.0	3.7	2/3	ロクロ・回転糸 切り	1	土師器	坏	11.9	5.0	3.7	2/3	ロクロ・回転糸 切り								
4号溝址 (54図)																							
1	灰釉陶器	塊		8.0	<3.7>	1/5	つけ掛け釉	1	土師器	坏	11.9	5.0	3.7	2/3	ロクロ・回転糸 切り								
2	土師器	塊	13.4	5.1	14.0	1/3	ロクロ	2	土師器	坏	11.9	5.0	3.7	2/3	ロクロ・回転糸 切り								
3	土師器	塊	15.0	—	<5.2>	坏部	ロクロ・内黒	3	土師器	坏	11.9	5.0	3.7	2/3	ロクロ・回転糸 切り								
4	土師器	塊	15.2	7.7	6.2	1/2	ロクロ・内黒	4	土師器	坏	11.9	5.0	3.7	2/3	ロクロ・回転糸 切り								

## IV 結 語

調査は南宮遺跡の南側一部分を実施したにすぎないが、川中島扇状地の歴史事業に係る大きな問題点を投げかけている。それらを思いつくまま記載して結語といたしたい。

A地区に於ける遺構の検出面は、表土下20~30cm、またこの遺跡の特徴的なことに小さな軽石が多く確認されたことである。これらの事象は平安時代末期以降の堆積がそれほど進んでいないことからみて、犀川による影響はほとんどなく、むしろ千曲川の氾濫原であったことをうかがわせる。千曲川の洪水を受けたとしても軽石を置いていく程だから、それ程の被害を受けたとは思えず、集落立地上安定した地域とも言える。このことは10世紀代には川中島扇状地に斗女・池郷・氷鉋郷が成立しており、高い人口密度と生産力があったであろうことはII章歴史的環境で触れたとおりである。更に古代東山道支道（越後道）が布施五明・布施高田を経て亘理駅に至ると考えられていることから10世紀代には少なくとも川中島扇状地南部は地理的に安定をみたことをうかがわせる。

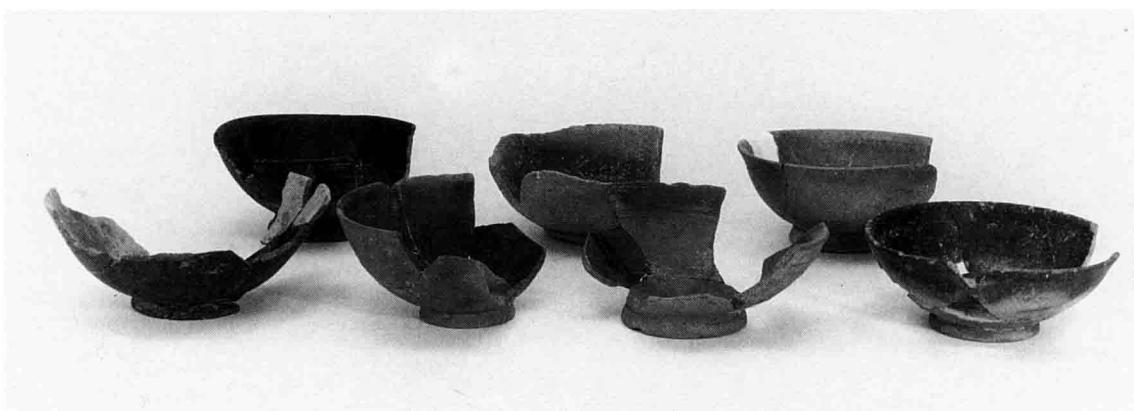
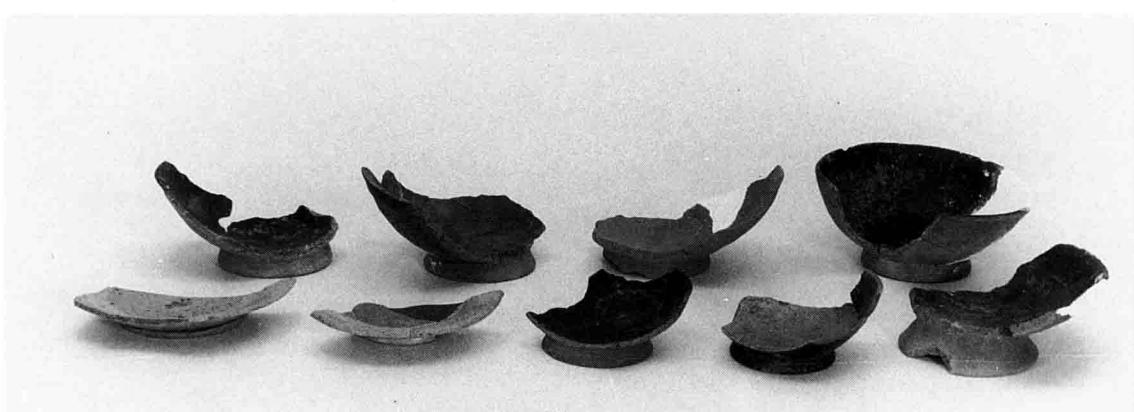
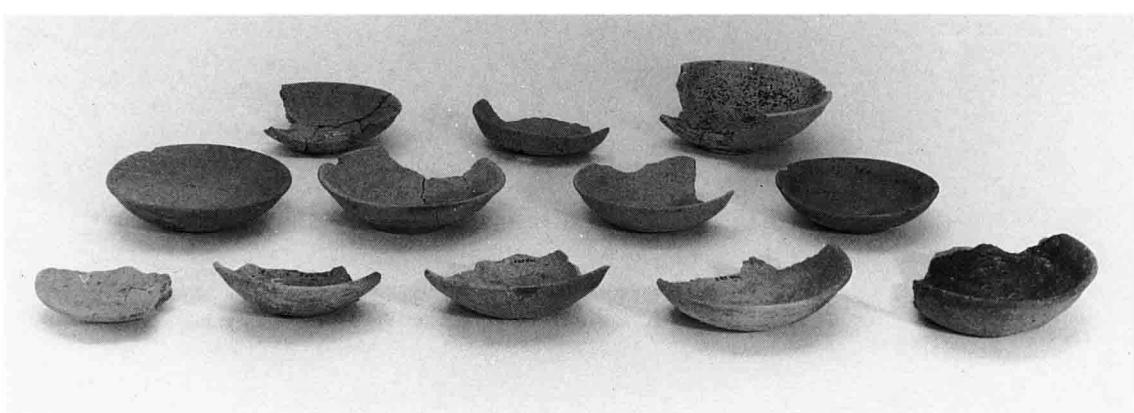
田中沖遺跡では古墳時代後期には集落が営まれるのに対し、南宮遺跡では平安時代まで待たねばならない。その成立時期の相違を川中島扇状地扇端部の平坦に近い所に位置する前者と扇央部寄りの緩斜面上遺跡所在という後者との立地差に求める。もとより主たる生産面を微高地両側の凹地水田面を推定し、南宮遺跡成立時には犀川からの取水が行われ、この地まで引水された結果といえよう。

南宮遺跡に於る集落形成は、調査地中央を横断する市道篠ノ井中225号線を境に地形の変換が見られ、東斜面上のB地区住居址から開始される。住居形態は不整隅丸長方形を呈するもので、長軸の規模は4m前後を測る小形なものである。カマドは壁中央よりやや隅に寄った所に構築され、明確な主柱穴を持たない。20号~23号住居址を初期の遺構として上げることができ、須恵器が器種組成の一端を担っている段階のもので、中でも25号住居址出土の壺底部には回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリ・回転糸切り痕が残存し、体部が内湾しながら立ち上がり器高の高い特色から8世紀末葉の年代を与え、他は灰釉陶器の出土を考慮して9世紀後半後葉に比定されよう。

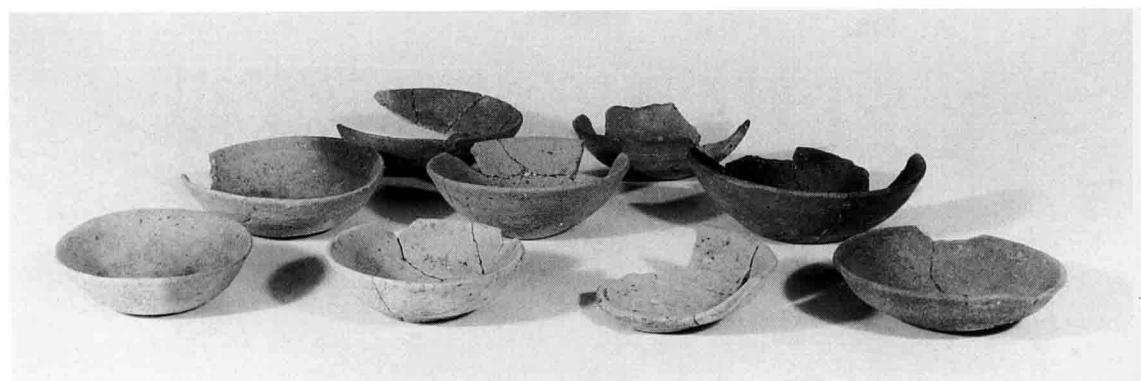
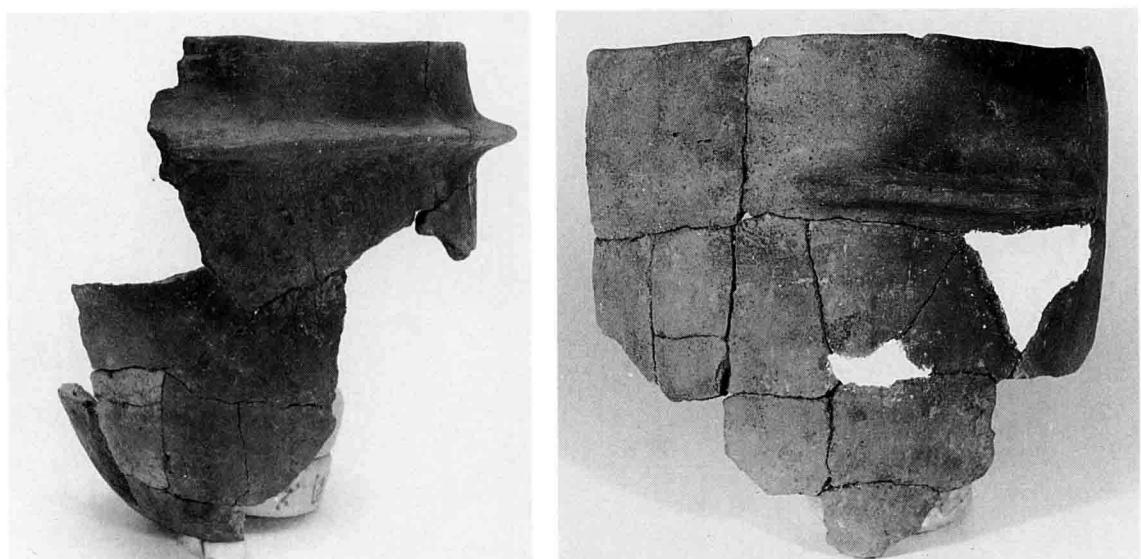
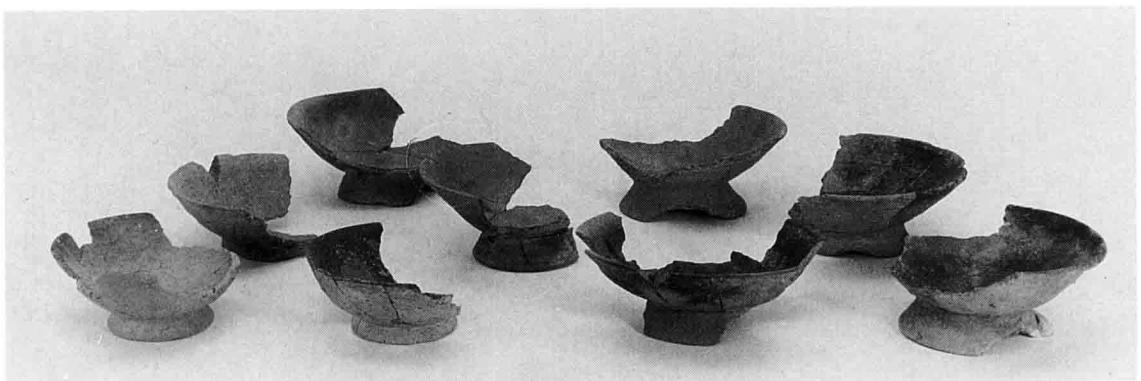
南宮遺跡の終焉は、10号・11号住居址出土の輸入白磁を根拠として12世紀初頭に置く。カマドの位置及び形態から共通する住居址を抽出すると、5号・9号~11号がある。住居形態は長軸5m前後の不整隅丸形を呈し、主柱穴を有し、カマドが南東隅に構築される。カマドの形態は廃棄石材・火床等から小規模な石芯両袖型が予想され、5号は両側を壁外に突出し、9号・11号のものは右側のみ突出し、8号・10号は張り出さないが変形する。多分に同時期存在のものと考えるが、これらの住居址からの出土量は少なく、混入品の恐れもあるものもあり、12世紀の土器群と認識するには問題がある。ただ5号のものは東濃系灰釉陶器壺の存在及び土師器小皿形壺が倭小化し、碗形のものが減少し、11号においては碗が壺形に限られる等の点を重視し、白磁併行期の土器と考えたい。9号住居址出土の土師器甕・壺はピット群2との係わりから混入品の可能性が高い。

次に2号・3号住居址の遺構・遺物のあり方の問題である。貼り床状遺構をもって両者を分離したが、遺物から新旧の差が判然としなく、3号住居址の埋没は自然堆積によっていることを考慮すると田中沖遺跡II19号住居址にみられた内包住居址とも考えられる。規模は外周長軸8.02m、内周6.56mを測る大形のもので、東壁南寄りに大形のカマドが構築される。食膳具を中心に多量の土器類が出土しており、その性格を歴史事象の中に求める。田中沖遺跡・南宮遺跡は斗女郷内の位置が予想され、11世紀代の遺構・遺物はこれを継承する富部御厨と大きなかかわりのあった集落であったことは疑いなく、炭化物・焼土等が多量に検出されることを共通にしていることから中世の幕あけ的事変の渦中にあったと予見される。特に南宮遺跡においては白磁の出土、灰釉陶器の量が多く、更に鉄滓の量も多い点庶民的な遺跡より優位な立場にある遺跡であることは間違ひなかろう。

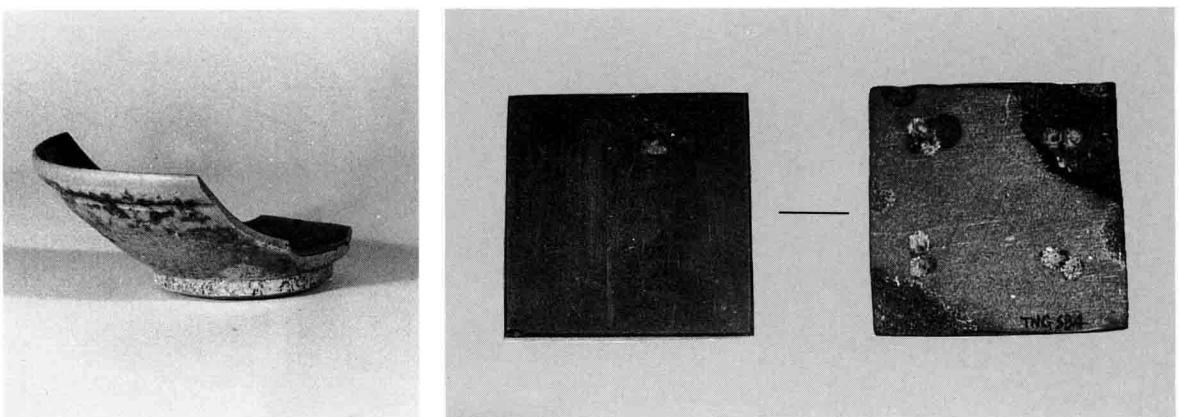
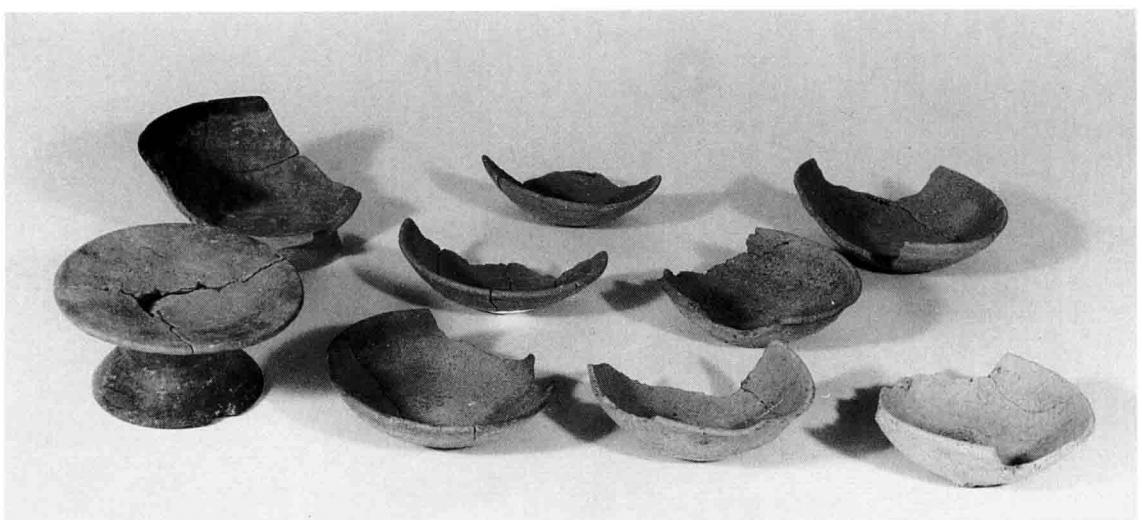
図版一 二号（上・中上・中下）・三（下）住居址出土土器

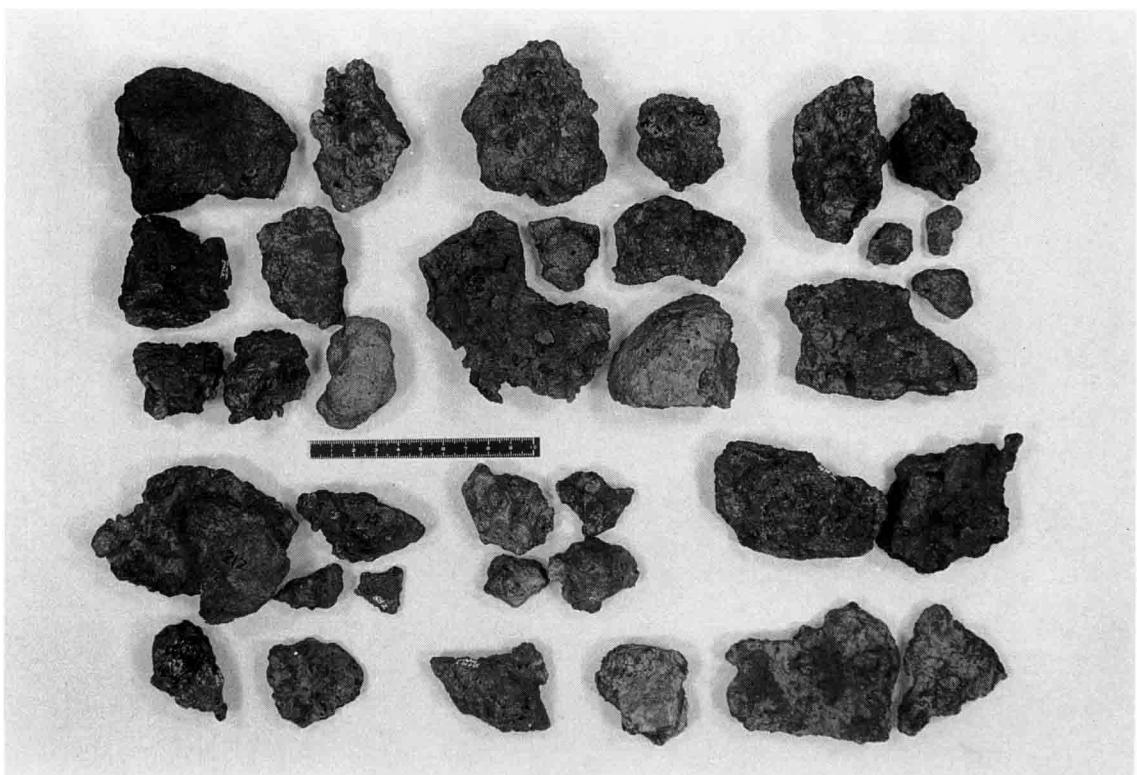
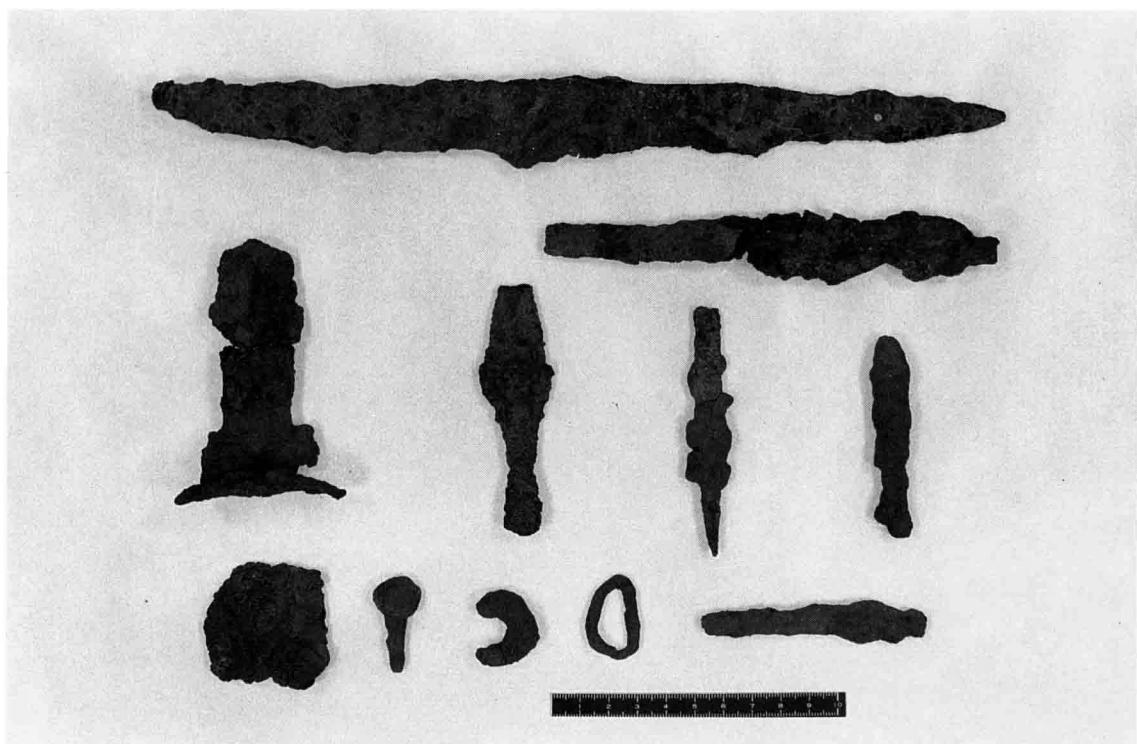


図版二 三号（上・中上左）・十一号（中上右）・十四号（中下・下）住居址出土土器



圖版三 四號溝址（上）、十一號（中左·白磁）·四號（中右·巡方）住居址出土遺物、石製品·土製品（下）





鐵滓出土遺構

SB16

SB 3

SB 4

SB 2

SB19  
SK14 SB18

SB20  
SB14

長野市の埋蔵文化財第43集  
南 宮 遺 跡

平成 4 年 3 月 25 日 印刷  
平成 4 年 3 月 30 日 発行

編 集 長 野 市 教 育 委 員 会  
発 行 長野市埋蔵文化財センター

印 刷 信 每 書 稽 印 刷 株 式 会 社